
ポケモンレンジャー・フィーリンター

プラネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンレンジャー・フリーリントー

【Nコード】

N8207H

【作者名】

プラネット

【あらすじ】

6年前の災厄から生き延びた少年がレンジャーの道を行く。しかし、心に深い復讐の憎悪を燃やし……。――。

プロローグ（前書き）

挑戦です！（笑）

ブローグ

「キャプチャ、オン！」

この言葉を聞いた事のある人は多いだろう。

そう、ポケモンレンジャーである。

彼等は人々が困っている事をポケモンと協力していく事で解決する現在職業になりたいでトップ3に男女共に入る夢の職業だ。

……あ、現実の方ではありませんのでご注意を。

しかし、このポケモンレンジャーになるにはそれ相応の苦勞が伴う。それに勇氣も必要だ。

これらの事からレンジャーになれる者は仮にレンジャーを夢見る100人の子供がいたとして、なれるのは僅かに数人という狭き門なのだ。

そして、世界にはこのレンジャーの中でも特に指折りの実力者をトップレンジャーと呼ぶ。このトップレンジャーは過去12人いたが、今では僅かに4人しかいない。それは何故かって？

説明しても構わないが、衝撃的過ぎる事を話す事になる。
それでも構わない人は、下を見ていってくれ。

過去にいた12人のトップレンジャーのほとんどは何者かにより……

殺害されてしまったのだ。

衝撃的過ぎたかもしれない。

しかし、それは今から6年前の話だから、凄くまだ最近、とも言える。ちょうど6年前、2人のレンジャーがこのトップレンジャーの候補に挙げられた。

そう、それがゲームポケモンレンジャーに出てきた主人公コンビなのだ。まあ、舞台はフィオレ地方の初代の2人なのだが。

そして、今回の物語はその話から6年後の物語。

しかし、その前にまたかも知れないがある事件のお話をさせて貰いたい。

それはこの場では収まり切らない。それにストーリーを語る上でとても重要になる話になる。

では、その話を始めていこう……。

——5年前、フィオレ地方。

フィオレ地方は人々が自然を大切するととても平和な地方だ。

そこに2人のレンジャーがいた。レンジャーの制服は赤と決まっている。一応、基本的にはだが。

環境によつては厚着をしたりしてもいる。

1人は水色の髪の子、もう1人は藍色の髪をした男子である。男子の髪は群青色かもしれない。

何分、作者は色に関して興味がまるつきり無いのが原因である、勘弁して戴きたい。

しかし、この2人は男子、女子、というよりは少年、少女とも言えよう。

その後ろにくつつくはプラスルとマイナン。両者共、姿はそっくりだが、プラスルは所々赤く、逆にマイナンはプラスルでその赤い場所が水色というポケモンだ。

少年が口を開いた。

「任務終わったねー」

「相変わらず軽いんだから……」

「ヒナタも軽いと思うけど？」

「何をー！？」

プラスルとマイナンは対照的に仲良くお喋りしている。仲が良いのだろう、対する2人は……。

「大体、カヅキはもう何回も振られてるでしょ？」

「ヒナタだって同じじゃないか！」

「私、こう見えて彼氏いるから」

「だったら今度お目にかかりたいよ」

カヅキはヒナタが嘘をついていると言うように問い詰める。

まあ、実際いないんだけどね。

恋心を抱く人はいたりするが。

（やっぱ、コイツとは……！）

双方、付き合いが長いのか、互いの事はよく知っている。

そんな時である。2人のスタイラーから通信が入った事を知らせる音が鳴る。

2人がスタイラーを開くと同時に怒号がスタイラーから飛び出た。

「お前ら、帰りが遅過ぎるわー！！！」

確かにそうである。

実は彼らのいる場所、2人の本拠地、リングタウンまでは僅かに10分足らずの場所だ。

この2人は一時間近くはいるもんだから、リングタウンのリーダーレンジャー、ハヤテからこの一発を浴びたわけだ。

「今すぐ戻ってくるんだ！！！」

その声と共に、スタイラーから声は消えた。

「「急ぎますか……」」

2人のレンジャーがため息を吐いて、喧嘩を中断し、そそくさにリングタウンへ戻ったのは言うまでもない。

プロローグ（後書き）

カヅキ

「という事でカヅキです」

ヒナタ

「ヒナタです」

遂に書きしまったよ（汗）

きっかけはWEBコミックです（笑）

後、他の小説は事情が無いかぎりは恐らく週一回更新になります。

カヅキ

「今回は何かコメディっぽかったんですけど（汗）」

まあ、いいじゃないか。

ちなみに多少WEBコミックを元にしてます（笑）

まあ、暫らくは主人公は出ません！

主人公

「はあ！！？」

だって過去編だもの（笑）

ヒナタへのミッション（前書き）

キャプチャの辺りの描写がまだ不安ですが、暖かい目でご覧下さい
（笑）

ヒナタへのミッション

リングタウン。

フィオレ地方の西にある小さな町。比較的温暖で、豊かな自然のあるのかな町の片隅にカヅキ、ヒナタの本拠地、レンジャーベースはある。

2人は基本的にここでミッションを言い渡されるのだ。

「カヅキ、帰還しました！」

「ヒナタ、同じく帰還しました！」

2人が敬礼して、レンジャーベースに入る。中で腕組みをする緑色の髪をする男こそ、2人の上司のリーダーレンジャーのハヤテだ。

「お前ら、何してたんだよ……」

額に手を当て、髪をくしゃくしゃにしながら、ハヤテは言った。

「す、すいません……」

「まあ、いい。それよりも早速ですまないが、またミッションだ」

今帰ってきたばかりでミッション、となると2人も目を丸くする。

「もうですか!？」

「喧嘩出来るなら、その有り余ったパワーを生かしてくれ、カヅキはまずシクラ山脈で遭難した山登りの方を救助。ちよつと場所が場所で、お前くらいな腕じゃないと危険なんだ」

「はい！」

ハヤテはヒナタを見ると、真剣な面持ちで静かに喋りだした。

「それとヒナタは、ジョウト地方のシロガネ山に向かってくれ。何でもシロガネ山に住むバンギラスが大暴れしてどんなトレーナーの手にも負えないらしい。それと、そうなった理由の調査もだ。カヅキも救助したらずくにヒナタの元へ向かうように」

「了解!!!」

早速2人はレンジャーベース2階にいるカイリユウの元へ向かった。優秀なレンジャーは各地にミッションで飛び回るために時間短縮のため、カイリユウバスを利用する。カヅキ、ヒナタも例外なくちよくちくだが、カイリユウバスを利用している。

「カイリユウ、宜しくね」

「バウウ」

カイリユウが首を縦に振り、背を屈める（かがめる）。

ヒナタがカイリユウの背に乗ると、カイリユウは翼を羽ばたかせ、空へ飛翔した。

カイリユウは半日で世界を一周できると言われている。ジョウトまでの距離はかなりのものだが、これならすぐに到着するだろう。

「プラスル、頑張ろうね」

「プラ！」

プラスルが元気よく返事をした時、ヒナタのスタイラーが着信音を発した。

「はい、こちらヒナタ！」

「ヒナタ、バンギラスについての情報だ」
「はい」

発信者はハヤテだ。バンギラスを落ち着かせるにはキャプチャが一番いい。

しかし、キャプチャがうまくいかなければ最悪、スタイラーを破壊されてしまいかねない。しかも、バンギラスはかつてゴーゴー団との戦いでゴーゴー4兄妹の長男、ヤライが使っていた。

（あの時はカツキと協力したおかげで出来たんだっけ……）

ふと思い出にふけるヒナタ。ハヤテが情報を送る。

「バンギラスはかなり凶暴化している。単純にキャプチャは難しいだろう、ポケアシストを駆使するんだ。いいな」

「分かってます、リーダー」

「なら、いい。ヒナタ、無茶はするなよ」

スタイラー越しに聞こえた声にはその時、ハヤテが1人の人として自分を気遣ってくれてるのが垣間見れた。

「ありがとうございます」

そんな事しているとシロガネ山が見えてきた。

ジョウトリーグの開催地として有名な場所でありながら、そこに住み着く野生ポケモンは尋常じゃない程に強い、と言われている。バンギラスはその中でもかなりのパワーファイター。

用心が必要なのは重々承知していた。

「まずはポケモンセンターね……」

今回のこういったパターンはポケモンセンターのジョーイである可能性が極めて高い。まずは、ポケモンセンター目指してヒナタとプラスルは歩く。

「……なるほど」

シロガネ山到着から数分後、ヒナタは肩にプラスルを乗せながらジョーイの話を聞いていた。

「どこか様子がおかしかったんですよ、そのバンギラスは。あくまで目撃情報ですけど」

「そのバンギラスの住みかは分かる？」

そう言うと、ジョーイは首を傾げる。

「何か問題でもあるの?」

ヒナタは心配そうに聞いた。

「はい、そのバンギラスは恐らくシロガネ山の洞窟を住みかにしていると思います。しかも、バンギラスはこの辺りでは最強のポケモン……ポケモンが原因では無いと思うんです」

「きつと人間の仕業ね……。一応、その洞窟に行ってみるわ、地図貰えます?」

「分かりました。気を付けて下さい」

ヒナタは地図を受け取り、その洞窟の場所をマーキングすると、ポケモンセンターを出た。

「さて、行こっかプラスル」

「プラア!!」

プラスルは元気よく返事をする。

シロガネ山は一応、整備されているため、洞窟の近くまではとても楽だったが、途中からは整備されていないのが険しい道程に変わっていった。

(力になってくれそうなポケモン、いるかしら……)

ヒナタは今回のバンギラスのキャプチャは単身の力では不可能だと分かっていた。ヤライのバンギラスの時もカツキと力を合わせてようやくキャプチャできた強敵。

ポケアシストも駆使しないと無理なミッションなのは承知の話。しかし、バンギラスをおかしくしたのが仮にも人間だとしたら、一体目的は何なのか——またゴーゴー団か?ヒナタはそっちの方も大分

気がかりになっていた。

「ニョロ！」

「ラッキー、ニョロゾ発見!!」

岩、悪タイプのバンギラスにとって水タイプのポケアシストの出来るニョロゾはまさに相性は良い。

「よし！」

ヒナタのスタイラーの先端がアンテナのように伸びると、スタイラーからこまのような物体——キャプチャディスクが弾き出された。

「キャプチャ、オン！」

キャプチャディスクは一筋の光となって、ニョロゾの周りを回りだす。ヒナタがスタイラーを回転させている。どうやら、ヒナタのスタイラーの動きとキャプチャディスクは一体のようだ。

「ニ……ニョロ……」

困惑するニョロゾ。刹那、ニョロゾを周りを走っていた光がニョロゾの体に吸い込まれるように消えた。そして、その時僅かにフラッシュが起こる。

ヒナタはスタイラーを見ると、満足そうに、

「キャプチャ完了！ニョロゾ、ついて来て!!」

「ニョロ！」

ヒナタはその後更にモンジャラやニョロゾ、ゴローンをキャプチャ

した。

（これだけいれば、バンギラスもキャプチャ出来るわね……）

ヒナタはこの時、ミッシェンクリアが現実の物に出来ると思っていた。

そんな頃、カツキは……。

「怖いデスゝ!!」

「ちよつ、落ち着いて下さい!」

場所が場所なのか、救助活動は難航していた。

さて、話を戻していこう。

ヒナタはバンギラスの住みかまで近づいていた。刹那、一筋の光が洞窟から放たれる。

「破壊光線!? みんな、避けて!」

ヒナタの指示に従い、ニョロゾ達は破壊光線を避ける。しかし、直撃した場所は無惨に地形が変わってしまった。

（なんてパワー……ヤライの時より熾烈しれつな戦いになるわね……）

ヒナタの額から流れる汗。そして、心の隅に恐怖の文字があったが、そんな恐怖に怖気づいているわけにはいかない。

洞窟から姿を現す巨体。バンギラスは白目でコチラを睨み付ける。そのプレッシャーにプラスルの手がヒナタの頬に当たる。

「プラスル……大丈夫だからね」

優しく語り掛けるヒナタ。

ヒナタの目付きが変わった。

「ニヨロゾ、力を貸して！」

「ニヨロ！」

スタイラーの中にある特殊な装置。それこそが、ポケアシストの元になるタイプエネルギー吸収装置だ。その装置に加えられたエネルギーをキャプチャディスクに転送する。

これで初めてポケアシストが出来た事になる。

「ニヨロゾ、この部分に泡を！」

ヒナタが指差した先に正確にニヨロゾは泡をぶつけた。

「ありがとう、ニヨロゾ！さあいくわよ！！！」

ヒナタが構える。スタイラーからキャプチャディスクが放たれた。

「キャプチャ、オン！」

水のポケアシストは光が通った場所からポケモンの動きを封じる泡が出来る。その隙に一気にキャプチャしようという魂胆だ。こんたん

「はあああ……」

ヒナタの腕が大きく旋回していく。バンギラスは身動きを封じられていた。

「コレで……終わりよッ!!」

ヒナタがスタイラーを振り切る。バンギラスを囲んでいた光の輪が一気に収縮して、バンギラスの体の中に入っていく。

「……うん、キャプチャ完了」

ヒナタはホッと息を撫で下ろした。しかし、この安堵は本当に一瞬の内だったのだ。

「ガオオオオオオオオ!!!!」

「バ、バンギラス!?!」

ヒナタが慌ててスタイラーを見るとバンギラスは何とキャプチャ前の状態に戻っていた。

「どういう事!?!リリースもしてないし……」

困惑するヒナタ。何せ、こんな経験は今まで無かったのだから当然と言えば当然である。

「グオオオオオオ!!!!」

バンギラスが破壊光線を放つ。ヒナタは素早く近くの岩に隠れて、バンギラスの死角に入る。

「ワケが分からない……でも、我は失ってる。ここで止めるしかないわね……」

ヒナタは自分のスタイラーを強く握り締めた。

「ニヨロゾ、力を貸して！」

ヒナタは予め（あらかじめ）キャプチャしておいたもう1匹のニヨロゾのポケアシストに頼る事にした。

案の定、さっきの二の舞かバンギラスの動きを封じ、キャプチャは出来そうだった。しかし、次の瞬間一変した。

「コレでどう！？」

スタイラーを振り切り、光の輪がバンギラスの体の中に入っていく。しかし、入る直前、光の輪が破壊された。

「——！！？」

キャプチャ不可能——それをこの時、ヒナタは悟った。もしかしたら情報不足？いや、しかしそんな事は無い。

とにかく、一旦引く事にした。

「モンジャラ、ゴローン！すぐにココから離れて！！」

「モジャ！」

「ゴローン！」

鳴き声が合ってるかはあまり責めないでいただきたい。特に……ゴローン。

「プラスル、一旦引くわよ！しっかり捕まってる！」

「プリアー！！」

バンギラスをヒナタが引き付ける。バンギラスは辺り構わずという感じで破壊光線を乱射する。

（このままじゃ、シロガネ山の自然が壊される……！）

ヒナタは焦りを隠しきれなかった。

刹那、後ろに衝撃が走る。バンギラスのモノではない。人のような感じた。

「うつ……！」

ヒナタはその場に倒れこんだ。プラスルが倒れこんだ衝撃でヒナタと数メートル先に飛ばされる。

「プラア……！」

「プラスル……！」

プラスルが駆ける。ヒナタが手を伸ばす。しかし、この光景を無残なまでに破壊する者が約1名。それは人間だった。

「ラフレッシュア、眠り粉」

「えっ……！？」

「プラ……」

あまりに不意な事に至近距離から眠り粉を吸い込んで、ヒナタとプラスルは眠りについてしまった。そして、ヒナタは見た。ラフレッシュアに指示を出す、1人の男を。

「ラフレッシュア、お疲れ様です。チャーレム、2人を運びますよ。後……」

男は次の瞬間、こう言い放った。

「バンギラスもね」

果たして、ヒナタの運命は？

そして、キャプチャ出来ないバンギラスとこの男の関係は……？

過去編はまだまだ続く……。

ヒナタへのミッション（後書き）

カヅキ

「ヒナタ、大ピンチじゃん！」

まあまあ。

次回、この男とバンギラスの謎が少し判明します。つか、バトナージされた方はご存知かも知れません。

カヅキ

「それ、ネタバレじゃ（汗）」

まあまあ（笑）

シロガネ山に潜む闇（前書き）

何だか妙に調子が良いのでまた投稿♪（え

シロガネ山に潜む闇

「んっ……」

ヒナタが目を覚ます。どうやら、洞窟の中のような。

「プラスル！」

同じく眠り粉で眠らされていたプラスルを起こすヒナタ。2人の正面には鉄の柵。

どうやら、牢獄とでも考えて方が良いでしょう。

「確か……バンギラスがキャプチャ出来ないから一旦引こうとして、その途中で襲われたのよね……」

「ご明察ですよ」

「誰ッ！？」

ヒナタが牢の中から睨み付ける。1人の男が牢に近づいていた。男は黒い眼鏡をし、白衣をしている。

研究者、とでも言うべきだろう。

「あなたは？」

ヒナタが強く威圧するように男に言った。ただ、助けたワケで無いのは確実だった。

「私？私はナトロン……初めまして、トップレンジャーのヒナタさん」

「貴方、何者なの？」

「まあ、それより……これをお返しします」

ナトロンが懐ふくから取り出したのはヒナタのキャプチャスタイラーだ。

「貴方……一体何を？」

「別に何も。あ、キャプチャは出来ませんが、通信機能だけは遮断しました。連絡でこの機密情報が漏れると厄介なので」

ナトロンは軽く言うが、キャプチャスタイラーは精密機械がいくつもある。その中から通信機能の精密機械だけを見つけるなど素人の出来る術わざではない。

「あのバンギラスは？」

「バンギラス……か。彼は強い。私の実験は大成功しましたよ」

ナトロンのその言葉を聞いた途端、ヒナタは確信した。今回のバンギラス暴走はこの男が元凶だと。

「貴方、ポケモンを何だと思ってるのよ!？」

ヒナタは拳を握り締めて、怒鳴るようにナトロンに言ってやった。

「プラプリア!?!」

プラスルもヒナタと同じ事を言っているようだ。ナトロンも一瞬怯んだが、こう言い返した。

「ずっとあんな状態をこちらで制御出来ると思いますか?ですからこうしたんですよ」

ナトロンが懷から出すは赤と白のモンスターボール。その開閉ボタンを押すと、そこからさっきのバンギラスが現れた。しかし、さっきと違い目はキチンとしている。ヒナタが見るかぎり、健康状態に異変は無さそうだ。

「一応、必要な時にあの白目になっていたみたいです。バンギラス、苦勞かけますね」

「バンギラス」

バンギラスはナトロンによく懷いているようだった。あんな酷い事されたのに何故——ヒナタは疑問視した。

「疑問ですか……。まあ、普通でしょうね。バンギラス、ゆっくり休んで下さい」

そう言うとなトロンはバンギラスをボールの中へ戻した。ナトロンはそして語り始めた——バンギラスとの関係を。

「私が昔この辺りでポケモンの調査をしていた時に、密獵者を見ましてね。あのバンギラスの子供が誘拐されそうになったんです。私は間一髪でその子供を助けました……。それが今に至るバンギラスとの関係ですよ、後……。キャプチャ出来ないと驚いてましたよね」
（まさか後を付けられてた……。いや、でも後ろに気配は無かったし……）

ヒナタは自分の考えが筒抜けになっているのに動揺が走る。

「単純ですよ、キャプチャ出来ないから迷うのは誰でも同じ事。何故出来ないか……。分かりますか？」

「……………」

ヒナタは全く分からなかった。一体何が原因なのか……。

「分からないなら教えましょうか。ドカリモ、というマシンが原因です」

「ドカリモ？」

「はい、私はその欠点を無くした完璧なドカリモ……このメガドカリモを完成させました」

ナトロンが手に持つマイクロチップ並に小さいモノがメガドカリモだというのだ。

ヒナタが気付かないのも無理は無いだろう。

「さて……じゃ、軽く小話でもしますか。シンバラ教授はお元気ですか？」

「シンバラ教授……？元気にしてるわ」

「なら良かった。あの人、いまだに独身でしょ？」

「ど、独身……って何でアナタが知ってるのよ」

「金にしがない科学者ですからね……シンバラ教授にはお世話になった。ただそれだけの事」

ナトロンの言葉にはどこか重いもののしかかっているようにヒナタは感じた。

そんな頃……

「え、通信が切れた!？」

カイリユーの背に乗り、シロガネ山へと向かうカヅキ。その道中、ハヤテからヒナタのスタイラー信号をキャッチ出来なくなった、という連絡を受けた。

「最悪、スタイラーを破壊された可能性がある!カヅキ、気をつけて向かってくれ!!」

「はい!」

(ヒナタ……無事でいてくれ……!)

カヅキはヒナタの安否が心配だった。

そりゃ、喧嘩ばかりの仲かも知れないけれどいざという時は互いが互いを助け合う大事な仲間。

特に、付き合いの妙に長いカヅキは不安な面持ちだった。

「まあ、のんびりココで一生を過ごすといい」

ナトロンは非情とも言える一言をヒナタに吐き捨て、奥の道を歩いていった。

（……見張りはいない。ナトロンが完全に見えなくなったら……！）

ヒナタは足音を一切立てず、静かに壁ぎわに寄り、息を整える。そしてナトロンの姿が見えなくなってから数分後――、

「どりやあああああ……！！」

ヒナタ渾身の蹴り技で凄まじい轟音と共に牢の檻が木っ端微塵に吹き飛んだ。

ヒナタ、こう見えて体術には自信があるのだという。それを証明する一撃だ。

「プラスル、行くわよ！」

「プラア……！」

プラスルは一瞬にして、ヒナタの肩に掴まり、ヒナタは人間とは思えない程のスピードで走る。

（光……やっぱココは洞窟か……）

ヒナタが洞窟から出る。

「まずは引くか……」

ヒナタは今の状態では行動が難しいと判断し、一旦ポケモンセンターへと戻る事に。

「じゃあヒナタは数時間前に？」

「はい……」

ポケモンセンターのジョーイとカツキが会話を交わしていた。夕陽がシロガネ山を包む。

「ハア……ハア……」

「ゴロオン！！！」

背後から放たれる破壊光線。ヒナタの背後を追う無数のポケモン。ヒナタの制服、体泥まみれになっていた。

「恐らく、キャプチャは出来ない……今は逃げるしかない！」

ヒナタは迷いを振り切ってはいるが、目から零れる雫——涙が今の自分の未熟さを物語っていた。

辺りは一気に暗くなる。ヒナタは闇の中をただ無心に走っていた。ブラスルが電撃で辺りをフラッシュしたいが、追っ手の連続攻撃で、そんな事は出来そうに無かった。

「ハア……ハア……ハア……」

やがて見えだす光。ポケモンセンターだ！ヒナタは残る力を振り絞

る。

一方、妙に物騒な物音がしていた。

「何でしょうか？」

「ちよつと見てきます」

カヅキはポケモンセンターの外に出る。肩に乗せていた相棒、マイナンがカヅキの肩から降りると、電撃を発し、辺りがフラッシュする。

カヅキが辺りを見回すと、目線に逃げるヒナタがいた。

「ヒナタ!!」

カヅキが叫ぶ。

「カヅキ、一旦中へ入るわよ！」

「あ、ああ!!」

2人と2匹はポケモンセンターの中へと入る。不思議な事にそれを見た追っ手達は引き上げていった。

「ハアハアハア……………」

息も絶え絶え、ヒナタは激しい疲労に襲われていたが、この程度は慣れている。

「ヒナタ、何が？」

「実はね……………」

ヒナタはカヅキにこれまでであった事全て話した。それを聞いたカヅ

キはハヤテに連絡を入れた。

「カヅキです。リーダー、ヒナタを発見しました」

「そうか！ヒナタ、無事か？」

「はい、通信機能が遮断されてしまいましたが……」

カヅキとヒナタはこれまでの事を一通り、ハヤテに話す。

「そうか、それは厄介だな……。よし、スタイラーの修理を含め作戦を練る。一時退却だ」

「了解」

一時間後、シロガネ山のポケモンセンターの前に2匹のカイリユーがやってくる。

「すいません、一時作戦を練り直します」

「分かりました、しょうがありません。無理はなさらないで下さい」

「ありがとうございます」

ヒナタとジョーイの会話が終わるとカイリユーはフィオレの大都市、フォルシティへと向かっていく。

そんな頃、ナトロンは……。

「そっちはどうだ？」

モニター越しに会話する影が3つ。どうやら、ナトロンの同僚のような者が3人程いるようだ。

「ナトロン、とつととおっぱじめようぜ？」

「……………」

ナトロンの語る1人の男。すかさず、別の女性が口出した。

「黙れ、筋肉バカ」

「んだとお！？」

この男と口出した女性の相性はどうかやら最悪のようである。

「仲良くやりましょうよ、ね？」

また別の女性が仲裁に入った。ナトロンがその女性に賛同する。

「ココで仲間割れされたら私の面目も丸つぶね。仲良くやりましょうよ。そういえばどうですか皆さんは？」

筋肉バカの男がまず一発目に言い返す。

「準備万端だ」

「アタシも」

「ワタシも」

「そうですか……。では指示を出すまで待機していて下さい。お願いしますね」

ナトロンはどうやら、この中でのリーダー的存在らしい。

「了解だ」

「分かった」

「はい」

そう言うと一緒に3人との通信が遮断される。

するとナトロンは口元がにやける。

「始めますか……マインドウェーブ（洗脳電波）、LEVEL1、照射！」

ナトロンのデスクにレバーをナトロンが上向きに少し動かし、レバーの上にあるスイッチを入れた。

「次に来た時、レンジャーは一網打尽にしてくれましょう……フフフフ……」

ナトロンが夜のシロガネ山で笑う頃、シロガネ山のポケモン全てに異変が起きていた。

そんな頃、ヒナタとカヅキはフォルシティのレンジャーベースへとたどり着いた。

「カヅキ、帰還しました！」

「ヒナタ、同じく帰還しました！」

フォルシティのレンジャーベースにはフィオレ地方の全リーダーレンジャー、そして優秀なレンジャーが集まっていた。

そんな中、一際目立つ存在が2つ。左腕にまるで何かの小型連絡装置のようなものはめている2人のレンジャー。

「……君達がアルミアにいる残る2人のトップレンジャー……」

フィオレ地方、フォルシティに集いし4人のトップレンジャー。

そして、今回の事件が後に災厄と呼ばれる大事に発展しようとはこの時、誰1人、頭の中に入っていなかった――。

シロガネ山に潜む闇（後書き）

カヅキ

「何とかヒナタ脱出したね（汗）」

てか、ヒナタの脚力強くし過ぎたかも（汗）

ヒナタ

「次回は作戦会議？」

そうなります。

カヅキ

「残るトップレンジャーの性格も若干気になる（笑）」

主人公

「出番はまだですかー！？」

まだまだです（笑）

シンバラとナトロン（前書き）

何かグダグダ&ベタな感じが……orz

シンバラとナトロン

「……君達がアルミアにいる残る2人のトップレンジャー……」

カヅキは1人、静かに口を開く。残るトップレンジャーの2人もカヅキ、ヒナタのような男女コンビである。

「アンタがカヅキか、オレはハジメ。宜しく」

ハジメ、そう名乗ったアルミアのトップレンジャーはカヅキに手を差しのばす。

「宜しく」

カヅキはその手を取って、握手を交わした。
一方、ヒナタもまた会話を交わしていた。

「アタシ、ヒトミって言います！宜しくお願いします！！」

「あ……よ、宜しくね……」

ヒトミのテンションの高さにヒナタはたじたじの様子だ。

軽く自己紹介を済ませたのを図ったのか、1人の老人が杖を使って4人の元へとやってきた。しかし、肝心の杖を頼りにはしていなさそうだ。ただのファッションなのだろうか。

「「シンバラ教授！」」

4人は一斉に老人、シンバラの名を口にした。このシンバラ教授、カヅキやヒナタの持つキャプチャスタイラー、そしてハジメやヒト

ミの腕に装着されている機械——バトナージスタイラーなどは全てシンバラ教授が開発したのだ。

「お前さんら、そろそろ会議が始まるぞ？」

その言葉を聞き、足早に向かう一同だが、ヒナタはシンバラ教授にこう言った。

「シンバラ教授、キャプチャスタイラーの修理をお願いできませんか？」

「オペレーターでは無理か？」

「分かりません……ただ、通信機能だけを停止させられてしまったので」

「通信機能だけを！？」

シンバラが驚いたのはスタイラーをいじくるところもだが、一番はやはり、あるものだけを止めるなどスタイラー開発にでも携わっていないと出来ない。ヒナタは更にこう言った。

「その者はこう言っていました……金にしがない科学者と」

「！！？」

刹那、シンバラには衝撃が走った。戦慄、と言っても構わないだろう。とにかく、驚きを隠すなどその時点で不可能だった。

ヒナタはそのシンバラの動揺からナトロンと関連性は極めて高いと容易に判断できた。

「コレは直しておく。詳しい事はワシが会議で話す……」

シンバラはただ、ヒナタを会議場へ急かすかのような言いづりを

見せていた。

「分かりました、先に行ってますね」

ヒナタはシンバラを信用している。それ故の笑みが零れた。しかし、今のシンバラにとってそれはさらなる焦りを呼び込ませるようなモノ同然だった。

誰もいなくなつた空間で1人、シンバラは呟いた。

「何で……ヤツが……！」

やり場の無い怒りに震えるシンバラはその怒りを自らの握る杖の取っ手にぶつけた。

杖の痛む音でシンバラは僅かな間だが、現実に戻された。そして、ヒナタのスタイラーの精密機械が集中している部分のカバーを開いた。

その頃、会議場ではフィオレのリーダーレンジャー、優秀なレンジャー、そしてトップレンジャーのわずか十数人で会議をしていた。会議を仕切るのはフォルシティのリーダーレンジャーのジヨウだ。

「今回、シロガネ山で暴れているという通報を受けたバンギラスはキャプチャ出来ず、一時撤退という形を取りました……。ヒナタさん、アナタの知る限りの全てを話して下さい」

ジヨウがヒナタにそう言った。

「はい、まず今回のバンギラスのキャプチャの出来なかった要因はドカリモ、という機械にありました」

「ドカリモ!?」

その言葉に反応を示したのはハジメとヒトミだ。

「はい、バンギラスを操っていたのはナトロン、という男で彼はドカリモをパワーアップさせたメガドカリモを完成させた……。そう言うてました。メガドカリモはこんな感じの大きさだと言っていました」

ヒナタは自身の右手の親指と人差し指でほんの少しの隙間を作る。その大きさにハジメとヒトミは真剣な眼差しではあったが茫然としていた。

（大きさが違い過ぎるだろ……!）

（アタシ達の見た物より明らかに小さいじゃん……）

会議はその後、一時間近く論争が繰り広げられた。そんな中、会議場に乱入するのはシンバラだ。

「シンバラ教授……！」

全員が一斉にシンバラの名をシンクロしたように言う。シンバラはゴホン、と咳を立てる。

「少し今回のミッションに関わる事を話して構わんかな？ 雑談にも思えるが……」

「構いません、何か知ってるんですか？」

ジョウがシンバラに聞く。シンバラは黙って首を縦に振った。

「ナトロンの事じゃ。今からだいぶ昔の話になる……そうじゃな、20年近く昔の話じゃ」

（教授、やっぱりナトロンを知っている……）

ヒナタがそう思った刹那、シンバラは衝撃的な一言を言い放つ。

「ナトロンはワシの昔の弟子なのじゃ」

「——！！？」

その一言に目を丸くする者、口をパクパクと開いたまま愕然とする者……反応は優秀なレンジャーであつても多彩だった。

「長くなる。よく聞いてくれ……ナトロンはその昔、天才少年と言われる程の秀才でのキャプチャスタイラーの開発にも大きな手助けをしてくれた奴じゃった。今のスタイラーの機能のいくつかはナト

ロンが開発したのじゃよ」

その言葉に皆、自らのスタイラーをまじまじと見つめる。シンバラは話を続けた。

「ところが、ある日……ナトロンの両親が生前に残した莫大な借金を取りに借金取りが押し寄せての。ナトロンはワシらに迷惑をかけまいと行方を眩ませたのじゃ……。これがワシの知る全てじゃよ」

シンバラはそう言いながら、あの頃の頃を思い出していた。

「ナトロンとかいうガキがいるって聞いたんだがよオ……」

サングラスをし、服は乱れ……いかにもヤクザを思わせるような男数人が突如、研究所にやってきた。

「な、何だお前達は!？」

シンバラも負けじと威圧的な態度を取る。ナトロンを守ると同時に、ここまで進めた研究を滅茶苦茶にされたくないかった。いや、実際にはナトロンを守れば研究などどうでもいいくらいの感覚だった。

「いやね、ナトロン君のご両親は莫大な借金を抱えててね……。両親が死んだからナトロン君にきつちり返してもらおうと思ってね」

「お前達は子供にも容赦無いつもりか!？」

「すまないが、こつちも仕事……。金がなけりや食っていけないのさ」

シンバラの目付きはまるで野獣。近寄る隙すら無かった。

それを見た男達のリーダーらしき者が口を開く。

「仕方ない……。ならば、今回は身を退こう。だがまたいずれ来る。それまでに二億、きつちり準備してもらおう。出来なければ、ココは研究施設のように……。大体は分かるよな？」

「くっ……」

「これでも一億はチャラにしてるんだ。きつちり払ってくれよな……」

……。野郎共!」

「「へい!」」

借金取りは研究所から離れていった。と同時に、シンバラは腰がくだけたのか、尻餅をつく。

「シンバラさん……?」

研究施設の物陰から声のトーンの高い声が響く。高いと言っても、

極端に高くは無い。

「ナトロンか、何でもないよ」

シンバラは笑顔で幼きナトロンを不安にさせないように、宥めたが――

「さっきの人達、僕がねらいでしょ？」

「……いや、私の知り合いさ……」

「いや、おじさん嘘ついてるのが分かるよ」

ナトロンの前にシンバラは敗北感を感じた。

まさかこんな子供に自分の考えを読まれたようで気分は良くなかった。

「あの人達が来ないようにするから、安心してナトロンはここにいなさい」

シンバラは知人に借金してでも、ナトロンのために2億という莫大な金額を準備する気のようにだ。

しかし、それがうまくいく事は無かった……。

「……！」

翌日、置き手紙だけがナトロンの部屋に置いてあり、ある程度は残っていたが必要だと思われる物はこの研究施設から全て失われていた。

「あの時、ワシがすっかりしておればな……」

シンバラは罪悪感を感じ、肩をうなだせる。

ヒナタは妙だと思った事を口にしていなかったのに気付き、それを口にした。

「ナトロンはバンギラスを必要以上に暴れさせてませんでした。私が一度捕まった後、同じ個体と思われるバンギラスがはつきりとした状態でいましたから」

その一言に会場はますます頭を抱えるような状態になる。

シンバラがそれに関し、口を挟む。

「奴はポケモンに優しいという捉え方はできんか？庇うような言い方じゃが」

「今のところはそうするしかありませんね」

ジヨウを始め、ほとんどのレンジャーがその意見に渋々ながらも同意する。ハジメがある可能性を示唆した。

「ヒナタが逃げる際、突然攻撃が止んだなら、必ずメガドカリモにも核となるメインコンピューターが存在するんじゃないか？そう捉えられれば、メガドカリモの機能も封じれると思うが」

「あつ、確かにそうだったわよね！よくよく考えれば単純じゃない！」

ヒトミもハジメの意見に賛同する。

このたった1つではあるが、単純明快な意見により、方向性は固まった。

まず、バンギラスらを引き付ける囷担当のグループ。次にナトロンらがいると思われる洞窟に突入するグループ。このグループは同時にメガドカリモの機能停止の役割も兼ねる。

「では、皆さん！ミッション開始です！！」

「了解！！！！」

ジヨウの掛け声と共にレンジャー達がシロガネ山へと移動を開始する。

ヒナタにシンバラはキャプチャスタイラーを手渡した。

「ヒナタ君、ナトロンを連れてきてくれんか？」

「任せて下さい！！」

シンバラの想いを乗せ、レンジャー達は一路シロガネ山へと向かう。

その頃、問題のシロガネ山では……

「マインドウェーブLevel4照射！」

洞窟の一角で邪悪な笑みを浮かべるナトロンがいた。

「レンジャー達よ……ココで終わりです」

モニター越しに見えるシロガネ山の景色はそこに住むポケモン達が全てを覆っていた。

そのポケモン達は皆、狂ったかのように白目をし、辺りを場所構わず攻撃を始めていた……！

シンバラとナトロン（後書き）

ハジメ

「ってワケで宜しく頼む」

ヒトミ

「宜しくお願いしまーす!!」

はいつ、てなわけで4人の内残る2人のトップレンジャーも遂に現れました！

カヅキ

「でも、次回……なんかヤバイ気が」

気のせいだってばあ（笑）

再突撃、シロガネ山（前書き）

＊お詫び＊

ポケモンレンジャー・マインドをいつもご覧頂きありがとうございます。

さて、作者がバトナージをプレイする前に始めたためにいくつか矛盾が生じました。

その内の1つ、プロローグの表現が違っていたために修正致しました。また、ゲームではイマチが登場していますが、様々な観点から間違いなく1、2年その後ではありませんが、そこはあまり深く気になさりませんようお願いします。

再突撃、シロガネ山

空を飛ぶ無数のカイリユー、そして二匹のムクホーク。カイリユーにはフィオレのレンジャーが、ムクホークにはハジメとヒトミがそれぞれ乗っていた。

「さあ、バトナージスタイラーの力を見せてやる」

ハジメはそう静かに言いながら、自身の右腕に着けているバトナージスタイラーを目の高さにまで上げた。バトナージスタイラーならドカリモで操ったポケモンでもキャプチャできる当時はまだ2個しかないスタイラーだ。元々のプログラムがかなり複雑なためもあるつまり、メガドカリモで操られるバンギラスでもキャプチャは可能なはずである。

「そろそろシロガネ山です！」

先頭を飛ぶのはヒナタの乗るカイリユー。漆黒の闇に紛れての作戦だから、コンビネーションはとても大事である。ヒトミはハジメの近くまで行き、こう忠告した。

「身勝手な行動はダメだからね」

「分かってるよ、イチイチうるせえな」

「アンタがそんなんだから注意してんでしょ!？」

作戦開始前だというのに、この2人の仲は良くないのだろうかケン力勃発である。それを黙って見ていたハジメの相棒のムツクルと、ヒトミの相棒のマネネはハアとため息をつく。

似た者同士を持つ苦労者だからか、2人はポケモン語で苦労話をし

出した。

「ムクムクウ」

「マネ、マネネ」

何を言っているのかと言うと……。

「ハジメとヒトミさん、相変わらずだねえ」

「そうねえ、いざって時は仲良いのに」

オバサン同士の会話に見えたのは作者だけだろうか——不意にそんな事を考えていた。

「——みんな散れッ!」

刹那、ハジメの叫び声と共に無数の破壊光線が飛ぶ。

まさに雨のようにその総発を調べるなど不可能に等しい。1秒間に何発撃っているのやら。

「皆さん、近くの陸地に!」

ジョウの指示に従い、レンジャーは次々とシロガネ山の大地に足を着ける。辺りは闇。奇襲にうってつけたが、まさか逆を突かれるとは思いもしなかっただろう。

「ハジメ君、何で分かったんだ!」

カヅキが当然とも言える問いをした。シロガネ山の闇は地上が見えない程。不意打ちを見切るなど並大抵ではないだろう。

「風の流れが妙におかしかったんだ。カイリユー達も若干何かの影響か、列が乱れかけてた。だからさ」

「そんなんに分かるんだ……」

苦笑いをするカヅキ。確かに洞察力は群を抜いているが、そこから奇襲が来るなど予想だにしないだろう。

つまり、ハジメの感——というか、推理力もまた群を抜いているという事になる。まあ、推理力という例えが正しいのかは神のみぞならぬ、読者の皆さんによるが。

しかし、状況は最悪だった。

「だが、さっきの攻撃ではぐれたみたいだな」

「うん、とにかくヒナタとヒトミさんと合流しないと」

「アイツは『さん』付けよりは呼び捨てがいい。アイツも敬語使っちゃまうからよ、じゃ行くか」

ハジメが先頭を切るように歩きだす。

「待ちなつて！」

カヅキがその後を追う。

その頃、ヒナタはヒトミと合流していた。

「仲間に会えるとホッとするわ」

「全くです!」

激しく首をうんうん、と縦に振るヒトミ。相変わらずテンションが
高いものだ——と、ヒナタもまた苦笑いである。

「とにかく、他の人を探しましょう!ハジメが勝手な事してなきや
いいけど」

「ハジメ君はそんなに?」

「はい!ワンマンって言うか……その……」

段々ヒトミの頬が赤く染まっていく。この時、ヒナタはああそうい
う事ね——そんな風に感じていた。それが不意にも小さい笑い声で
零れる。

「ヒナタさん!??」

「ごめんねっ」

「もう……ヒナタさんはカヅキさんと恋仲ですか？」

「はあ!？」

今度はヒトミが仕返しと言わんばかりにカヅキとの関係を問い詰められた。

確かに付き合いは長い。あくまでも仕事——レンジャーのミッションだが。それ故か互いが互いをよく知っている。言い方を変えれば、確かに恋仲かもしれない。

だが、ヒナタはきっぱりこう言った。

「無い。ミッションで共に活動はしても、恋仲とかじゃないわ。むしろ憎たらしい」

「喧嘩するほど仲が良いって言いますよ？」

「アイツと喧嘩して仲は良くならないわよ!」

ヒトミはその時、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。ヒナタの溢した言葉は言い換えれば、仲良くなりたいたいという意味。つまり、それは――。

ヒナタは顔を真っ赤に染めた。

「ヒトミ~~~~~!!!!」

「ごめんなさい!」

ミッションだという事を忘れたように追いかけてここがコチラでは始まった。

1人、パソコンだろうか？キーボードを恐るべきスピードで叩く1人の男——ナトロン。
仮に一般の人が1秒に2回キーボードを打てるなら、ナトロンは8回は打てる。世の中に上はいるだろうが、これ以上出来たら神業である。

「システムの最終調整完了……」

ナトロンがエンターキーを押す。すると、岩の机上にあるパソコンのディスプレイ——画面は何かを転送するようなアイコンが現れ、手紙のようなものが一方通行で行っている。
ナトロンはその間、フツと笑みを溢した。

「ナトロン様！準備出来ました！！」

ナトロンに敬礼しながら挨拶する全身黒ずくめの男。単純に例えるなら一般のロケット団員の服装にとっても近い。胸の辺りにRのロゴは無いのだが。

「そうか、では待機していてくれ」
「了解しました！」

手下と思われる男はそそくさにナトロンの元を離れる。ナトロンは否、懷からモンスターボールを取り出す。

そして走るカツキとハジメ、ヒナタとヒトミの2コンビを見ながら

「またお世話になりますよ」

優しく、そう語り掛けた。

その頃、他のレンジャーはシロガネ山のポケモンセンターに集結していた。無論、ジョウもいる。

「くそっ、通信が……!!」

ポケモンセンターは明かりこそ点いているが、通信機能は遮断され、スタイラーの通信機能をも遮断されていた。

コレも間違いなくナトロンの仕業である。ナトロンの科学力の高さにはジョウを含め、その場にいた全てのレンジャー脱帽モノだ。さすが、シンバラが言っていただけの事はある。

「連絡は取れない上に、この状況……最悪ですね」

闇の中で走る無数の閃光。ポケモン達が暴れだし、辺りの自然を木っ端微塵にし始めている。

しかも、辺りは真っ暗。奇襲に警戒しながらキャプチャするなどあの4人以外は至難の業である。それ程の難易度の高さが伺える。

「無事でいて下さい、皆さん……」

キリリと光るメガネを人差し指と中指で軽く持ち上げ、静かにジョウは呟いた。

「ジョウさん、カラオケやりませんか？」

「何やってんだ！？やるに決まってるだろ！」

いや、叱りなさいよ……

そう思う天の声ならぬナレーションである。余談ではあるが、ジョウは音痴なんだといわれている。(参考文献: Wikipedia)

その頃、カヅキとハジメはマイナンの電気を頼りにシロガネ山をさ迷っていた。一応、あまりに暗い上に位置確認が出来ないため半ば遭難に等しく状況は化している。それはヒナタとヒトミも同じ事だ。

「……………洞窟か」

中から風が通る。まるですぐそばにゴーストポケモンがいるのかと、背筋が寒くなるように感じる。

「とにかく行こう。マイナン、頼むよ」

「マイマイ！」

マイナンは元気に返事をする。まだまだいけそうである。それから遅れて数分後、ヒナタとヒトミも同ヶ所に辿り着く。

「洞窟……………ナトロンがいるかも」

「じゃ、元気出していきましょー！！」

「もう少し緊張感持つてよね……………」

洞窟の構造は思ったよりシンプルだ。しかし、中に松明たいまつがあるということはそれが見出だすのは1つ。

——ナトロンが間違いなくいるであろう……それだけだ。

「……ナトロンってのは何なんだろう？」

「さあな、見れば分かと思う」

ハジメは軽々しい態度を取るが、最近はずっとヒトミと2人でトツプレンジャー連続殺害事件を探っていた。彼と彼女もまたトツプレンジャー。

危険なのは百も承知。だが、彼と彼女をココまで駆り立てたワケ——それは互いに大切なモノを失ったからだ。

まず、ハジメはライバルであり大親友のダズルを、ヒトミは尊敬する先輩、ハーブをそれぞれ殺された。それ故、真相を探り犯人を捕える事に頭が手一杯なのだ。

ヒトミがあんな風に明るく振る舞うのを半ば空元気に等しい、そうも言える。

（とにかく、ダズルを殺した奴を……。その理由を突き止める！）

この当時の時点でトツプレンジャーは既にこの4人しかない。当初いた12人中、10人は殺害された。

ハジメの感情が徐々に高ぶる。カヅキがそれに気付くワケが無い。

「ハジメ、気を付けてよ」

「言われなくとも……分かってるよ!」

やがて、2人が出たのは巨大な闘技場のような広い空洞。2人の目の先には……

「「バンギラス……!」」

白い息を吐き、今にも暴れそうな状態。ハジメは右手に着けていたバトナージスタイラーを左手に装着した。ハジメはキャプチャする時は左手に着け、それ以外の時は右手に身につけている事が殆どだ。

「ようこそ、トップレンジャーのカヅキ君にハジメ君」

闘技場の傍観者席——とも言えよう高々とした場所から話すはヒナタの言っていた科学者、ナトロンだろうそう確信した。

メガネを着け、白衣ならば大体見当はつく。

「……さて、このバンギラスはあなた方でキャプチャは可能ですが、力があります。頑張ってください……バンギラス!」

ナトロンが強く言い放つとバンギラスが巨大な咆哮を上げる。

「グオオオオオオオオオ!……!」

「くっ!」

「なんて奴だ……!」

当然、その咆哮は洞窟内に響き渡る。それは探索していたヒナタとヒトミも例外ではない。

「今のは……？」

「バンギラスの声よ、きつと！」

1度バンギラスを見て、その声を記憶に留めているヒナタは推測だが、それがバンギラスだと言う。
現実にはヒナタの通りなのだが。

「でも、咆哮の方角は瓦礫で進めない……」

ヒナタの言う通り、咆哮のした方角には瓦礫が落ちたのだろう、道に瓦礫があり、進むなどかなり難しい。しかし、まだ道はあった。もう1つ……二手となっていた残る道が。

「なら、行く方向は1つだけですよ!」

「そうね」

ヒナタとヒトミはもう片方の道をゆく。

カヅキとハジメはバンギラスと対峙する。

シロガネ山に太陽が昇る。

果たして、ポケモン達の心に太陽は昇るのだろうか――。

再突撃、シロガネ山（後書き）

カヅキ

「バンギラスと戦うんですか……（汗）」

ヒナタ

「コッチは何させる気？」

オイツ、グレてないか？

ハジメ

「ダメ作者に言われたかない」

ヒトミ

「DSK！（訳：黙ってさっさと書け！）」

俺の心に大ダメージ！！！！

4人

「どうでもいいから（汗）」

V S バンギラス！ そして……（前書き）

カヅキ

「今回でシロガネ山編終わり何ですって？」

はい、ココから過去編は一気に加速します。

もしかしたら今月中に本編に入れるかもしれません（笑）

ハジメ

「んじゃ、最新話どぞ」

セリフ取るなあ！

V S バンギラス！ そして……

「バンギラスはパワーがある。動きを軽く封じよう」

カヅキの意見にハジメは逆らわない。辻褄は通る。

「よし、ムツクル！風起こしだ！！」

「ムツクウウー！！」

ムツクルの翼が羽ばたき、そこから猛烈な風が起こる。しかし、バンギラスは一切動じない。

「マイナン、電磁波！」

「マイマイ！！」

マイナンがバンギラスに向かって駆け出す。しかし、バンギラスはそれを侮蔑するようにマイナンを見る。

「マァーイイイイ！！！」

マイナンの頬に貯まった電気がバンギラスの体を硬着させる。

しかし、バンギラスはさつきから全く攻撃する素振りも逃げるような素振りも、更には動こうともしない。

（……妙だな、試してみるか）

ハジメはバトナージスタイラーにキャプチャディスクをセットする。そして、ハジメの左手が前に出されると、

「キャプチャ・オン！」

バトナージスタイラーから勢い良く放たれるキャプチャディスク。ハジメの左手の人差し指と中指が青白く光る。キャプチャスタイラーでディスクに指示を送るアンテナのような場所の役割を、バトナージスタイラーではこの二本の指で行う、と言うのだ。

「いつけえええ!!!」

ハジメの指が休む事なく動き続ける。それに調和し、キャプチャディスクもまた動き続ける。

「バンギラス、やりなさい」

ナトロンのこの言葉でバンギラスの目付き、そして動きが一変した。

「バアアアングラアアアス!!!」

再び放たれる巨大な咆哮。しかし、それと同時に激しい砂嵐が辺り一面を覆いつくす。

「くっ、こんなタイミングで砂嵐かよ！」

「マイナン、ムツクル戻るんだ!!」

カヅキの判断は概ね正しい。

強烈な砂嵐で目すら開けるのが困難な状況だ、一旦戻すのは正しい判断である。しかし、それが仇になるとは思ってもよるまい。

「ムツクー！」

「マイマイ!!」

ムツクル、マイナںがそれぞれの肩に乗る。ハジメは一旦キャプチャを諦めた。この砂嵐ではキャプチャもままならないだろう。それ故の判断だ。

「ヤバいな、この状況……！」
「確かにね」

刹那、砂嵐の向こうからオレンジの光が一閃として走る。その光は2人を直撃した――。

続く地鳴り。

ヒナタとヒトミはとにかく走っていた。目指すはナトロンの元。正確に言えばメガドカリモの制御室である。

「侵入者だ、ひっ捕らえる！」

とまあ、敵に出くわす時もあったがそんな時は――

「どりゃあああ！！！」

ヒナタのキックでイチコロである。

「ヒナタさん、強いですね！」

「いざって時には男は頼りにならないから」

まるで自分の身は自分で守る！そんな感じた。

その頃、カツキとハジメは……

「うう……」

瓦礫を押し退け立ち上がるカツキとハジメ。しかし、体の随所から出血しており更にはレンジャーの制服はボロボロにされていた。息も荒く、あまり長持ちしそうにない。

「大丈夫？」

「ギブアップには……まだ早い」

ハジメとカツキはそれぞれスタイラーを構える。

「砂嵐はムツクル！任せる！！」

「ムクッ！」

「マイナン！バンギラスの注意を引き付けて！」

「マイ！！」

2人のパートナー、そして2人のレンジャーの全てを掛ける。

「「キャプチャ・オン!!!!」」

2人が一斉にキャプチャディスクを放つ。キャプチャディスクは光となつてバンギラスを囲んでいく。それをのんびり待つバンギラスとナトロンではない。

「バンギラス、砂嵐!」

「バンギラス!!!」

バンギラスの特性、砂起こしと砂嵐の連携で起こる圧倒的不利な状況。コレではさっきの二の舞である。

「ムツクル、吹き飛ばしだ!」

「ムツクー!!!!」

ムツクルが全力で何度も翼を羽ばたかせ、砂嵐は押し返される。その隙をカツキは見逃さなかった。今マイナンの力を使えば動きを封じるのは簡単だ。だが、電磁波では無意味。ならば、使うは最強だけ。

「マイナン、雷だ!」

「マアアア……」

マイナンの頬に集まる強力な電気。貯めた電気の量なら並大抵のものではないと推測がつく。

「イイイイイ!!!!」

放たれる青い稲妻。

バンギラスにそれが当たるとバンギラスは悲鳴と共に体が動かなくなる。

「今だ！いくよハジメ！！」

「分かってるっての！」

2人のスタイラーを振るスピードが倍近くに跳ね上がる。

ナトロンは黙ってそれを見つめていた。

「コレで……」

「終わりだああああ！！！」

2人がスタイラーを振り切ると、バンギラスの周りを走っていた光の渦がバンギラスの体に当たり、フラッシュを発するとバンギラスの目付きが穏やかなものになる。

「キャプチャ完了」

カヅキがキャプチャスタイラーでバンギラスの状態を確認する。ハジメはナトロンから目を離さなかった。

「大人しくお縄につきな」

「残念だが、そうはいかない。戻れ、バンギラス」

ナトロンはモンスターボールを取り出すとバンギラスをそこに収納した。

「今回は私の負けですが……よく言いますよね？逃げるが勝ち、と」

否、ナトロンはその言葉と同時にただ1つの観客席の入口から逃げ

出した。それを見逃す2人ではない。

「待て！」

「追い掛けるぞ、カヅキ」

「分かった」

2人とナトロンの距離は一定を保ったままだ。ナトロンは耳に指を近づけ、何かに触れるとカヅキとハジメに悟られない声で喋りだした。

「皆さん、動いてください。脱出班は他の団員を乗せ脱出、私もすぐに向かいます」

ナトロンの耳に数秒後返事が返ってきた。ナトロンはそれを聞くと、黙って首を縦に僅かに振った。

カヅキとハジメはそれに気付いていない。

一方、ヒナタとヒトミは……

「コレがコントロールマシン？」

ヒナタがそう言った。2人の眼前には、パソコンのキーボードとシロガネ山全てを見渡せるモニターがいくつもある。

「多分、そうですよ！アタシ得意なんでこういうのは」

そう言うヒトミは座席に座り、キーボードを叩き始める。

ヒトミの真剣な顔にヒナタはうっと思を呑んだ。ヒトミはさりげなくこう言った。

「ヒナタさん、このミッション落ち着いたら告白したらどうです？」

「ハア！！？」

唐突な攻撃にヒナタは顔を赤くした。それが何よりの証拠である。

「ほらやっぱり」

ヒナタとしてはアイツがいつの頃からかずっと好きだった、告白したいが、タイミングが見いだせなかった。

複雑な心境に浸っていると、ヒトミがヒナタに指示した。

「ヒナタさん、プラスルの力で壊して下さい！」
「わ、分かった！プラスル、お願い！！」

プラスルは首を縦に振る。その時出た笑顔はまさに天使以上に思えた。

まあ、天使以上って何なんだよという質問はしないでくれ。

「プウウウ……………ラアアアア！！！」

プラスルが放つは雷。コントロールマシンは破壊された。

「さっ、急ぎましょう！まだ続きあるみたいだし」
「はい！」

ヒナタとヒトミも更に奥へと走る。

「ナトロン様！」

「ご苦労！」

ナトロンを待つ全身黒ずくめの男数人が乗るヘリコプターに足を入れていた。

今まさに飛ぶタイミングでカツキとハジメ、そしてヒナタとヒトミがその場に出くわす。

「ナトロン、待ちなさい！」

「本番はココからですよ、レンジャーの諸君」

「どういう意味ですか!？」

ヘリはあっという間に空の彼方へ消えていった。その間、フハハハハハ……とかいう声がシロガネ山中にこだました。

「くそつ、逃がした！」

ハジメは近くの岩に右拳で殴る。ヒトミはそんなハジメを慰めていた。

しかし、ナトロンの言った言葉の意味が知られるのに時間はかからなかった。

4人のスタイラーにボイスメールが届く。

「皆さんの活躍でシロガネ山は沈静化しました……」

4人はホッと息を撫で下ろした、まさのそのタイミングだ。

「でも、各地でポケモンが暴れだしてるそうなんです！」

「「えっ——!？」」

その瞬間、辺り一面は凍り付いたかのように沈黙が走った――。

そして、過去の物語で重要な意味をなす災厄――その幕が今きつて落とされた。

V S バンギラス！ そして……（後書き）

ヒナタ

「何かショートカット多くありません？」

いや、過去編のネタがね？

ヒトミ

「充電すればいいでしょ」

早いよ、この時点で充電早いよ！

ヒナタ

「次回はもうちょっと長くなりますよね？」

は、はい（汗）

始まった災厄（前書き）

カヅキ

「何か更新早いですね」

いや、君達をしないと空を書けなくて。気分的に。

カヅキ

「扱い酷いですね（汗）」

内容的には多分問題ないけど。

カヅキ

「多分って大丈夫ですか!？」

始まった災厄

「各地でポケモンが暴れてるって一体……！？」

「リズムミ、詳しく教えてくれ！」

ハジメはスタイラーにリズムミ、という名を告げた。

レンジャーのサポートをするのはオペレーター。リズムミはその中でもレンジャーの総本部、レンジャーユニオンから連絡を運んでいる。

単純に言うなれば、彼女もまた、それ相応の実力者という事だ。

「ハジメ、ヒトミ！詳しく話すわ。まず、今のところ確認されたのは今ハジメ達がいるジョウト地方。他にカントー、ホウエン、シンオウよ。被害はどんどん広がっていった、始めに反応のあったこの4地方が間違いなく怪しいわ」

リズムミの説明をさらに詳しく言おう。

まず、シロガネ山が沈静化したと思ったら、カントーを始めとした4地方でポケモンが暴れたした。

その被害は段々他地方にまで及んでいる。

そこでレンジャーユニオンはまず、通報と連絡のあったこの4地方を抑えれば、何とかなると判断したのだ。

……単純に言うところなる。

「4人いるし、各自が分担してやろう」

カヅキの案に反対は無かった。

「私はカントーに行くわ、何度か行ってるし」

そつ名乗りあげたのはヒナタ。次にハジメも、

「ならオレはシンオウに行く」

「アタシはならホウエンに行きまーす！」

「なら、僕はココを沈静化させるよ。皆……ポケモン達を助けよう
！」

4人が手を翳し合い、一斉に言った。

「「おう！！！」」

否、4人の手が離れる。

「レンジャー達を混乱しておる地方に送るのじゃ！」

その声をフィオレ地方のフォルシティから放つのはシンバラだ。
被害は僅か数分で倍近くに膨れ上がっていた。しかも、中には死者
もいる。ナトロンが何を企んでいるのか——もはや、師のシンバラ
でさえ理解は不可能に近かった。

「ナトロンめ……何を企んでおる!？」

その頃、そのナトロンは飛行船の中で例の3人と連絡を取り合っていた。

「では、皆さん撤退して下さい。もう用はありませんから」
「了解だ」

「オツケッ」

「分かった」

連絡が途切れると、ナトロンは椅子に掛けている右手で椅子に着いているスイッチを押す。このスイッチはまだ幾つかあった。

「ふふ……首尾は上々。カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウは何かと人がよく集う。ココから強力かつ、広範囲の洗脳電波を放てば……ポケモン達は我が手にたやすく堕ちる」

ナトロンの高々とした笑い声が辺りを包む。

ハジメはシンオウに来ていた。かつて、シンオウで一回ミッションを行った事がある。あの時は比較的穏やかだった自分の性格が半年やそこらでこうも変わると考えると、皮肉なものだ。

「サトシは元気かな」

あの時はヒナタの事はまるつきり知らなかった。後々だった、彼女が有名なレンジャーだと知ったのは。

「サトシ達も頑張ってるんだ……はじめるか！」

ハジメはバトナージスタイラーにその決意を露にした。

「ホウエン、一度来たかったのよね」

うーん、と背を上には伸ばすのはヒトミだ。手を合わせ、それもまた、上に登っていく。

「アタシ1人だし……しつかりしないと！」

ヒトミの決意は揺るぎないのは確かだが、イマイチ説得力に欠けやすいような決意だった。

「確か……サトシ君とはココで2度も……」

そう言うのはヒナタ。サトシとは3度の面会がある。

一度はセレビィの時、二度目はデオキシスの時、三度目はシンオウでリオルの保護、奪還の時の三回だ。

三回目はハジメと偶然にも初対面を果たした時でもある。しかし、互いがそこでおしまいだっただけで今回の事で互いを多少知れた。

「カントーの平和、絶対に守るわ!」

彼だって頑張っている――

アイツだって、また――

ヒナタの髪は心地よい風に揺らぐ。それは嵐の前の静けさだった。

「さて……原因を見つけないと」

カヅキがカイリユーの背で辺りを飛び回る。しかし、手がかりが無い事から、中にあると推測した。

言うてはおくが、あくまでも仮説である。

「カイリユー、降りて!」

「バウウ」

カヅキが降りたのはキキョウシティの近くにある繋がりの洞窟。入り組んでいれば、隠す可能性も高い――そんなトコロだろう。

「さあ、行きますか」

4人が必死に動く1分、1秒……秒刻みで被害は増していた。もはや、量は計りきれない。死者もまた、増えていく。1人や2人の話ではない。一気に10人やひどい場合、100人近くにまでのぼっている。

過去史上最悪の重大事件。

（4人共、急ぐのじゃ！）

シンバラは無力な自分を呪っていた。
今の状況は4人の若きトップレンジャーに任せるしかない。

神の気紛れか、はたまた神のいたずらか4人は別々の場所で無数のポケモンに囲まれていた。

「へっ、皆何とかしてやるよー！」

と、ハジメ。

「アタシに不可能は無いよーッ！」

と、ヒトミ。

「全く仕方ないわね……」

と、ヒナタ。

「やるっきゃない！」

と、カツキ。

そして、4人が一斉に声を張り上げた。

「「キャプチャ・オン！！！」」

過去編、いよいよ佳境へ――。

始まった災厄（後書き）

カヅキ

「今回極端に短い……」（汗）「

次回は長くなるからね！

……きつと。

ヒナタ

「今ばそつときつとつて言っただわよね!?!」

ハジメ

「頼りない作者だ（汗）」

ヒトミ

「だよね!」

テメエら、いくら何でも言いすぎだ（怒）

動き出す物語（前書き）

今回で過去編は終了です。
締め方が下手ですが・・・
（汗）

動き出す物語

震撼する世界。

ナトロンの仕掛けた術にはまったポケモン達は皆、我を忘れ暴走を開始した。

その被害は止まる事を知らず、現在だけですでに死者千人を超え、重軽傷者はその十倍……いや、数十倍にまで広がっていた。

元凶はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウに間違いなくある——果たしてナトロンが勝つか、レンジャーが勝つか、勝負の時である。

「フウ、止まった……」

そう言つて額の汗を拭うのはカヅキだ。

彼の眼前には破壊された機械が無惨に散っている。

「やったね、マイナン」

「マイマイ」

カヅキはマイナンの高さまで腰を下ろすと、マイナンとハイタッチした。

この時、彼がいるのはスズの塔。伝説では、ホウオウと言われるポケモンが舞い降りる場所として伝えられているトコロだ。

「ヒナタ、そっちは？」

カヅキはスタイラーで連絡を入れた……

「カヅキ？コツチも終わったわ、え？場所？双子島よ」

「プ、プラ……」

ヒナタはやせ我慢しているが、プラスルはそうはいかないようだ。身体中でアピールしている。

「カヅキ、一旦出てから連絡入れるから」

ヒナタはそう言うと、寒がるプラスルを抱えて双子島を歩く。凍てつく冷やされた洞窟の中を。

「まさかこんな場所なんてね」

ヒトミがいるのはハウエン地方。しかし、全てが見渡せそうな場所だ。

「マ、マネネ……」

マネネはやけに恐がっていた。

言うまでもない、彼女がいるのは空の柱。超古代ポケモン、レックウザが舞い降りる場所として伝えられている。

「ま、ハジメも終わったようだし……後は時間の問題ね」

その頃ハジメはシンオウの空を駆けていた。
通報があつたのだ、火事が起こっていると。ハジメはすぐにその場所に向かつていた。

場所はミオシテイ。シンオウ随一の港町だ。物資などがよくこの場に来る。少なからず、シンオウでは……だが。

「……ひでえな」

建物は無惨に全焼していた。

民間のトレーナー達や地元の水ポケモンが必死に放水している。
着地したハジメに迫ってきた1人の老人。老人は慌てていた。

「ど、どうしましたか？」

「あの中に子供が取り残されとるんじゃ！それだけではない、その子の両親も！助けてやってくれ！！」

こつも懇願されると断れない。

いや、レンジャーなのだから断つてはならないだろう。ハジメは覚悟を決めた。

「いくぞ、ムックル。援護を頼む」
「ムックル」

ハジメは身体中に水を浴びせてもらうと燃え続ける建物の中に入った。

火はハジメの予想以上に回っていた。辺りにまだ形をギリギリ保っている陳列棚やレジを見ると、フレンドリイSHOPなのが垣間見える。

ハジメの足が踏み出した時、その踏み出した足が何かを踏んだような感触になった。恐る恐る下を見るとそこには……

「……………」

一瞬ハジメの体に戦慄が走った。人が倒れていた。しかも、ただ気絶しているのではない。

血が辺り一面に広がっていた。辺りに物が落ちた形跡は無い。何者かにナイフ等で刺されたのだろう、ハジメは険しい表情になった。人は隣にもう1人いた。しかし、双方共にすでに冷たくなっていた。

「死んでいる……！」

あの老人によると子供が1人いるらしい。
最悪の結末を頭に僅かながら描いていたハジメ。店員しか入れない

エリアに足を踏み入れると、畳の上に子供が倒れていた。ニユーラがハジメの前に立ちふさがり、攻撃を仕掛ける。

「うおっ!？」

「ムクッ!」

ニユーラの攻撃を紙一重で避けたハジメ。

ニユーラはどうやら、あの子供を守るためにいるようだ。子供と言ふよりは8歳位の少年、そう言っても過言ではない。

「ニユーラ!お前がその子を守りたいのは分かってる。だが、このままじゃお前もそいつも死にまうんだぞ!？」

ハジメは優しく、そして厳しくニユーラに語り掛ける。

しかし、ニユーラは未だにその警戒を解こうとはしない。

「お前だってそいつを守りたい、それはオレも同じだ。このまま死ぬのがお前の、そいつの幸せか!？」

「ニユ、ニユーラ……………」

ニユーラが道を開けた。

ハジメが一気に少年の健康状態を調べる。

「……………うん、大丈夫だ。意識は無いが、命に別状は無いな」

ハジメは少年を抱えると、すぐにフレンドリイショップを脱した。ムックルが出てくるが、ニユーラが出てこない。

「……………アイツ…何を？」

ハジメが心配する否や、大量のモンスターボールを必死に抱えて出てくるニューラがいた。

「ニューラ、アイツ！」

ハジメがすぐにニューラに寄り、こぼれたモンスターボールを拾う。

「良い奴なんだな、お前」

「ニューラ」

ニューラは完全にそっぽを向いた。

その数分後、ショップは完全に焼け落ち、少年とニューラ、そして大量のモンスターボールは救急車と共に病院に運ばれた。

「アイツ……元気になったらまた会いたいな」

そう呟くハジメがいた。

それから1週間後、平穩を取り戻し、今回の事件の被害を調べたところ、被害は塵外なもので過去最悪の文字が似合う結果となった。

「……以上です」

ポケモンレンジャーの総本部、レンジャーベースからササコが静かに報告を終えた。

あれから、ナトロンらの消息は完全に途絶え、搜索は不可能、この事件はまさに闇の中に入ろうとしていた。

そして、6年後――

アルミアのレンジャースクールで天才の異名を持つレンジャーがいた。

正しくは生徒だが。

その少年の名は………？

次回のお楽しみである。

動き出す物語（後書き）

過去編、遂に完結！

主人公「やつと次回出番が・・・（泣）」

まあ、単純に言うと、俺もいい加減話進めたかったし（爆）

主人公「何か今後も苦労しそう・・・」

では、次回もお楽しみに！

あれから6年・・・（前書き）

いよいよ本編です！

なお、今回はヒロインも出ます。

？「いよいよ、この？マークも取れるのか・・・」

今回のお話、何かと重要なんです宜しくお願いします（笑）

あれから6年・・・

煙が立ち上ると共に、汽笛が限りなく広がる海の上で響き渡る。

あの大災厄から早6年。

レンジャーユニオンは各地方にレンジャーベース、及びレンジャースクールを設置した。

小さい島々からなる地方などはその地方の中心部にスクール及びベースを設置。レンジャーの数は6年前の2、3倍は増えた。

しかし、未だにレンジャーユニオンでは気が抜けない。6年前の事件を引き起こしたナトロンは今もその行方が知られていない。

死ぬ事は無いだろうが、どこかで潜伏していると考えるのが最も妥当だろう。

さて、海を突き進むフェリー船はある地方へ向かっていた。

その地方とは南国のリゾート地、ストリーゼ。リゾート地として有名な地方は各地にあるが、このストリーゼは別格で、世界一のリゾート地とも評されている。

そして甲板に立つ1人の少年とマニユーラ。

少年は緑色のブレザーを身に纏い、その下には茶色のような色をしたシャツ、そして黄色のネクタイをしていた。

「いよいよだな、マニユーラ」

「マニユ」

マニユーラは少年の言葉に力強く首を縦に振った。

少年の名はケント。この小説の主人公である。

「頑張つて、またあの人に会おう」

マニニューラは首を縦に振らなかった。ケントの会いたい人には絶対会える、そう確信をどこかで持っているからだ。

「ねえ、ちよつといい？」

「ん？」

ケントの横に立ったのは黒髪で凜とした美しい黒い瞳を身に宿した、それは美しい女の子だった。

彼女もまた、ケントと同じ服装をしている。ということは彼女もまたこのストリーゼに向かう者だろう。

「私はサティア。宜しくね」

「俺はケント。新人の同僚がもう1人いるって聞いたけど……君か？」

「ええ。私はジョウトのレンジャースクールを卒業したわ」

「俺はアルミアだ」

サティアはそれを聞いた途端に、腰を抜かすような気分になった。

「あ、あなたがまさかじ、10年に1人の天才と呼ばれるケント！？」

「ん？ああ、勝手にそう呼ばれてるけどそうだ」

実はケント、全ての教科で世界中のレンジャースクールの生徒より上。まさにパーフェクトな人材だ。

特にキャプチャの腕は天下一品である。

しかし、ケントはそれを利用して鼻を高くしたりはしない。彼の信

念が彼自身を強くしただけに過ぎない、そう言っている。
だから周りの皆からも好かれる者になったのだ。

「私のパートナー、紹介するね。アブソル！」

「ソルウ……」

「色違い……」

サティアのパートナー、アブソルは白い毛の辺りが黄色の毛で藍色の鎌のような場所は完全な黒となっていた。

「へへへ、どう？」

無邪気な子供のような声でサティアは言った。

その時の笑顔は美しいと思ったらありやしない。正直、天使かと誤認してしまいそうだった。

ここで余談だが、ケントは現在13歳。サティアは13歳である。

「そついやさ、ケントがそこまで努力して会いたい人って誰？」

確かに気になる質問だった。

しかし、ケントは――

「誰だっていいだろ、ホラ着くから降りる支度しろ」

と、何故か冷たい言葉を言い放つ。

「何、あいつ!？」

サティアは若干苛立ちもしたが、ここはグツと堪えておく事にした。
船が泊まり、乗降口から乗客が次々と降りる。その中に当然、ケン

トとサティアはいた。

他の乗客はほとんどが観光に来ているものだろう。ケントは降りてすぐ、港の電話で連絡を取った。

「じいちゃん、ばあちゃん」

『ケント、無事に着いたか！』

『良かったわねー！』

ケントの祖父母にケントは連絡を入れた。

サティアはその電話を聞く中である疑問が生まれた。

——なぜ、親に連絡を入れないのか？と。

「じいちゃん、皆は？」

『元気にしてるよ。ケント、マニユーラの調子は？』

「絶好調さ」

『そうか。大事に預かっていたかいがあるわい』

『ケント、他の皆さんに迷惑をかけちゃダメですよ』

「分かってるよ」

ケントと祖父母の話からどうやら、ケントがスクールに通っていた間はマニユーラは祖父母に預けていたようだ。

「じゃ、そろそろ行く。また連絡入れるよ」

『頑張るんじゃないぞー！』

『無茶しないようにね』

その言葉と共に電話は切れた。

今更なのだが、この世界の電話はアニメで使われているテレビ電話である。

「ねえ、ケント……」

「ん？」

聞いちゃいけない——そう思っけても、口は自然に動いた。

「ケントのお父さんとお母さんは………？」

ケントはそれを聞くと口を閉ざし、顔を下へ向けた。

「そつか……気になるよな」

ケントはそう言うと、サティアに驚愕の事実を伝えた。

「親父とお袋はもう死んじまったよ」

サティアはそれを聞いた途端、頭が真っ白になった。

何かとんでもない事を口走らせてしまったような罪悪感がその時のサティアにはしたが、すぐにその不安はケントの手により、振り払われた。

「あ、別に気にすんな。俺は親父を誇りに思ってるから」

「どういう事？」

その時、さらなる事実をケントは話した。

「俺の親父、かつて世界最強のトレーナーだったらしいんだよ」

「せ、世界……最強？」

「ああ、今から20年くらい前の話だけだな」

「……け、ケントのお父さんて凄い人なんだね」

サティアはそれがどれほど凄いことか完全には理解しきっていないが、とにかく有名人だということは確かのようにだった。しかし、明らかに動揺していたのは事実だった。

「そこらのトレーナーでも多分知ってんじゃないか？ スクールに行つてれば確実に耳には入ると思うし。つか、間違いなくな」

ケントが言うスクールとはレンジャースクールではなく、トレーナースクールである。

しかし、それほどのトレーナーが実在していた、という事だけで憧れの存在なのは確かな話だろう。

「あ、ケント無駄話はおしまいみたい」

「ん？ そう見たいだな」

2人の目線に止まった看板。

その先には多くの人々が旅を満喫させていた。

「んじゃ、レンジャーベースに向かいますか」

「そうね」

その看板には2人が足を踏み入れた街の名前が明確に記されていた。

——ノッゼシティと。

遂に始まった物語。

果たして次回、ケントとサティアを待つものとは——？

あれから6年・・・（後書き）

ケント「っつー訳で宜しくな！」

サティア「宜しく願います」

はい、ってな訳で主人公ケントとサティアにご登場していただきました。

因みにサティアには名前の由来があります。

ケント「・・・俺には無いのか？」

無い（笑）

サティアの名前はデイスアイア、想いという意味です。
なぜ由来があるのか、そのわけは後々分かります。

ケント「訳ありなのか？」

それは続きを見ないとね（笑）

ケント「めんどくさい作者・・・（汗）」

ノッゼレンジャーベース（前書き）

今回はかなり過激な新キャラが出ます（笑）

ケント「そーいや、他のレンジャーって一癖も二癖もあるんだよね？」

それを言っなら、一味も二味も違うだよ……（汗）

ノッゼレンジャーベース

「ここがレンジャーベースか」

「やっぱりどこも同じなのかしら」

「きっとそうだろ」

ノッゼシティのレンジャーベースの入口を目の当たりにして、ケントとサティアはレンジャーらしいようなそうでもないような素朴な会話を交わす。

彼らのいる、ここノッゼシティはストリーゼ南端の街にして、ストリーゼーの大都会である。

観光客の7、8割はここに訪れる。では、残る2、3割は何処に行くか——それはまた、別の機会に説明しよう。

「じゃ、入るか」

「そうね」

ケントとサティアが扉をくぐり、ノッゼシティのレンジャーベースに足を踏み入れる。

2人を出迎えてくれたのは3人のレンジャーだった。

「ようこそ、ノッゼレンジャーベースへ！オラはこのリーダーレンジャーのアビルだべさー！」

（べさー!?どんな口癖だよ……）

アビル、という男は身長がかなり高く、横は普通の感じだ。髪はリザードンの体色のように赤とオレンジが混ざった情熱的な色だ。

「アリサ、よろしく」

（コッチは極端に暗い！）

サティアはアリサのあまりの暗さに驚きを隠しきれない。

アリサは身長なんかは見た目通りに見える。だが、彼女が一番美しいと感じる男は多い。その理由は美しくて、けづやのよく整い長い黒髪だ。宝、そう言っても過言では無かるう。

「オレはデッドってんだ。まあ、宜しく頼むわ」

デッド、と名乗る少年は比較的ケント、サティアと歳は近そうだった。髪は黒く、目は青い。

ケントとサティアも自己紹介をした。まさにそのタイミングである。

「サティアちゃん！！！」

「はっ、ハイッ！？」

突然迫るアビルに驚くサティア。アビルの目がハートマークになっていた。

「ぜ、ぜひ仕事が終わったらオラと夕食でもどうべささ！？」

「えええ！？」

あまりに唐突な行動に慌てるサティアと呆れるケント。そこにデッドが仲裁に入る。

「リーダー……！！？」

「へっ？」

その数秒後、アビルの悲鳴がレンジャーベースから響き渡る。しかし、街の人は驚いたりしない。もう慣れっこだからだ。

その頃、アビルは……

「はいはい、こっちで反省ときましょーねー」

ボコボコになったアビルを別室にデッドが足を持って引つ張る。デッドが頼むと言うと、アリサがニヤリとしてその別室に入った。

「ギャアアアアアアアアアア！！！！！？」

さつきとは全然違う、更に悲痛な感じの悲鳴が街中に響き渡るが、街の人は慣れっこのようで、誰もレンジャーベースに駆け込まない。

「リーダーにあんなこととして良いのか？」

「構わないと思うぜ、リーダーそれで怒ったことねえし」

「でも、少し抵抗あるなあ……」

サティアが苦笑いでやり過ごす。

改めて聞けば、どうやらアビルは極度の女好きで、ジュンサーやジョーイさんなど、きれいな女性に速攻でデートを誘ったりするが、その度にアリサから手厳しいお仕置きを受けていたのが始まりらしい。

始めはデッドもコレに抵抗心というものがあつたのだという。まあ、いきなり見て受け入れろ、と言っても無理があるのは当然だ。

まあ、今ではこの制裁にデッド自身も加わっているのだが。

「終了です」

そう言っただけで別室から暗い顔になっているアリサと徹底的に痛めつけられたアビルが出てきた。少なからず、アビルは息も絶え絶えなの

だが。

「お前ら……ロッカールームに……制服あるべき。着替えてくるべさ……」

そう言うと、アビルは気絶した。

この時、サティアはアリサを軽く見つめながらこう思った。

（何やっतんですか……？）

数分後、2人はレンジャーの制服を身に纏ってロッカールームから出てきた。

サイズは長期に渡って使うために、多少大きめにしてあるからちよつとブカブカだ。だが、それでも多少調節すればキチンと着れているから問題は無い。

「そっぴいやお前達はもうパートナーいるべさね……サティアちゃんのは色違いで珍しいべさ」

こんな事を言うのはアイツしかない、そうアビルである。覚えていただけたであろうか？

「ケントはマニユーラ、サティアは色違いのアブソルが、中々いいコンビみたいだね」

2人のパートナーポケモンを見て、デッドがそう言う。

「私達も紹介……しよう」

「そうべさな。よし、皆の場所に案内するべさ」

連れて来られたのは、レンジャーベースの外れにある、小さな広場のような草原だった。しかし、池があり鬱蒼と生い茂る森のような場所もあったりと色んなポケモンに適応しそうな場所である。

「よし、皆来るべさー！！！」

アビルの声と共にポケモンが数匹ではあるが、やって来た。

「まずはオラの相棒、ルンパッパだべさ！」

「ルンパルンパ〜！！」

ルンパッパは能天気ポケモンで某女子好きトレーナーも所持していたポケモンだ。

ある意味、アビルに相応しいポケモンだろう

「私のパートナー」

「ロゼリア」

アリサのパートナーはロゼリア。

だが、ロゼリアは美しい外見とは裏腹に特性、毒のトゲを持っている。可愛いものにはトゲがある、というのはこの事だ。

こちらも本人を象徴するかのようなポケモンだ。

「オレの相方はモルフォンだ！」

「フフォン」

モルフォン。

……デッドとの結びつきが見当たらないが、まあ奇跡的というか運命的な出会いをしたのだろう。それは頷けた。

しかし、3匹だけでこの広場のような空間を持っているのはおかしい、とケントはアビルに指摘した。

すると、アビルは分かりやすく説明してくれた。

「ココは街のポケモンとかもしょっちゅう来るんだべさ。ココにオラ達のポケモンを置いているのはこの広場の秩序を守るため。ミッションの時は連れて行くべさ。他にもミッションで保護するポケモ

ンもここでのびのびとさせたりするべさ」

「なるほど……」

ケントに反論は無かった。

「よし、じゃケントとサティアは街の外れにある森をパトロールするべさ。あそこはポケモンも多いが、人もよく通るべさ。後、可愛い子いたら紹介してべさよ？」

さり気無く、最後はボソツと凄い事をアビルは言っただが、付き合いが長いからか速攻でデッドとアリサの制裁を受けるハメに。

「……じゃ、パトロールするか」

「そうね……」

ただ、苦笑いを浮かべる新人2人がそこにいた。

ノッゼレンジャーベース（後書き）

アビル「つつーわけで宜しくべさ！」

サティア「あまり迷惑かけないで下さいね？」

アビル「サティアちゃん！..！」

デッド「リーダー、こっちにどうぞ」

アビル「止めるべさ！あれは受けたくないべさ~~~~~！..！」

.....賑やかなこった（汗）

ノッゼの森のパトロール（前書き）

ケント「何だ？バトルリーグをうpしたばっかなのに」

いや、大元は一昨日の内に脳内で形成済みだったのだよケントン。

ケント「変なニックネーム付けんなー！」

いや、らき〇たみたく言ってみたかった（笑）

ケント（ダメだ、コイツ……）

ノッゼの森のパトロール

ケント、サティアが訪れたのはノッゼの森と呼ばれる深い森。深いだけあり、ポケモンの種類も幅広い。

「……うん、異常無しだな」

「こっちも大丈夫」

森をパトロールする中で多くのポケモンをブラウザ、と呼ばれる機能に追加した。

ブラウザ、というのはキャプチャスタイラーなどに付いている機能で、簡単に言うならレンジャー版のポケモン図鑑である。

しかし、2人はまだ気づいていない。いや、知らないと言っべきだろう。森の奥で複数人の男が森の片隅で火を点けたのを。

「じゃ、もう少し奥だな」

「アブソル、行くわよ」

「ソルツ」

森の奥に行くにつれ、妙な匂いをケントはどことなく、感じていた。それはアブソルやマニニューラですら気づいていない。ケントは父の遺伝で昔から何かと勘がいい。だから、かくれんぼでも鬼になれば隠れた者をあっさり見つけ、隠れる役になれば簡単には見つからない。

まあ、勘がいいというよりは視野が広いとも言えるが。

（何かある……）

そんな気配をケントは人知れず感じ取っていた。

その気配はやはり杞憂では収まらなかった。否、森の奥から無数のポケモン達が逃げてきていた。

「な、何！？」

サティアは突然の事にパニックしているようだ。

当然、ケントもまた困惑していたが、それは同時に森の奥で何かが起こっている証拠でもあった。

「サティア、森の奥に行くぞ」

その声はやけに落ち着いていた。いや、内心は不安でいっぱいだろうが不安を撒き散らさないためのものだろう。

「ええ、分かったわ」

原因は森の奥に進むにつれ、分かっていた。

森で火事が起こっているのだ。火の手はかなり回っているように見える。

「サティア、リーダーに連絡してくれ」

「分かったわ」

否、ケントがマニョーラに指示を下した。

「マニョーラ、冷凍ビーム!!」

「マニョッ!!」

マニョーラの手の間から放たれた水色の何かが地に接触すると、瞬時にそれを凍らせた。

『サティア、何かあったべさ!?!』

リーダーのアビルの声だ。

しかし、さっきと違いべた付いてくる様子が無いおかげでサティアはさらさらと現状を話す事が出来た。

『ノッゼの森には炎タイプのポケモンは生息を確認していないべさ、多分誰かによるものだと思うべさ』

「そんな……」

『オラ達が行っても間に合わねえべさ、ケントとサティアにミッシェンを言いつけるべさ!!』

その声は火の手を遅らせようとするケントにも聞こえた。

『2人でノッゼの森の火を消し、同時に犯人を見つけるべさ!!』

「了解!!!!!!」

これが2人初めてのミッションの始まりであった。
そして、このミッションから長きに渡る戦いの幕が開くことは誰も
予想だにしていなかったのである。

ノッゼの森のパトロール（後書き）

サティア「ちょっと、凄く短くありません!？」

ケント「マジで過去最短の終わりじゃねえか！」

いや、文をいい方になるべく構築していったらこうなりました。
てか、ラストの時点で文追加が超困難になったし、まあ次回は反動で長くなるよ。

ケント「ならいいんだけどな……」

初めてのミッション（前書き）

今回はまあ長いと思います。
でも、そこまでは無いかも。

ケント「曖昧だなあ、オイ」

曖昧Bマインですから。

ケント「意味、知ってる？」

知らぬ！！

ケント「……（汗）」

初めてのミッション

アビルから言い渡された初めてのミッション。

2人の心の中には期待と同時に悪人を捕まえなければならない、という恐怖心が隠れていた。

「さて、まずはこの森をなんとかしないと」

ケントの意見は確かである。ノッゼの森の火の勢いはますます激しくなる。犯人を捜すのに目がいき、森が焼き尽くされれば、そこそレンジャー失格である。

「私は火を止める。ケントは犯人を頼める？」

「任せとけ」

2人は互いの拳を軽く、叩き合う。

「行くぞ、マニョーラ！」

「マニョー!!」

ケントは発火元があるであろう、森の最深部へ。

サティアは拡大を抑えるべく、ある水タイプのポケモンを探し始めた。

（この森なら、カメックスの代わりのあのポケモンがいる！）

サティアが探すはただ1つ。ラグラージだ。以前、レンジャースクールで聞いた講義をこの時、サティアは思い出していた。

大火事には雨乞いが有効だと。そして、彼女がラグラージをキャプ

チャしようとする理由、それは1つ。サティアがパトロールの際に見つけたうつてつけのポケモンがラグラージだけ、というちょっとした悲しい話。

「とにかく、ラグラージは湿地地帯にいたはず。あそこなら安全だから……！急ぎましょう！」

「ソルツー！」

サティアとアブソルは森の湿地帯目指し、駆け出した。
一方のケントは……

「犯人さん、大人しくしよっぜ」

発火犯の怪しい男達を追いつめていた。
男たちは成人ばかりだというのに冷や汗ばかりをかいている。悪人によくあるパターンだ。

「ちっ、レンジャーに出くわすとは災難だぜ！」

「ビビンな！俺たちにや、こいつらがいるだろ！！」

1人の男がある3匹のポケモンを指差した。

まず、全身が煮えたぎるような赤色に包まれているポケモン、ブーバー。次に炎の鬣たてがみを持つ子馬のようなポケモン、ポニータ。そして、陸亀のような姿で赤茶色の肌と黒い甲羅を持つコータス。

否、この3匹がケントの前に立ちふさがる。どれも炎タイプのポケモンでその強さはよく知られている。

しかも、レンジャーとしてはまだ見習いのケントがどこまで対抗できるのか、それも気がかりだった。ケントの吐く息が若干ながら荒くなり始めている。

火事の際に起こるガスをどうやら少し吸いすぎたのが原因らしい。そこに見落とすところはまだまだ見習いであろう。

「マニニューラ、キャプチャに専念するからあの連中を這って置いてくれ」

「マニユ」

マニニューラの意識のほとんどはこの時から実行犯の者たちに向けられた。

そして、ケントはさっき貰ったばかり、新品のキャプチャ・スタイラーを構える。そして、スタイラーから駒のようなものが飛ぶと同時に、ケントはこう言った。

「キャプチャ・オン！」

その頃、サティアは見事ラグラージをキャプチャし、今まさに雨乞いを行おうとしていた。

「ラグラージ、雨乞い！」

「ラグラアアアア！……！！！」

ラグラージの強大なエネルギーで森の上空に雨雲が発生して、そこから大量の雨粒が落ちていく。

「……これで森は大丈夫ね」

雨に打たれて、全身が水浸しとなったサティアが静かに、そう呟いた。アブソルはその間、体を左右に振り、体に付着した雨粒を振り払おうとしている。

だが、この雨が降り続く限りその行動に終末は無い。サティアはクスクスと小さな笑い声を立てる。しかし、お遊び気分もここまでだった。

すぐにケントと合流しなければならぬからだ。サティアは合流するため、足を動かす。ケントなら大丈夫——何故だかその確信がどこかで着いていた。でも、万が一もある。

「アブソル、行くわよ」

さっきと打って変わり、真剣な面持ちでサティアはそう言った。アブソルもそれに応えるように静かに頷く。

その頃、ケントは……

「ポニータ、火炎車！」

「コータス、煙幕！」

「ブーバー、火炎放射！」

男たちが何やら怪しい機械を使い、ポケモン達に命令を下している。ケントは攻撃を避けるのに集中していて、うまくキャプチャ・ディスクを発射できない状態に陥っていた。

だが、そんな中でもケントは抜群の運動能力と判断力を駆使して1匹ずつキャプチャする事に強く専念していた。まず、キャプチャすべきは煙幕を多用するコータス。視界が見えなければ話にならない

からだ。

「まずは1匹だ！」

連続攻撃を避ける内に一瞬隙が生まれた。否、その時を待ってたかのようにケントはキャプチャディスクを放つ。キャプチャディスクの光がコータスを包み込む。それは一瞬であった。

ケントはコータスの攻撃を受けないポイントを性格に把握し、その周囲にキャプチャディスクを動かす。レンジャースクールの天才、と言われた少年にとってはこの程度軽いものではあるが。わずかに数秒でコータスのキャプチャに成功するケント。

それは男達の血相も変わる。

「何だよ、コイツ……！」

「ば、化け物だ……！」

男たちがケントに恐怖の念を抱いている。その隙に残る2匹も一気にキャプチャする事が出来た。

全てが片付いたケントが犯人グループに近づく。

「詳しい話を聞かせてくれないか？」

だが、その目つきは恐ろしかった。見下す、というのではなく怒りそのものが今の彼の言動全てに押し掛かっているように感じたのだ。男たちが恐怖に怯え、逃げていく。だが、ケントがそれを許すわけがない。しかし、素で追いかけても捕まえられるのは1人か2人。そんなのは嫌だった。

「マニニューラ、足元目掛けて冷凍ビーム……！」

「マニユー!!」

否、マニユーラの冷凍ビームで男たちの足元が固められ、動けなくなる。

そのタイミングで、サティアが駆けつけた。

「こっちは大丈夫。そっちも終わったみたいね」

「ああ」

ケントとサティアは同時にこうスタイラーでベースに連絡を取り、こう言った。

『ミッションクリアです!!』

その時、男達の姿が一瞬にして消失した。と、同時にある男が代わりに地に立っていた。

「……あれは……?」

男は白衣を身に着け、メガネをかけている。いわゆる科学者のようなものだ。

「待ちなさい!貴方は何者!?!」

男は何も言わずして、その場にいたフリーディンのテレポートで去っていった。

と、同時にケントの頭にあの時の記憶がフラッシュバックされる。

「あの男……何者なんだ?」

それが辛くても表には出してはいけない。彼が自分でそう決めたのだから――。

初めてのミッション（後書き）

ケント「あの男って誰だよ！？捕まえた犯人もいなくなるし！」

サティア「新キャラですか？」

さあね。

次回は・・・悩んでる。過去の話が、次に進めるか。

ケント「まあ、時間あるから悩めや」

そうします。

最悪な夜（前書き）

今週はレンジャー祭りになりそうです。

ケント「更新量が増加ってか!？」

とりあえずさっさと書きたいんだよね。事情込みだし。

ケント「へ?」

最悪な夜

ケント、サティアの2人は無事にミッションを終え、ノッゼシティへと帰還した。

とは言っても、犯人を取り逃がしたのはかなり大きい、と言えるだろう。当のノッゼシティの中央広場に差し掛かった辺りで何やら人が集っていた。

因みにレンジャーベースはこの中央広場を少し行った先にある。

ケントとサティアがその様子を覗くと、何やら何かを販売している1人の少女の姿が。

少女が大声を張り上げる。

「『秘密の花園』、1個150円で販売してますよー!!」

少女の片手に握られているビンの中のミルクのような液体。

どうやら、秘密の花園という名で売っているようだが、由来が一切分からない。第一、ここで物の販売はダメなはずである。

ケントが少女に食いついた。

「あのさあ、確かこの場所で物を売るのは禁止されてるんじゃないっけ？」

一応、レンジャーという仕事故で声を発したが、あんまり少女は堪えていない。それどころか有り得ないような発言をした。

「市長さんから許可は取ってるから」

「はい!？」

この街の市長は以前、ニュースとかでチェックしていたが、相当の頑固者で有名である。

その頑固者が折れたのだ、それ相応の事情があるように思える。というか、周りからケントが睨まれる様な目つきである。

「で、買う?」

「……いい。今は知らない」
ナナヘブン

「楽園行き」

「はい?」

ケントが首を傾げる否や、ケントの姿が消失した。一方で少女は怪しい笑みを浮かべている。

その数秒後、どこからともなくケントの凄まじい悲鳴が辺り一面に響き渡った。その悲鳴と共にケントが姿を現す。

未恐ろしく、声すら発せずサティアに引きづられる形でケントは輪から退場した。

「ケント、あれを買わないなんておかしいでしょ!？」

「いや、だから何なのアレ」

「秘密の花園、1日でメガHITした今の最先端に行く商品で飲んだ人は必ずその美味しさに発狂するらしいのよ」

（発狂すんのかよ）

心の底でふと突っ込みを入れるケント。

更にサティアは続いて言った。

「あの人はオーナーのナナさん、この秘密の花園の発案者よ!」

ピシッ、と指差しさっきの少女をケントは見た。

ナナ、という少女がまた何をしかすかケントには不安な色しか無

かった。さりげなくだが、サティアの手には2ダース位、秘密の花園が積まれていた。

恐ろしい事にリーダーのアビル達までもが購入に足を運んでいる。ケントは頭の中が完全に真っ白になるのを感じていた。

そんな時、

「泥棒ーッ！！！」

1人の女性が絶叫を上げた。男の手には何と金などが入った財布ではなく、秘密の花園。

花園欲しさにスリをする、何とも有り得ない上に呆れる行動である。だが、これに激昂した者がいた。オーナーのナナである。

レンジャーが動く前にモンスターボールと言われる赤と白の2色の球を放るとそこからミミロップ、キレイハナ、パチリスの3匹が現れた。

「奪い返しなさい」

そのナナの声に応答するように3匹が声を発する。だが、周囲にいた者にとってそれは地獄のような間隔である。

「ギエヒエヒエヒエヒエヒエヒエヒエ」

「ゲボウエエエエエエエエ」

「タツプリタノシンデネ！」

因みに上からキレイハナ、パチリス、ミミロップである。

しかし、単刀直入に言うなら、ポケモンとは思えないくらいの声である。実力も桁外れだった。

あっという間に奪われた品を奪い返すと、お仕置きと言わんばかり、

徹底的にスリした犯人を痛めつける。

止めるべきなのは事実だが、さっきの声に足がすくんだ。正直、誰も動けない状態である。それほど衝撃的なのだ。

数分後、ボロボロとなったスリ犯が捕まり、ジュンサーに注意されるナナがいた。

「恐ろしいな、女って……」

ケントはこの時、男に生まれた事を一瞬呪ったような感じだった。

場所は変わってレンジャーベース。
犯人を取り逃がした事をアビルは一切責めずに、むしろ褒めてくれた。

「犯人を逃がした事より、森を守ってくれてありがとうべさ、犯人優先で森全焼なら殴ってたべさよ」

さりげなく恐ろしいことを口走るリーダー、アビル。
だが、この時のリーダーは普段のダメダメっぷりが無くなっていた。
やる時にはやる人なのだろう。

「リーダー、出来れば今日はマニユーラと一緒にさせてくれませんか？」

「構わないべさ、それ位今日だけならいいべさよ」

アビルの口ぶりから、このセリフはお決まり文句となっているようだ。

よって、この日はケントとマニユーラ、サティアとアブソルの両コンビは一般の宿屋で一泊する事に。

レンジャーベース内で一緒に寝たりは出来ないし、この街にはポケモンセンターが無く、代わりにこの宿屋がトレーナーの下宿先となっている。

そして、時は深夜0時前。

突然それは訪れた。すやすやと明日に備えて寝息を立てて寝るケントとマニユーラ。静かな夜が過ぎていく。

まさに急展開で何かの音が急に響いた。

「あつ、あ・・・あああああああつ
「！！！？」

この時、軽く寝ぼけで起きかけていたケントの目がぱっちり覚めた。
パジャマのままだが、その声が響いたのは隣。すぐさま、扉を開けて、隣の部屋の扉を連続で叩く。

「もしもしッ！何かありましたか！？」

その声が響いたのだろうか、部屋の中でドタバタするような物音が聞こえる。

その最中、レイナ、という名とケンゴ、という名がさりげなく会話を扉越しで聞いていたケントに響いた。

「どうぞー」

「失礼します…… ってうお！？」

部屋の中は見るも美しい光景である。

恐らく部屋に入る前より美しいだろう、全く恐ろしすぎるものである。別の意味でだが。

「レイナさんとケンゴさんですね？」

確認するようにケントはそう尋ねた。

因みに3人は今、ソファアに座って話している。だが、一際目立つのはレイナという名の女の子。

とにかく美しい。キレイだ。もし、彼氏だと言うならケンゴが羨ましく感じるケントである。嫉妬心というものである。

「はい、そうです」

レイナが答える。ケンゴもそれに頷いた。

軽く話を聞けば、友達と3人でこのストリーゼに観光に来たらしい。で、肝心の質問に入った。

「さっきの声ってレイナさんだよな？何してたん？」

『……………』

その瞬間、2人は沈黙した。それだけではない、2人の頬が赤くなっている。

ケントには理解が出来なかった。まさにそのタイミングで……

「秘密の花園、完売しました~~~~!!!!」

と、テンションの高いナナが入ってくる。この感じからもしやこの時間帯までずっと売ってたんじゃないかと、妙に不安になるケント。

「ナナ、また？」

「そう、また。てことでレイナ宜しくね〜」

「ちょ、ちよつと……きゃああああ!!!!」

レイナを引っ張るナナ。ふと、何かに気付いたのだろう、振り向くとケントに向かってこう言った。

「あなた、秘密の花園作るけど見ていく？」

「いいのか？」

「特別サービスよ〜」

ナナの笑みは本物だった。

しかし、その笑みの裏側では完全に悪魔のように笑うナナが形成されていた。

興味があるのでケントもついて行く事に。それを見送ったケンゴはただ1人……。

「大丈夫かな？」

そう、眩くのであった。

生産工場はあまりにお粗末なもので、正直この程度であの有名品を生産しているのかと思うと無性に笑いたくなる。

次の瞬間、ケントはわが目を失う、悲惨な光景を目の当たりにする羽目となる。

中略しました♪

さて、ケントは部屋に入ってもなお、頭の中が真っ白になったと同時にさつきケンゴとレイナが答えなかった理由が何となく明白になったような感じがした。

第一、未だに口がパクパクとして閉じられる事は無い。僅か2、3時間という睡眠時間でその日のケントの夜は明けた。正直、一切寝られなかった。

翌日、レンジャーベース。

ケントとサティアはいつも通りに出勤した。マニユーラ、アブソルも一緒だ。

まあ、ケントは1人あまりにだるそうな目をしているのだが。

「ケント、オメエ大丈夫か？」

デッドがケントの身を案じてくれる。

ケント自身、精神力はかなり限界に達していた。昨晚の事が頭から離れないのだ。言えるのは刺激が強すぎたと言う事のみ。

とりあえず、散歩がてらのパトロールへ向かった。

「アレは……なあ……」

ポケットに両手をつ込み、はあとため息を吐きながらマニユーラと2人でパトロールをするケント。

集中できない。全く末恐ろしい。病み付きにもなりそうであった。

「マニユ？」

マニユーラもいつものケントではないと悟ったのだらう、軽く聞いた。

「心配すんな」

ケントは明るく振舞う。

そんな時、1人の老人が目にとまった。白衣を着て、妙に長い白髭。杖こそ持つてはいるが、役目を一切果たせていない。

ケントはすぐに分かった。それが誰か。あの有名人である。

「いやあ、バカンスで来たのじゃが最高じゃな」

「あの、シンバラ教授ですよね？」

駆けるケントがシンバラに聞く。

「ん？お主はレンジャーか？」

「はい、新米ですけど」

「もし良かったら、レンジャーベースに来てくれませんか？皆喜びますよ」

ケントにそう言われ、逃げられないと分かったシンバラは首を縦に振った。

「じゃ、行きましょうか！」

この時、この出会いが新たな事件を引き起こす幕開けとなったのはもう、言うまでも無い。

最悪な夜（後書き）

ケント「……………」

へ、凹むなよ!!

さて、今回のケンゴ、レイナ、ナナの3人はちょっとコラボみたいな感じで出ていただきました。

因みに相手は他サイトの方です。その人が今執筆している小説は←

<http://syouseit2.gaym.jp/pokemon/read.cgi?no=1581>

ケント「・・・じゃ」

か、帰るなよ!!

コラボして下さったソロさん、ありがとうございました！

大敵の名（前書き）

今回は敵組織の名前が判明します。

ケント「てことは短かったり？」

はい。

次回はまあまあ長くするから（汗）

ケント「確か目標更新明日だよな……」

大敵の名

「まさかシンバラ教授が来られるとは思っても見なかったべさよ！」
「確かに言えるわね」

ノッゼシティのレンジャーベースにやって来たシンバラを生で見ても、それぞれが感嘆の域に達している。

まあ、当の本人はただ単に休暇を貰ったので観光というか、バカンスを楽しみに来たのだと言うからこの偶然は一応、凄い。

ケントがシンバラと会うタイミングが合わなければ、シンバラが今ここにいる事も無いかもしれない。そう思うと、主人公っていうのは何かと都合がいいものだ。

「ま、ワシはバカンスに来たくらい。のんびりするとするよ」

シンバラはそう言うが、ケントやアビル側からすれば昨日起こった事件は軽く話さねばならなかった。

「シンバラ教授、実は……」

「ん？何じゃ？」

アビルはいつもの口癖を止める程、真剣な面持ちで口を開く。ケントとサティアはリアクションに少し困った。

アビルがシンバラに話したのは昨日の事。例のノッゼの森の大火事。そして、その中で出てきた白衣の男、という言葉に軽くではあるがシンバラは少なからずの動揺がある。

「成る程な……どうやらバカンスどころでは無さそうじゃの」

「そうです。シンバラ教授、申し訳ありませんがご協力願えません

か？」

「構わんぞ。ただ、1度行ってみたい場所があつてな……」

シンバラが口に出したのはノッゼシティを北に行った先にあると言われる、アルトピアタウン。

といっても、ノッゼシティ自体がストリーゼの大陸の南西部に位置しているから、アルトピアタウンは北西にあたる。

そして、シンバラが向かいたい場所はアルトピアタウンにあるといわれる湖、アレア湖。このストリーゼにある3つの湖農地の1つだ。

「成る程、アルトピアタウンですか……。ケント、お前がシンバラ教授の護衛をするべさ」

「はい！」

さりげなく、元の口調に早変わりで戻っている。しかし、シンバラは気に留めていなかった。

なぜなら、別の方向に頭を動かしていたからである。

（白衣の男……いや、まさかの……）

このシンバラの予感やはり、的中してしまうのである。

アルトピアタウンとノッゼシティを繋ぐ大洞窟、アルトピアトンネル。

その洞窟には色々なポケモンが住み着いている。特に何も起こる事は無く、2人静かに歩いていった。

どこかから感じる邪悪な気配。何故かは知らないが、全くその全てを知らない今では、とにかく足早に立ち去るのが一番である。そんな時だった。

「止まれ」

どこからともなく響く声。

2人の進むべき進路から足音と共に、1人の男が近づいてきた。ケントもすぐに身構えた。

あの時の男である。しかし、この時1番動揺したのはシンバラである。自然と口が動いた。

「やはりお前さんじゃったか……ナトロン」

「随分と互いに歳を取りましたね……お久しぶりです、シンバラ教授。いえ、師匠」

「師匠!？」

ケントはこの時、激しい動揺に襲われた。まさかの弟子。しかし、当のシンバラは険悪そうな面持ちである。

「よく言うの。生きておったのは嬉しいがこういう形で再会というのは聊か（いささか）苛立つて仕方が無い」

「分かります。あなたがそう言うのも、よく知ってますから。さて、本題に入りましょうか？」

「その前に聞こう。あの時の災厄はお主が全て仕組んだのか？」

ナトロンは答えない。1分ほど経ってから静かに口を開いた。

「ええ。我々『デイストロープ』の名を轟かせる為だね」

「マッドサイエンティストとはお主の事を言うもんじゃない」

「すでに肩書きは消しています、好きなだけ言えば良い。さて、デイストロープの者として言いましょう。シンバラ教授、来ていただきますでしょうか？」

シンバラが拒否の意思を伝える前に2人の間にケントが立った。

「そうはさせてたまるか！お前らみたいな連中にシンバラ教授は渡さない!!」

「……大人のビジネスの話だ。幼いレンジャー君には関係ない」
「関係ないわけないだろ!!」

ケントの強い意志。ナトロンは軽く舌を打つ。

「仕方ない……子供だと思っていたから許していたが、そんなにここで死にたいんだな」

ナトロンが静かに怒りを露にした。指を鳴らすとそこに現れたポケモン。

それは両手にスプーンを持ち、長い髭を蓄え、さらには常に宙に浮いている。そう、フーデインである。

「フーデイン、一仕事です。彼を片付けましょうか」

「……………」

「マニユーラ、気を抜くな。行くぞ！」

「マニユツー!!」

若きレンジャー、ケントが組織ディストロープのナトロンに挑む――

――！！

大敵の名（後書き）

ナトロン「お久しぶりですね、皆さん」

と言う事で敵組織の名前はディストロップです。
因みに由来は破壊、殺戮、洗脳から採りました。
時の呼び方です。

○は英語にした

ナトロン「えらく分かりやすいですね」

君に言われたくないから（汗）

次回はナトロンのフーデインと激突です！

激昂（前書き）

今回はナトロンとの戦闘、及びケントの父の名前が判明します。

ケント「親父の？」

まだ出してなかったんだよね（汗）

激昂

「フーディン、蹴散らしなさい。サイコカッターです！」

ナトロンがそう指示を下すと、フーディンはまるで機械になったかのように忠実に且つ、非道にケント目掛けてサイコカッターを放つ。避ける術などあるはずもない。シンバラが冷や汗を流す中、ケントにサイコカッターが迫る。

しかし、ケントは一切動じていない。それどころか不適な笑みを浮かべた。

「マニユッ！！」

否、マニユーラが自慢の爪でサイコカッターを砕く。フーディンのレベルは中々のものだろうが、それをマニユーラはどの点を取っても、凌駕していた。

サイコカッターを砕いた一撃でそれをナトロン、シンバラの両者が理解し、受け止める。

（あのマニユーラの強さ……まさか、アイツの……）

ナトロンは心当たりがあるのだろうか、焦りの顔色の裏で策を思いつく。

当然、ケントやシンバラはそれを知らない。だが、ケントは焦りの中に僅かに笑った口元に妙に強い警戒心を抱いていた。

「そんなに怪しいかね？」

「元からだ」

「そりゃ確かにね……」

探りあいの話。その中でナトロンは動いた。

それはその時誰が聞いても衝撃的だっただろう。そんな言葉である。

「君にはお父さんとかはいるのかね？」

「……いねえ。数年前に死んじまった。それが何だ？」

「そのお父さんは……元トレーナーだろう？」

この時、ケントは何で知っているんだ——そんな感情に襲われた。シンバラが話に割り込む。

「先の災厄で死んだ者の数は膨大。お前さんはそんな中から特定できるというのか！？」

確かにシンバラの言うとおり、普通なら不可能だろう。

だが、可能にする方法が1つだけあるのにケントは気付いた。同時に生まれる激しい憎しみの憎悪。

「ま、まさか……」

「そう、ケント君。君の思っている通りだ。君の父親であろう男……それを殺したのは我々だ」

名を言わなくても分かった。

だが、シンバラはイマイチ掴めない。ディストローブがケントの父を消したといえ、そのきっかけが分からないのだ。

「お前さんのいっとる者は誰なんじゃ？詳しく聞こうかの」

「それはご本人が言うべきでは？」

チラリとケントに目を向けるナトロン。

当のケントは激昂していた。激昂の中、感情を押し殺し静かに語った。

「俺の親父の名はシュウヘイ。昔は世界最強のトレーナー、という異名がついた男」

ナトロンがニヤリ、と微笑んだ。

間違いは無かった。

それが証明された瞬間、ケントの怒りは頂点に達した。

「お前らだけは絶対に許さねえ！！！」

怒りに身を任せ、ナトロンに迫るケント。

ナトロンの策はうまくいった。まんまと蜘蛛くもの巣に掛かった蝶ちょうのように足掻くケント。その行動の証が直進だった。

「フリーディン、雷パンチ」

稲妻を纏った拳がケントの背後から襲い掛かる。フリーディンがいつの間にか背に動いていた。

先の会話ではいたから、テレポートを使用したのだろう。

「ガッ……！」

強襲に耐え切れず、地に倒れるケント。背に浴びた雷はケントの動きを僅かな時間だが、無力化している。

マニニューラも怒りは隠しきれなかった。一気にナトロンを捕らえようと冷凍ビームを放つも、それはフリーディンのテレポートにより阻まれ、コチラは気合玉で倒れる。

状況は絶体絶命。

ケントはあの日を思い出していた。

火の手が上がりだし、もうこの世にいない両親を家の中で探し続け、やがて意識を失った。

次に起きた時、家が焼け落ち、父と母が死んだ事を知らされた。涙を溢した。同時に「何で僕だけ生きてるの!? 父さん達といたかった……」大声でそう嘆いたのも覚えている。

アルミアにある母の実家でその後は生活し、助けてくれた人がポケモンレンジャーであると知ったのは事件から一年経ってからであった。

だが、今この時ケントは感じていた。

自分は復讐がしたかっただけなんじゃないのか——と。そう思うと無性に自分に対して苛立つてしょうがない。

ナトロンが仰向けに倒れるケントの目の前に立った。その横にはフーデインがいる。ナトロンがケントの頭を踏みつけた。

「全く、このくたばりぞこないの家族め……」

「や、やめんか!」

シンバラが口を挟む。

ナトロンは交渉に入った。ケントの意識はまだ保たれている。

「この少年達を助けたいなら、シンバラ教授。私と来てもらいましょうか?」

「くっ……………!」

若き才能を持ったレンジャーをここで死なせるわけにはいかない。それに見殺しなどシンバラには心が痛過ぎる。

「分かった……………」

「ダメです、シンバ」

「お前は黙っている、ガキ」

ケントを尚、踏みつけるナトロン。

「さあ、手を引くのじゃナトロンよ!」

シンバラがナトロンにそう諭す。だが、ナトロンは高々と笑いだした。

「面白い人だ……。ケントは殺しません、ただこのまま動かれるのも何なので無力化してレンジャーを辞めてもらいましょうか」

「ナトロン、お前……………」

「おっと、下手な事をすればケントは死にますよ」

極悪非道、この言葉は今のナトロンのためにあるとシンバラは感じた。

フリーデインが気絶したマニニューラ目がけ気合玉を放とうと構える。

「マニニューラには消えてもらい、ケントには植物状態にでもなってもらいますか……………フハハハハ!」

「や、止める……………」

「くっ……………」

フリーデインが気合玉を放とうとした瞬間、3人とフリーデインの周りを洞窟に住むポケモン達が覆った。

「な、何だ……………」

言えることは、ナトロンにとって四面楚歌である事。それは確かである。

「ポケモン達が……！」

「ちっ、フリーディン。片付ける」

「……………」

フリーディンが動く事は無かった。

むしろ、へたに攻撃すれば何が起こるかを既に熟知しているようにも感じた。

ナトロンは舌を打つと、ケントから離れ、フリーディンに近づいた。

「今回は見逃しましょう。ですが、次は必ず……………」

ナトロンがそう捨て台詞を吐くと、フリーディンと共に消えた。

「良かった……………」

そう、言つとケントの意識は闇に消えた。

場所は代わり、デイストロープの本拠地。

「チツ、厄介なもんだねえ。あのシュウヘイに息子がいなんてよ」

「ま、誤算だったでいいんじゃないの？」

「そうだね、確かにそう言えるよ」

話をしているのは以前にも出てきたナトロンの仲間である。

一見すれば手下なのかもしれない。

「ところでナトロンの野郎はどこ行きやがった？」

「知らないわよ」

「……………こうなれば依頼するのでしょうか。ポケモンの強奪は得意中の得意の、ハンターにね…………。それで彼が死ねば好都合ですけど」

ナトロンの新たな策とは一体？

そして、ケントの父、シュウヘイが狙われた理由とは？

明かされる日はまだ遠い…………。

激昂（後書き）

今回の最後に飛び出たワードで分かる人には分かりますよ？

一応、連射はおしまいです。

強奪者来襲（前書き）

今回からしばらくコラボです。

コラボ相手はもう分かりますよね？

では、本編どうぞ！！

強奪者来襲

ストリーゼ地方の西に位置するアルトピアタウン。

ケントはこのある一室に運び込まれていた。ケントが倒れてシンバラにはやる事が一気に出来てしまったが、気にもしなければ、恨みもせずに全てやってのけた。

命を賭けて守ってくれたのだから、それはそれで当然である。しかし、気がかりな事が1つあった。ナトロンに追い込まれたあの時のポケモン達の反応はまるでケントを守るかのようにであったのだ。とにかく、シンバラにもそれなりの収穫があったのは間違いないかった。かつての弟子、ナトロンが6年前の災厄にも関わっていたのは確かだが、さらにその裏が存在する事がよく理解できた。デイストロープ——過去に世界を震撼させようとした悪の組織、ゴーゴー団やヤマミ団、はたまたカントーやジョウト、ホウエンなどにあった無数の組織の中でもかなりの凶悪性を持っていることが把握できる。

「うう……」

ケントがその瞳を開いた。その目の前にいたのは最愛のパートナーのマニョーラ、そして美しい黒髪を持つ1人の少女——サティアである。

「大丈夫？」

「ああ、シンバラ教授は？」

ケントがゆっくりと体を起こす。まだ頭が軽く痛むが、大した事は無い。レンジャーの仕事はばっちりこなせそうである。

ナトロンとの交戦中に倒れたのは、ケントも覚えている。デイストロープに対する憎悪が一層増し始めていた。

「あんたが倒れた後、ノッゼに連絡があつて私が駆けつけたの。あんた、デイストロープって言う組織と何かあつたの？」

「……デイストロープに親父達を殺されてたんだよ……」

歯を食い縛り、ケントは静かにそう言った。サティアの表情も同時に一転した。

「……そんな事聞いて……ごめん」

「いいさ、いずれ分かる事だったし。それに……連中を止めないといけないしな」

そう表向きは明るく振舞うケント。しかし、その裏ではデイストロープに対する憎悪が増していた。そんな事を当の本人は知らない。サティアから色々聞いた。あの後、レンジャー機関の中枢部は大パニックに陥ったのだと言う。長年の謎が急に進展を見せたのだから当然だろう。同時にデイストロープの活動が行われると把握した本部がトップレンジャーをよこす、という事態にまで陥ったのだと言う。

「気がついたのか、ケント君。どうじゃ？ 実家の味は」

シンバラが出てくるや否や、とんでもない事を口走る。

「実家ってシンバラ教授のですか？」

「違う、君のお父さん……シュウヘイさんの実家じゃ」

「えっ！ ！？」

ケントはあまりに大きい衝撃を受けた。父の実家には実は1度も行った事が無い。そのため、父の実家に行ってみたいと思った事もあったが、まさかストリーゼ地方が父の実家がある場所とは思ってもよらなかったのである。

その時だった。

空に近づく暗雲。進む稲妻。

同時にスタイラーが鳴った。

「もしもし？」

「おおっ、ケント気付いたべさか！なら早速ミッションだべー！」

「何じゃアビル。何かあったのか？」

シンバラがスタイラー越しでアビルに問う。

「情報を手したべさけど、今ここにサンダーいう伝説のポケモンとポケモンハンターが接近中なだべさ。ハンターからサンダーを守るのがミッションだべさ」

「なるほどの。……もしかしたら一枚ディストローブが囓んどるかもしれんな……」

シンバラのこの予想は見事なまでに実质的中しているのである。この時点では何も知らない一同にとって予想に過ぎないのだが。

「場所は？」

「アルトピアタウン外れの崖だべさ。その辺りにサンダーがいるはずだべ」

「了解しました」

ケントとサティアがスタイラーを切ろうとした途端、シンバラがア

ビルにある事を依頼した。

「アビル、ケントにポケモンを使わせてやってくれんか？」

その言葉の意味がアビルにはすぐ理解できた。それはポケモントレーナーとして、同時にポケモンレンジャーとして活動する、という事。

当然、アビルは規則に反しているからと反論したがシンバラはワシが上には言っし、責任も取る、と強く主張した。

デリストローブの狙いはケントと自分。だが、ケントには未来がある。その未来を壊したくないが故の選択である。そんなシンバラの思いをケントは心のどこかで理解していた。

アビルも流石に折れたのか、渋々了承した。そして、シンバラはケントに言った。

「マニニューラを入れて6匹のパーティーを作るんじゃ、早く！」

「ありがとうございます！」

数分後、ケントの腰にはベルトは巻かれていた。そこには1つずつモンスターボールがある。

「準備、出来ました」

「急ぎましょう、ハンターはもう来てるかも！」

「ああ、分かってる！」

ケントとサティアの2人はアルトピアタウン郊外の崖へと向かった。それと入れ違いで1人の青年がシンバラに話しかけた。その青年の特徴を挙げると、黒髪を少々雑に切り、色黒な青年だ。その青年の横にはアグノム、と呼ばれる珍しいポケモンがいた。まあ、シンバラはそんなポケモンの事を知らないのだが。

「あの、ちよつとええか？」
「何じゃ」

その青年はこの世界で言う、コガネ弁のような喋り方をしていた。
シンバラはそんな事を気に留めずに返事をしている。

「この空、一体何があったんや？」
「何でも、伝説のポケモンサンダーが来ているらしいんじゃ。あ、
行つてはならんぞ。危ないからな。今、レンジャーが動いとる」
「おおきに、よう分かったわ」

少年はシンバラの元を離れた。しかし、シンバラの元にまた別の者が
来たのもあつてか、不審には思われなかったようだった。

その頃、雷が連続で鳴るのに対し、伝説のポケモンサンダーはその

姿を一向に現そうとはしない。それはそれで充分好都合なのであるが。

一方でハンターを一切見かけないのも若干不審に感じていたりするケントもいた。その横には警戒態勢のマニョーラとアブソル、そして真剣な面持ちのサティアがいた。

「来ないな……」

「そうね、多分サンダーが来るのを待つてるんじゃない？」

「そうであってほしいもんだ」

ため息混じりな声でケントはそう答えた。

まさにその瞬間。ケントの背後で何かが光る。それを見たサティアが血相を変えた。

「ケント、危ないッ!!」

「えっ——!!?」

ケントはいつの間にかサティアに押されていた。そして、サティアの体に何かが命中する。次の瞬間、サティアは黄土色に染まりきっていた。何もかも。

石化、というものである。

「サティア!？」

無論、サティアがそれに応じるわけがない。ケントは背後の茂みに向かつて大声で叫んだ。怒りの感情を露にして。

「誰だ!?!そこに隠れてんのは!!出てきやがれ!!」

犯人側もさすがに隠し通すのは無理があったのだらう、のそのそと

その姿を現した。

その犯人とは何とさつきシンバラに話を聞いていたあの青年とアグノムである。」

「……ポケモンハンター……って事か、あんた等が」

「そうやな。その女の子、元に戻したいやろ？」

青年がサティアに向かって石化する元となるものを放ったのはもう分かっていた。警戒心が途切れる事は無い。

「……目的は何だ？」

青年は静かにケントを指差してこう言った。ポケモンハンターの真の目的を。

「自分や」

「——ッ!？」

ケントは動揺を隠せなかった。衝撃が走る。同時に自分のせいでサティアが——そんな感情に襲われた。畏なのは分かってはいるが、そういう感情以外になる道が無かったのである。

青年は続けて言った。

「自分、噂を聞かせてもらったけど、伝説のトレーナーの息子らしいな？」

「お見通しって事か……」

「もし、あの子を元に戻して欲しいなら……もう分かるでな？」

それはあまりにも残酷な……選択。

両親の仲間を取るか、今の仲間を取るか——想像を絶する選択をケ

ントはこの時強いられたのであった。

強奪者来襲（後書き）

はい、という事でコラボ相手はアブソルさんの作品、「ポケモンハ
ンタージュンの冒険」です！

今回はジュンとアキラに出ていただきましたが、まだ出る予定です。
因みにあちらでもこのコラボはやられるので、ポケモンハンタージ
ュンの冒険と並行して読むとより面白いと思います。

ケント「……………」

ケント？

ケント「サティアは元に戻るのか？」

そりゃ、戻るんじゃない？僕にも分からないんだよねー♪

ケント「……………」（激怒）「

選ぶな、自分で守れ（前書き）

さあ、前回のラストはとんでもない事になりましたが・・・

ケント「どうなるんだ？」

では本編どうぞ！

ケント「逃げんな！！」

選ぶな、自分で守れ

ケントはただ黙って悩んでいた。10代でこれほどまでに大きな選択を迫られるなど、早々ありはしないからだ。

ポケモンハンターに親のポケモンを取るか、それともサティアを取るか——迫る決断の時。

「早せえ。決まらんのなら俺らからいくで？」

ハンターが動揺を誘う。ケントもそんなことくらい分かってはいたが、今の自分は冷静な、普段通りの判断力が欠けている。

どっちを取るかなど、今の彼には出来はしない。だが、主導権は実質ハンター側にある。アブソルもケントが何とかしてくれる——そう感じさせる信頼の眼をしていた。なら、なお更である。

（親父、お袋……すまねえ。俺、どうしたらいいか……）

目を瞑り、静かにハンターに歩み寄るケント。彼の中の答えは決まったようなものだった。マニニューラも止めようとしたいが、今のケントが背負っている荷があまりに重いのか、何も言えず、ただ固まるのみ。

勝敗は決したも同然だった。そんな時、ケントの足が止まった。迷いなのか？ケントは始め、そう感じていたが違った。

古い記憶が記憶の奥底からフラッシュバックしているのだ。

「ケント、いいか？」

ケントに声をかける低い声。ケントの背は今の半分より少し高く

らいだ。そう、彼の過去。

「お父さん、どうしたの？」

「ケント、お前に言っておきたい事がある。いかなる時も諦めるな。ポケモンと人は無限の可能性を持っている」

「？」

当時のケントには理解できないと、分かった声の主。そう、ケントの父——伝説のトレーナー、シュウヘイ。

シュウヘイは軽く笑うと、モンスターボールからポケモンを出す。現れたのは赤き飛竜、リザードン。父、シュウヘイのパートナーである。

「リザードン、ケントの言う事を聞いてあげてくれ、いいな？」

「リザア」

ケントにシュウヘイはこう言った。

「いいか？ケント、リザードンに向かって火炎放射！と言ってごらん？」

「う、うん……リザードン、火炎ほーしゃー！！！」

「リザアー！！！」

刹那、リザードンが上空に向かって火炎放射を放つ。ケントはそのリザードンの勇ましい炎がカッコよかった。ケントの目がキラキラと輝く。

数十分後、リザードンの背にはケントとシュウヘイが乗っていた。シュウヘイが静かに口を動かす。

「いいか、ケント？」

「なあに？」

「意味は分からなくても良い。記憶に留めて置くんだけ。俺たち人間はいつか、重大な選択が来る。その時、お前には・・・」

「お前には・・・？」

「全て守ってくれる男になって欲しい。やり方が分からなくても良い。だが、何かを捨てて何かを助けるのは俺は許さんからな」

「・・・うん！」

この時、ケントは意味はあまり分からなかったが、大きく、元気に頷いた。

「・・・そうだよな」

ケントが戻っていく。ハンターに背を向けたまま。

やがて、ケントが元の位置に戻ると、ケントは自らの意思を表した。

「俺はお前らなんか屈しない！サティアを元に戻す方法はお前たちを捕まえてからだ！！」

ハンターもこの一言に交渉決裂、そう踏んだのだろう。チツ、と軽く舌を打つ。だが、それは男ではなく、ポケモンのアグノムだった。

「しゃあないな、力づくでいくで！行くんや、エアームド！！」

ハンターが繰り出したのはエアームド。体を見る限り、かなり鍛えられているのがよく分かる。

だが、敵はそれだけではなかった。何と、アグノムがシャワーズを繰り出す。

「ポケモンがポケモンを使う！？……変なアグノムだな……」

ケントも流石にその光景には唖然だったようだ。だが、ケントの口元が軽く緩む。

「思いつきし、暴れるか！行ってくれ、ムクバード！リザードン！

！」

ダブルバトルの横領で、ケントはムクバードとリザードンを繰り出す。

ケントの目は本気だった。こいつらを捕らえて、サティアを元に戻す方法を吐かせたかった。

「マニユーラ、アブソル。サティアを頼む」

それは低い声だった。その言葉から場の雰囲気を感じ取ったマニユーラとアブソルは静かに後方にサティアの石像を持って動かす。

「レンジャーはポケモンバトル出来るんか？」

ハンターが挑発するように言ってきたから、売り言葉に買い言葉らしくケントはこう返す。

「今回は特例さ。お前らみたいな腐った連中が俺目当てで来るんじやねえかって推測した人がいてよ。特別に実家から引き取ったのさ。お前らのポケモンじゃ、親父のポケモンには程遠いがな」

「舐めてくれるやんけ……」

ハンターが若干苛立ちを見せたようだが、熟練者か、落ち着きを取り戻すのに時間はかからなかった。

「いくぞ！ムクバード、シャワーズに突進！リザードンはエアームドに火炎放射だ！！」

その一言が開戦の火蓋となり、同時にムクバードとリザードンが行動を開始する。

一方、サティアの石像を後方に持ってきたマニニューラとアブソルは……。

（分かるように訳しますので、お楽しみください）

「ケントさん、大丈夫か……」

「ケントは大丈夫さ、シュウヘイのポケモンは最強だし、味方だ。絶対勝てる」

前者のセリフはアブソル、後者のセリフはマニニューラだ。

「サティア……」

舌を噛み締めるアブソル。マニニューラはある事に気付く。

「アブソル、お前確か……目覚めるパワーが使えたよな？」

「そうだけど、それが？」

「……それを今のサティアにぶつけよう」

「なっ！？お前、もしもの事があつたら……！」

食ってかかるアブソル。だが、マニニューラの強い意志もあつた。

「もし、ハンターを取り逃がしたらそれこそおしまいだ！俺達だつてココで指咥えてる暇貰いたくないだろ！」

「……マニニューラ……。わかった、やってみよう」

アブソルがそう言うのと頷く。否、アブソルの体から無数の炎の小さな球が湧き出る。これがアブソルの目覚めるパワーだ。

それがサティアの石像の周りを回転し、エネルギーを放出していく。

（頼む、サティア！目を開けてくれ……！）

アブソルの懸命な願い。マニユーラはその間、邪魔者が入らぬよう、見張っていた。

アブソルの息が少しずつ上がりだす。だが、流石のアグノムも感づいたようで、バトルする中から技を放つ。

「大文字!!」

マニユーラとアブソルに襲い掛かる灼熱の炎。マニユーラの手の間にエネルギーが溜まり、それが放出された。

「させねえよ、冷凍ビーム!!」

冷凍ビームが大文字を相殺する。同時にサティアの石像に異変が起こった。サティアの石像が炎を纏ったかのように光ると、アブソルとマニユーラの眼前には元のサティアがいた。

「ソル―!!」

すかさず、アブソルがサティアの体にダイブする。

「アブソル……心配かけてゴメンね……」

アブソルの体を優しく撫でると、サティアはケントの元に走り出した。

「ケント、ゴメン」

「いって。助けてくれて、サンキューな」
「うん」

ケントとサティアがハンターを見つめる。

ポケモンハンターとの戦いはコレからが正念場である――。

選ぶな、自分で守れ（後書き）

次回はポケモンハンターと本格的に開戦です。

なお、ケントがバトルしますがゲームでもいますよね？ポケモンレンジャーって分類の人（笑）

V S ポケモンハンター！（前書き）

今回のラストはかなり壮絶です！

ケント「作者？それはどういう……」

まあ、見れば分かるさ。

ケント「はあ……………」

V S ポケモンハンター！

ケントの中にあつた迷いは全て断ち切られた。

ケントは今一度深呼吸する事で平常心を取り戻す。

「ケント、私ももう黙つてられない」

サティアの目には怒りの感情が込められていた。
だが、ケントはどうしても戦わせられなかった。

「サティア、間違いなくハンターはお前のアブソルも狙うはずだ。
だから、アブソルを守ってやってくれないか？」

「何？信頼してないの？」

「してるさ。でも、アブソルを戦わせて、アブソルが捕まってもダメだ。全員が笑顔で帰還する。それが俺の中でもモットーなんだよ」

ケントの言葉に間違いは無い。

仮にアブソルが捕まれば、こちらにとって圧倒的に不利にもなる。
いろいろな可能性を示唆した上でケントはそう言った。

「分かった……でも、負けたら承知しないから……！」

「わかつてるさ」

ケントがボールからポケモンを繰り出す。

「頼むぞ、ハッサム……！」

「サム！」

「ハッサムかいな……！」

ハンターの内、1名はエアームドを使っているし、相性的な面でもエアームドは間違いなくハッサムを狙うはずだ。
しかし、空にはリザードンがいる。されども、動きは妙に鈍く見えた。

(……やっぱり皆、まだ立ち直れていないのか……?)

ケントは父、シュウヘイがこの世を去った後の彼らを知っていた。
まだまだずつといたかった大切な人なのに、こんなに早く逝ってしまふ悲しみが彼らのやる気全てを奪っていった。その脱力感から未だに脱せていないのだろう。
しかも、急に呼び出したのだ、動きに少々ムラがあるようにも感じていた。

「ハッサム、アブソルに向かってシザークロスだ」

ハッサムのスピードは相変わらず速い。シュウヘイのポケモンの中で素早さは随一を争うレベルなのだから、見方さえ変えれば、当然なのかもしれない。

しかし、アブソルはそんな攻撃を紙一重で避ける。あのアグノムはずっと気がかりだった。

まさか、とも考えているがそんな事は有り得るはずが無い。人間がポケモンになんて、現時点の科学でも証明——いや、有り得ない事なのだから。

アブソルの影が無数に増える。影分身だ。

「エアームド、ハッサムにゴッドバードや」

「リザードン、行かせるな!」

リザードンがエアームドの前に立ち塞がる。ゴッドバードで迫るエアームドを何と、素手で受け止めた。

「な、何やて！有り得へん……」

「リザードン、最大パワーで火炎放射だ！」

零距离からのこの一撃は流石に避けきれずにエアームドは地に倒れる。

「お疲れさん。行くんや、フライゴン！！」

ハンターが次に出したのは精霊ポケモンのフライゴン。リザードンは見る限り、体力はもう限界そうだった。

「戻れ、リザードン」

ケントは即座にボールでリザードンを引っ込める。次に出したのは

……

「頼むぜ、暴君！ギャラドス！！」

ケントのボールからギャラドスが現れた。轟く雄たけび。相変わらず、荒っぽそうな奴である。

「頼むぞ、ギャラドス。ハイドロポンプだ！！」

「大文字や」

やはり、真っ向から挑んでも軽く相殺される。

ケントがちらりとハッサムを見ると、アブソルを押す戦いぶりを見せるハッサムがいた。

影分身はかなり厄介だが、このハッサムは何かと感が良い。単独でやれると理解しきっていた。

「ギャラドス、竜の舞」

「させへんで！フライゴン、流星群や」

（掛かった！）

ハンターの指示に従い、フライゴンが流星群を放とうとする。そこで咄嗟に指示を書き換える。

「ギャラドス、ハイドロポンプ！」

「何！？」

竜の舞の動きからギャラドスはフェイントでも掛けているのが丸分かりだったのだろう、すぐさまハイドロポンプを発射した。当然、フライゴンは寸でのところを突かれ、ハイドロポンプをもろに浴びる。

「やってくれるやんけ……」

ハンターが舌打ちしながらそう言う。その時、ハッサムがこちら方向に飛ばされていた。目は回っている。

対する相手はボーマンダ。アブソルは撃退した、と考えても良い。

「お疲れ様、ゆっくり休んでくれ」

ケントはそう言うと、ハッサムをボールに戻す。

「マニニューラ、行くぞー！」

マニユーラは静かにそう、頷くと身軽な動きで戦場に立つ。そんな時だった。

「フオオオオオオオ！！！！！！！」

サンダーの放ったであろう、稲妻がアグノムの持つバグに当たる。同時にアグノムの体も痺れた。

「くっ、引き上げるしかないやんけ……」

ハンターが小声でそう呟く。しかし、逃がすわけにはいかなかった。

「ギャラドス、マニユーラ！絶対にハンターを逃がすな！」

「ギャアアアア！！！！！」

「マニユツ！！」

身構えるマニユーラとギャラドス。

しかし、そこへボーマンダの流星群が襲い掛かる。いや、正確には2匹やケント、サティアは狙っていない。目晦まし程度に放ったのだ。

辺りを覆う土煙。それが晴れた頃には、ハンターの姿は無かった。

「クソッ、逃がしたか……」

そう呟くケント。しかし、サティアの顔には笑みが映っていた。

「でもいいじゃない。結果的には全部守ったんだから！」

「……そうだな。素直にそこは喜ばうか」

ケントがそう言い、笑みを零した瞬間だった。

ケントの体を何かが貫いたように腹部から血が噴き出した。ケントの目の色が変わる。いや、全体的に空気が一変した。ケントが痛みを堪えきれずに地に倒れる。しかし、その何かは容赦なく、ケントの両足も貫いた。

「弾……！？」

「ギヤアアアアア！！！！！！」

怒りに震えるギヤラドスが破壊光線を弾が来た方向に放つ。破壊光線は放たれたであろう場所で爆発を起こした。正確な位置が分からない以上、予測でしかない。

ケントの体から止まる事無く流れる血。このままではケントは死んでしまう。

咄嗟にサティアはスタイラーで救護班を要請した。

「……何で……俺たちが……狙われ……る……んだ……」

ケントの意識はそこで途切れた――。

V S ポケモンハンター！（後書き）

サティア「作者さん？」

ん？

サティア「ケント、ヤバ過ぎる展開なんですけど！？」

マニョーラ「マニョマニョ！」

アブソル「ソルッ！」

果たして、ケントの運命やいかに！？

サティア（強引に切った！！）

それぞれの行動（前書き）

今回は視点変えが激しいです。
ご注意下さいまし（誰

それぞれの行動

ケントは何も無い、灰色のみの薄暗い空間にいた。

（ここは一体……。確か俺は……）

自らの身に何が起こったのか未だによく理解し切れていないケント。だが、少なからず言えるのはここは死者の世界なのだろうか、という事を窺い知る事が出来そうだった。

「……………ト、……………ケン……………ケント」
「誰だ？」

ケント、と呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り向くケント。
そこにいたのは、紛れも無い父の姿。

「親……………父」
「大きくなつたな」

シュウヘイの優しい言葉にコクリとただ頷くだけのケント。間違い無さそうだった。

「ケント、一応言っておくがまだお前は死んでない。生死の境目にお前はいる。だから、まだ生きてもいるんだ」

一瞬覚悟を決めかけたケントに言うシュウヘイ。ケントは最近自らの身に降りかかった事件について父に問いたです。

「親父、何で俺たちが直接狙われてんだよ……。なあ、何で!？」

「お前まで狙われるとはな……。仕方ない、話すでしょう」

仮に生きれたとすればまた狙われる。

息子が自由に、且つ思い切り生きていくには話すしかないと言ウヘイは悟った。

「俺が伝説のトレーナー、と言われてる事はお前も知ってるだろ？」

その言葉にケントはただ首を頷かせるだけ。

シュウヘイは話を続けた。

「俺にはな、少し特別な力があるんだよ。……正確には俺の親父、婆さんもだな」

シュウヘイの父、そして祖母にも宿る特別な力。どうやら血筋というか、一家ぐるみの関係らしい。

そして、何処と無く理解できた。自分にも宿るその力。それがディストロップやハンターにとって大きな障害になるであろう事を。

「親父、その力は一体なんだよ、教えてくれ」

「分かってる。そう急かすな。……俺達一族に宿る力……それはポケモンと『心を通わせる力』」

「心？」

一瞬、その言葉を理解するのは難しかった。現実シュウヘイも自らの父に言われた時は全く理解できなかったのだ。

「簡単に言つとだな、ポケモンと話ができるわけだ、俺達は」

「ポケモンと話が……」

信じられなかった。

確かに父はポケモンと仲が良い。それはどんなトレーナーとでも同じ事。しかし、そんな力を宿していたとは信じようが無かった。しかし、自分たちだけが狙われる、というのがこの力なら多少辻褄は合う。

「連中はお前も狙ってくる。きっとどこに逃げてもその事実が変わらないし、同じだ。例え力が目覚めて無くてもな」

「俺のは目覚めてないのか……」

「ああ。だが、この現状だ。放っておくわけにはいかない。だから、これを持っていけ」

シュウヘイが取り出したのは手の平に全て乗りそうな小さな小袋。中には何色にも染まっていない宝石があった。

「これは？」

「糧。俺達一族はその糧があるからこそ話ができる。それは俺の糧だ。どうせもう必要ないし、お前の糧を呼び覚ますいい起爆剤にしようと思ってな」

「……よく出来たな、こんな事」

「ご先祖様のお力ですよ」

笑うシュウヘイに釣られ、ケントも軽く笑みを零す。その時。ケントの体が足からではあるものの、消え始める。

「——！？ど、どうしたんだよ！俺の体！！」

「あー、こりゃ生きれてる事確定だわ」

顎に手を当て、気楽そうにシュウヘイは言った。正直、呑気なものである。あの世はそれだけ良い場所なのだろうか、気になってしま

う。

「そっか……。てことはお話しするのもココまでって事かな」

「そうだな。……………頑張れよ、ケント」

「……………ああ」

力強く、且つ固い決意の頷き。

その頷きで顔が上がる頃にはケントの全てが消失していた。

「……………強くなつたな、あいつ……………」

数年ぶりの再会で自らの子の成長を間近で見れて、嬉しく感じるシユウヘイがそこにいた。

その頃、ケントの実家にいるポケモン達で決起集会が開かれていた。ハンターとの戦いの後、ポケモン達はシンバラやサティアの手により、実家に転送されたのだ。

「皆聞いてくれ！オレ達を利用してしている人間がいる！！」

ハンターとの戦いの最中聞き出した事をリザードンがそのまま言った。

それにムクバードが賛同する。

「ハンターはボク達を利用して、ケントを……ケントの想いを大き

く動かした。ケントはボク達を守ろうと必死なんだ！！」

しかし、ポケモン達は未だに大半がシュウヘイを失った事に対するショック心から開放されていない。それが彼の大切に使っていたポケモン達ならなおさらの事。耳にすら入っていなかった。

リザードンが怒る。

「いい加減にしろ！シュウヘイがいなくなって悲しいのは分かる！だが、オレ達を守ろうと必死になっているケントのためにオレ達だつて出来る事があるだろ！！！」

「そうだな」

リザードンの言葉に頷くポケモンが1人。

「……カメックス」

「シュウヘイに対する恩は皆それぞれ。その恩を返すのに良い機会じゃねえか。シュウヘイだっていつまでも俺達が引きずってたら、俺達皆殴ってるかもな」

その一言が引き金となり、ポケモン達の目が光りだす。目的は1つ。恩を返すため。シュウヘイ亡き今、ケントを少しでも援護できるように自分たちは自分たちのできることをするだけだ。

「カメックス、頼むぜ」

リザードンが言った。カメックスもそれに頷く。

「勿論だとも、親友」

その頃、アルトピアタウンにはアビル、アリサ、デッドのノッゼメンバーが集っていた。これでアルトピアには全員が揃った事になる。

「ハンターを止めたのに、こんな事ってありかよ……」

デッドがそう嘆くように言う。

「いや、まだ死んでないべき。勝手に殺したら失礼べきよ」

アビルのこの一言には頷ける。現実には心拍数こそ不安定になりがちだが、容態は一応安定しだしていた。アビルが外に出る。それを追ってアリサも出た。

「リーダー？」

「きつと狙撃した奴は近くにいろべき。オラはそいつを探してくる」

その声は低くなっていた。アビルが珍しく本気で怒っている証拠。アビルが本気で怒ることは滅多にない。仲間を傷つけられての怒りなのは率直に頷ける。アリサはそんなアビルを止める事は出来なかった。

「……無理しないでね」

後姿を見て、静かに呟くアリサ。そこにデッドが駆けつける。

「アリサ！ ケントの意識が戻ったぞ！！」

「分かったわ」

「ケント、無事でよかった……」

サティアがケントの左手を両手で包み、涙を零しながら言った。

「心配かけたな……ごめん」

「本当に心配したんだからね！」

『ケント、生きてて俺は嬉しい』

不意に聞こえた声。人間は今、自分とサティアしかない。他にいるのは相棒のマニョーラと眠っているアブソルくらいだ。

「……聞こえる」

「え？」

「……ポケモンの声」

父の言葉に偽りなし。それをこの瞬間、ケントは悟る以外なかった。

「……全くしぶといとは思わないか？」

「言えるわ。狙撃を受けて、生きながらえたらしいしね」

モニター越しに会話を交わすナトロン。相手はあのポケモンハンターの上司。

「で、何の用？ただ話がしたいわけではないでしょう？」

「そうだな。ちよつと予定を変更して、そちらにこれからポケモンの捕獲を頼みたい。まあ、実質依頼でも何でもないのだがね」

「どういう事？」

確かに今のナトロンの話では全く意味が分からない。

ナトロンはモニター越しにいる少女に続けて話した。

「我が組織で最新兵器が完成してね、その実験体として伝説のトレイナー、シユウヘイのポケモンを標的にしようと考えている」

「立派な依頼じゃないかしら？」

確かに実験と言うと、自組織のアジトでやるのが基本。しかし、ナトロンが言った依頼ではない、という言葉の真意がそこで出される。

「それは現地で実際に確かめるためのもの。ポケモンの意識などを混乱させたりするもので我が組織でやるわけにもいかない。……吞めたかな？」

少女も納得がいったようだ。

「つまり、あなたが実験している間に私達がポケモンを捕獲する……と」

「そう。一度すれば連中は逃げてしまうのでな。何度も持続してはやれない……それにこちらはデータが欲しい程度なのでポケモンの扱いは君達に任せる」

「防止策と居場所は掴めてるの？」

少女の問いにナトロンは左の人差し指で眼鏡を軽く突付いて笑みを零す。

「勿論。防止策となる道具はミツシヨンの時に下っ端が手渡す。居場所もついさつきようやく掴めた」

「……で、場所は？」

「……アルミア地方の外れにある小さな孤島、『レイル島』」

「レイル島……確かボイルランドが一番近いはずね？」

ボイルランド、というのはアルミア地方の東の海にある火山島のふもと町。

そして、レイル島はこのボイルランドから少し北にいった先にある孤島。そこにシュウヘイのポケモン達は集っているのだ。

「その通り。物資の準備もせねばならなので、作戦は3日後。現地集合で落ち合おう」

ナトロンの笑みが新たな戦いの幕を開かせた――。

それぞれの行動（後書き）

ケント「ナトロンの奴、何企んでるんだよ……」

それは次回以降のお楽しみさ。

サティア「嫌な予感しかしないけどね……」

そーゆーの言わない！！

帰郷（前書き）

今回は少々ほのぼの風景多いです。

帰郷

「……マジかよ？」

『大マジだ』

その後、ケントは自らの能力にチェックをするためにマニユーラと話をしていた。因みに現在夜の9時前。

不思議な事に撃たれていた足の傷はまるで無かったかのように消失していたから、医師共々ケントやその仲間達も驚きを隠せなかった。しかし、今回の事でレンジャーユニオンも一層警戒を強めている。ケントの父がシュウヘイなのは知る者も意外や意外で少なくとも無いが、それが影響したのではと言う者も多いのは事実でさまざまケントを本部で保護するべき、と言う意見も飛び交ったほどだ。

しかし、そんな事を当の本人が望むはずが無かった。大人、というのは何かとずるい。本人の意思を一切の如く無視し、勝手に採決を決めるのだから。勿論、最高責任者のササコ議長はケント本人の意思に任せるべきだと言って、こちらも動かない。レンジャーユニオン内もまた、膠着状態に近いものとなっていた。

そして翌日。アビルがケントにあることを言い渡した。

「療養？」

「そうべき。足の傷は無かったにしろ、しばらくまともに動けるベさか？」

ケントは無言で何も言えなかった。何とも言えないし、第一まだ傷が痛む。

「……何とも言えない」

「レンジャーは万全の状態で動く必要があるべき。なら、ゆっくり休みを取るべきよ」

コクリ、と静かにケントは自身の首を縦に振り、その日の内に船に乗った。戦ってくれたリザードン達も心配しているし、早く安心させたいのが本音である。

『……ケント』

「何だだよ？」

『……無理だけはしないでくれ』

静かに甲板でマニユーラはそれだけ言った。因みに現在のケントはジーパンに白と緑のチョッキの服を身に着けている。いわゆる私服だ。実家の方には連絡を既に入れているから別に問題は無い。彼は全ての者が待つ、レイル島へ歩を進めていた……。

その頃、デイストローブアジトでは――。

「実験成功！実験成功しました！！」

そう嬉しさのあまり、興奮気味で1人の科学者が言った。勿論、

ナトロンではない。当の本人はその背後で椅子に掛けて高みの拝見、という状態になっている。

「……これで試作品とはいえど、完成したわけですね……。我らの『兵器』が」

不敵な笑みを浮かべるナトロン。彼の傍らのケースには補聴器ほどのサイズをした小さな耳栓のようなものがある。

ナトロンが立ち上がった。

「総員、直ちに発進準備を」

ナトロンはそう言うと、一室を後にする。

ナトロンは1人、長い廊下を静かに歩いていた。そこに声を掛ける1人の男。

「ナトロン、またお出かけか」

「ええ。……そろそろ出番です、お願いできますね？」

「ああ、任せときな」

「……頼んだ」

ナトロンはその男を信頼しきった声でそう言ったのだった。

レイル島。

ケントにとつては数年振りの帰郷となる。現実にはレンジャースクールの卒業式後、休む暇も無く、マニニューラのボールを転送してもらったのだ。

「全く変わってないな……」

懐かしむケント。故郷ふるさとのような地なのだから、そういう感情が出ても仕方が無い。

ポケモン達の住む広い牧場のような場所に出ると、皆がバトルなどをして汗を流していた。ポカンとケントの口が開く。土気1つ無かった状態だったのが突然のように変貌したのだ。動揺の色も隠せない。しかも、それがこの前ハンターとやり合った際、リザードン達の様子を考えると尚更である。

「一体何があつたんだよ……」

『俺だつて分からねえよ』

マニニューラもその光景に首を傾げた。その中でカメックスと特訓をしているリザードンがケントに気付いた。リザードンとカメックスがやって来る。

『ケント!』

『ギャラドスから話は聞いたぞ、怪我は大丈夫か、オメエ?』

荒々しくも心配するカメックス。会話が交わせるのは色んな意味で利点が効いて、こういうときが1番嬉しく感じる。

「ああ。心配かけたな」

『リザードン、カメックス。ケントはシュウヘイ同様俺達と話せるみたいだぞ、もう』

マニニューラのそんな一言に両者は目を丸くする。そして、リザードンが口を開いた。

『そうか……。ケントもシュウヘイ同様に……。』

『俺は容赦なくガンガンいくからな』

リザードンが言い切る前に割り込むカメックス。それを見たリザードンがご立腹のようで自慢の炎でお仕置きを試みる。しかし、カメックスも背中中のハイドロキヤノンから水を出して応戦した。

この2人はライバルで、喧嘩も少なくは無いが、大親友同士なのでもある。

「じゃ、また後でな」

『おう！』

『仲間皆呼んでおくからな！』

手を振って見送るリザードンとカメックス。互いに笑みが自然と零れ出る。そう……。自然とである。

「お帰り、ケント」

家の前で待っていてくれた祖父母。その傍らにはエルレイドがいる。このエルレイドもシュウヘイが育てたポケモンである。今は祖父母の手伝いをしている。だが、バトルの腕はかなりのものである。

『ケント殿、お帰りなさいませ』

堅苦しいとはどこか隅で感じてはいたが、エルレイドはやはり堅い。笑みをケントは浮かべ、こう言った。

「別に殿、とか言わなくてもいいからな？」

『……！！……マニユーラ、まさかとは感じますが……』

『そのまさかだ』

マニユーラはケントがポケモンと話せる事実を口にした。祖父母は母方なので、そちらにはケントが自分で説明した。一番、驚いていたのはある意味ケント自身なのかもしれない。周囲も動揺しているが。

「まあ、入りなさい。ゆっくり短くかもしれんが話も聞きたいしの」
「分かったよ」

ケントは家に上がる。

祖父母の家は木製の一時代前風の家だ。ただ、あくまでそれは外見だけ。内部は痛みやすいのもあり、よくリフォームするので結構最新の種に近い。

ケントはリビングでこれまでの事を全て話した。若干、マニユーラがからかってくるが、それはそれでスルーしたり反応したりしてゆっくりとした時を楽しんだ。ケントは後でエルレイドに聞いたが、リザードン達が自分のために頑張ってくれているらしい。嬉しさを感じた。

そして翌日。

ケント自身もその特訓に参加する事にした。参加、といってもバ

トルの特訓なのでケントが誰かを扱って戦うのだ。コンビネーションの向上を計る為、マニユーラが提案している。

「ガバイト、ドラゴンダイブ！」

『おうよ！！！』

ガバイトが空に飛翔して、一気に勢いをつけ地上に降下する。ガバイトの体の周りにはその勢いを象徴するものが滲み出ている。だが、対戦相手となっているチャーレムは至って冷静だ。

『……………』

『喰らいやがれ！！』

ガバイトのドラゴンダイブが命中した。しかし、先ほどからチャーレムは一切動かない。ただ、体勢を崩さずに瞑想しているように見えた。

「ガバイト、決着を急ぐぞ、シャドークロード！」

『……………』

『これでおしまいだ！』

ガバイトの爪が黒く、紫色に光る。それが命中する寸前にチャーレムの拳がガバイトの体を吹き飛ばす。ケントはその技の名を知っていた。極限まで危険な状態になってこそ、真価が発揮される技――。

『起死回生……少しは効いたでしょう？』

『ああ、糞みてえに効いた。だが、まだ終わっちゃいねえ！！』

咆哮を上げ、自らの士気を高めるガバイト。彼の顔に瞬間的に拳

が命中した。まさに一瞬。その一撃にガバイトも起死回生の一撃も合っただけ、目を回して倒れる。

（なるほど、チャーレムは耐えに耐え抜くタイプか……）

このように実践形式のバトルを連続して行い、ケントは大体のポケモンを把握できた。当然、連戦続きで本人に溜まる疲労もかなりのものなのだが。

だが、ケントは辛いどころか楽しかった。皆が……形は様々といえど、心を開いてくれたのだから。

「ケントや、ちょっといいかね？」

「ばあちゃん？」

自室のベッドに転がり込んでいたケントを呼ぶ祖母。祖母の片手にはモンスターボールが握られている。ただのボールではない。シルフカンパニーが開発した、どんなポケモンも捕獲できると言われる、究極のボール——マスターボール。

「……あいつが？」

「そうみたいだね。相変わらず、つるむのは苦手みたいで」

「分かった。受け取っておく」

祖母からボールを受け取り、ケントはそのまま眠りについた。

運命の時が来るのは、もう近い——！！

帰郷（後書き）

ケント「何かと嫌な予感しかないけどよ……」

そりゃそうだもん。

マニユーラ『断言したよ、この作者……』

『ポケモンハンタージユンの冒険』も平行して読まないとその先は
分からなくなるかもしれません……。

是非、お読み下さいませ。

ケント「何言い方急に変えるんだよ（汗）」

破られる均衡（前書き）

今回は序章です。

ケント「何か凄い展開になりそうな予感がするんだけど……」

気にするな（笑）

破られる均衡

P・H・Cのハンターが飛び立ち、ナトロンはすぐに飛行船に戻る。ナトロンの眼前にはモニターが設置されており、そのスイッチを入れるとレイル島の各所が手に取るように映し出される。

不敵な笑みを浮かべると、椅子に腰掛け、ひじ掛けに手を置く。ナトロンの口が動いた。

フライント・マイン
「装置、照射」

その声が現地にいた男の1人がそれを小型のイヤホンで聞き、照射を指示した。モニター越しから装置が正常に作動しているのが垣間見れる。

その効果はすぐに現れ、各所でポケモン達の様子が変わり始めた。

「さあ………パーティー実験は順調ですよ………」

邪悪に満ちた笑みがレイル島を見つめる。

ケントはその日、突然の爆音で目が覚めた。

何の事だと、そのままの服装で1階に駆け下りる。マニョーラやエルレイドは1階で寝ているからだ。

「マニョーラ……！？エルレイド？」

『ガアアアア！！！！』

明らかに様子が両者おかしかった。実はあの装置はポケモンの意識を朦朧すると共に、混乱をも招き暴れさせる事の出来る装置な

のだ。その効果が両者にも現れている。その傍らでは祖父母が怯えていた。

「じいちゃん、ばあちゃん！」

駆けるケント。しかし、その前に我を忘れたマニョーラとエルレイドが立ち塞がる。当然、誰かの指示を受けたわけではない。自然とそうなってしまうのだ。

「くっ……」

無論、彼に自分のポケモンを傷つける事が出来る訳が無い。舌をぎゅっと噛んだ。

（まさかハンターか……？でも、これはディストロープの……）

ケントはマニョーラとエルレイドを気に止めず、先に進む。やはり、混乱しているだけのようで狙って襲う事は無かった。しかし、1階は滅茶苦茶である。

「じいちゃん、ばあちゃん。すぐに町の皆と一緒にここから逃げてください。もしかしたら……親父達を殺した連中かもしれない」

「何じゃと!？」

「まさか……」

勿論、不意な事に祖父母は驚くばかりだ。ケントはこれ以上大切な人を失いたくは無い。それ故であり、更には全く関係ない町の人まで巻き込む訳にはいかなかった。

「ケント、お前さんはどうする気じゃ？」

「俺も逃げようとは思う。だけど、このおかしい状態をなんとかしてから」

それがあまりに危険な事だとは勿論両者が分かりきっている。エルレイドとマニユーラは今も暴れ続けている。この家ももう持たないだろう。一刻の猶予も無い。

「さあ、急いで!!」

ケントの決意に苦々しくも祖父母は首を振った。自分達でどうにもならないのは理解しきっている。祖父母は先に家を出た。ケントもまた、決意を固める。

(殴つてでも、目を覚まさせる!)

ケントは手を重ねると、パキパキと骨を鳴らす。どこまで出来るかはわからないが、今彼の手にはスタイラーは無い。こうするしかないのだ。

「目エ覚ませよ、このバカ野郎!!!」

ケントの一発の拳が交互にマニユーラとエルレイドに直撃し、両者は家の外に追い込まれた。ケントもその後を追いつ、外に出る。

外は予想通り、様子のおかしくなったポケモンが沢山いた。やはり、狙われていたという事を実感するケント。その怒りで自然と雄叫びが上げられていた。

「ふざけんじゃねええええ!!!」

その声でマニユーラ達の様子が変わった。それはモニター越しの

ナトロンも驚きを隠しきれなかった。

「……やはり、恐れていた事態が起きましたか。まあその能力で抑えられないように装置を改良すればいい事……。命令です、装置を撤収してください」

ナトロンは何と突然にも装置撤収を命令した。どうやらナトロンのしたかった実験とはケントの能力に装置の力がどこまで対抗できるかを調べるためのものだったようだ。そして、その結果はナトロン側の完敗であるが、真の勝負はここからである。

『……すまないな、ケント』

「もしかしたらハンターが来てるかも知れない。関係ないポケモンはここから離させよう。ここには親父のポケモン以外のポケモンも多いからな」

『では、その任はボクがお受けいたします』

エルレイドがその任を買って出る。ケントは「頼んだ」と返した。それと同時にリザードンと赤と白で彩られたサンタクロースを連想してしまうような姿の鳥ポケモン、デリバードが空からやって来た。

「リザードン！デリバード！」

『ケント！この前のハンターが他の仲間と一緒に来やがった！！』

『連中は西の方角にいまいるから早く行こうぜ！』

気の早いデリバード。リザードンが着陸して、ケントとマニニューラがすぐさま飛ぶ。

『それじゃオイはお先に失礼するぜえい！！』

そう行つて空を駆けるデリバード。しかし、リザードンの速度に当然敵うわけがなく、あっという間に追いつかれた。

「リザードン、デリバード現状分かるか？」

『ポケモンハンター 奴等はシュウヘイの親分と他のポケモン達見境なしで石に変えていつてる。ありや何なんだ？』

『ケント、この前のアグノム……アイツもハンターらしいんだ』

「そうか……。変だとは思ってはいたけどまさかねえ。まあ今度はお前らも本気だし撃退も楽だろうな」

そこにデリバードが口を挟んだ。

『今回は4人で来てるらしいんだ。よくは知らないけどな』

「4人！？こりやまた骨が折れそうだ……」

ケントは軽く舌を噛むものの今回はハンターを捕らえる事に絶対の自信を持っていた。何故かはよく分かりはしない。だが、昨日のバトル練習でそれを確実なものとしていた。そこにムクバードがやって来る。

『ケント！ボクも戦う！！』

「ムクバード……いけるな？」

『分かってる！！』

否、ムクバードの姿が光に包まれ変化した。その姿はムクバードの時より鋭い目つきをし、全体的にタカに近い。そう、進化体のムクホークである。実は進化できるレベルに既に達していたのであるが、あえて進化させていなかったのだ。

『さあ、急ごうケント！！』

「分かってる！！」

ケント達がハンター達に一気に迫る。そして、その頃……

ハンターのポケモンと対峙する5匹のポケモン。まず、ネズミのような姿をして、体毛はオレンジで、その尾は黄色となっているポケモン、ライチュウ。2匹目はドーベルマンのような体つきのポケモン、ヘルガー。3匹目は胸に三日月状の模様を持つクマのようなポケモン、リングマ。4匹目は全身が頑丈な鎧に覆われ、角竜類のような二本の角を持つポケモン、ボスゴドラ。最後のポケモンは西遊記の孫悟空のような姿をしており、胴には緊箍児きんこじのような意匠が見られる。ちなみに緊箍児きんこじとは孫悟空が頭にはめている金の輪である。そして、頭部には炎が燃え盛っているポケモン、ゴウカザル。この5匹が対峙していた。一方、ハンターのポケモンは7体と少々分が悪い。しかも、辺りには関係のない野生ポケモンやこの島に住む住民のポケモンもいる。そっちに気を使う必要もあるのでかなり厳しい戦いに見える。

レイル島を舞台に壮絶な激戦の幕が開く――！

伝説者守護獣（レジェンド・ガーディアン）（前書き）

ケント「あれ？マインドからタイトル変わってない？」

はい。その詳細は後書きで。今回は色々と凄い事をしてみました。

ケント「……マジかよ（汗）」

伝説者守護獣（レジェンド・ガーディアン）

ケントはリザードンの背に乗り、デリバード、ムクホーク、マニユーラと共にハンターがいた、という場所まで急いでいた。

「この分だと、捕まってる奴きつというな……」

ケントは荒れた島を上空から見ながら言う。マニユーラやリザードン、デリバードもそれに頷いた。

『とにかく、急ぐつすよ！カイリユー先輩が先にハンターのところに行つて時間を稼ぐつて言つてたからつすから！』

『カイリユーの奴、無茶しやがつて……』

リザードンの尻尾の炎が激しく燃え盛り、リザードンのスピードが増す。

『デリバード、ボク達は皆を集めよう。いくら先輩達が“レジェンド・ガーディアン 守護獣”でも今回は分が悪い！』

『分かつてるツスよ！！』

デリバード、ムクホークも島の各地に散る仲間を集めに飛ぶ。

その頃、ハンターと対峙する1匹のポケモンがいた。

「なんや、自分から出てきて……。捕まえて欲しいわけ……。無いよな？」

リーダー格の思われる男がそう聞いた。ハンターの出しているポケモンはエアームド、シャワーズ、ネイティオ、ドーブル、アリアドスとハンターの方が数に分がある。勿論、それ以外でないのはそのポケモンは熟知している。

『話は聞いてるよ……。ボクの友達を奪^{なかま}うなんて許せない。止めさせてもらっよ』

ポケモン——カイリユーが構える。ハンター達もカイリユーを捕らえようとポケモンに指示を出す。

「エアームド、ラスターカノンや」

「ネイティオ、怪しい風」

「アリアドス、ミサイル針」

「シャワーズ、ハイドロポンプ」

飛ぶ4つの攻撃。しかし、カイリユーはその技を見て軽く笑みを浮かべると、口から緑色のエネルギー球を吐き出す。

『これで充分！竜の波動！！』

放たれた竜の波動は、何と4つの攻撃を相殺する。勿論、1対4で絶対的有利な状況下に置かれるであろっ、ハンターは驚きを隠せない。

「なんや、あのカイリユーえらく強いな……」

「全くだ」

「私達の攻撃を退けるなんて……」

「中々やるようだね」

カイリユーはこの4人の言葉を紳士に受け止めると共にこう言い放つ。

『まだやる気？今なら捕まえた皆を返してくればもうそれでいいけど？』

噂のジュン、という名のアグノムが通訳した。勿論、ハンター側はNOと言うはずだ。仮にYESと言っても、罠だという事を何となく理解している。ハンター達が軽く話し合いをしている。カイリユーは集中し、神経を研ぎ澄ませる。

「……構わないよ」

ジュンがそう言った。カイリユーがゆっくりと近づく。その眼前にはアタッシュケースが。カイリユーが手を掛けようとする。

『……じゃ、返してもらおうよ友達を』
なかま

カイリユーがそう言った瞬間、ジュンが小型の機械から光を放つ。そう、サティアを石化したあのビームを。

「返すわけ無いでしょ」

そう静かに言い放った。

ケントは空を飛びながら、どこかに感じる嫌な予感を隠し切れなかった。懐からマスターボールを取り出す。

「……お前の力も借りるかもしれない」

静かにマスターボールの中に収納されているポケモンに語りかけるようにそう言う。そんな時。

『見えた!』

リザードンがそう叫ぶ。ケントもその声に身を少しだけ乗り出し、下を見た。その下ではアタッシュケースを取ろうとするカイリユーが。そんな彼に非情にも放たれる石化ビーム。ケントはすかさず、指示を言う。

「リザードン、火炎放射! マニョーラ、冷凍ビーム!」

『おう!』

2人が同時に攻撃技を放つ。カイリユーの身に石化ビームが直撃すると思われるタイミングで4人のハンターの近くに放たれる炎と氷。

「なんや!？」

「上からの攻撃みたいね……」

4人とジュンの眼前に静かに降り立つ2匹とケント。

「よお。大暴れしやがって……」

そう言うケントの声は怒りに包まれていた。ジュンの方を軽く睨むとジュンにこう言った。

「この前の作戦、きつとお前だろ？誤魔化しは効かないからな」

相変わらず、ジュンとはばけている。こう言っていた。それを象徴するように。

『何の事？』

ジュンの誤魔化しを見切るためにマニユーラがこう言った。

『誤魔化しても無駄だぜ。今のケントはポケモンの言葉が分かるからな。お前の言う事も完全に筒抜けってわけだ』

ジュンはその言葉に諦めが少し付いたのだろう、人語でこう言った。

「まさかね、そんな事が有り得るなんて……。まあ、ターゲット標的はまた捕獲したし」

「またって事は……。もう何匹か捕まってるのか。……。でもよ、カイリユールの跡、よく見なよ」

「え？」

5人はカイリユールが石化と思われる場所を見る。何と煙が晴れた先にはカイリユールの姿が消失していた。

「当たったはずだぞ！？どこに行きやがった！」

4人の内の1人がそう言う。ケントはニツと笑みを浮かべる。――

「これなら、勝てる。」

そう、彼は感じた。勿論、万一の勝ち目が一切無いわけでは無いし、現に今のリザードン達にこの様子だについていくのはかなり難しい。そう思ってたの笑みだ。

「節穴みたいだな、お前らの目は。後ろ見てみなよ」
「「後ろ！！？」」

ハンター達が背後を振り向くと、何とカイリユーがいた。いや、カイリユーだけではない。ハンター達を囲むようにハッサム、ギャラドス、チャーレム、メタグロス、ヌケニン、カメックスが現れる。そして、上空にはボーマンダ、ムクホーク、デリバードと何と全員が集めた。

このメンバーはケント、シュウヘイのポケモンの中でも“レジェンド・ガディアン 守護獣”といわれるほどの実力者。その力はきつとケントでも計り知れない。熟知しているのは亡き父、シュウヘイのみ。

「何や、ターゲット 標的から来てくれたわ」

「全くですね、これで一網打尽に出来る……」

「まあ、油断は出来ないけど」

ハンター達は自分たちが勝つ、と確信を持っている。それはケント達にしても同じ。だから、こう言ってみた。

「おい、ジュンとかいうアグノム！」
「何だい？」

「お前のシャワーズのハイドロポンプ、リザードンに浴びせてみな。相性的にも、有利だし……捕獲にも役に立つだろ？」

「何？試してるのかい、君は僕を」

ケントはジュンの問いにただ、「いいから放てっ」としか返さない。ジュンもバカにされたような気に段々なってきたのだろっ、シャワーズにハイドロポンプの指示をした。激しい水流がリザードンにもろに当たる。リザードンが軽くのけぞる。

「ふん、自滅させるなんて……君もバカだね」

「本当にそう思うか？」

「え？」

ジュン達はリザードンを見ると、何とリザードンはぴんぴんしていたのだ。これには驚きを隠せない。むしろ、信じられなかった。

「これがウチのハイドロポンプだ……カメックス！」

「分かった……お見舞いしてやるぜ！！」

ケントの近くに立っていたカメックスがシャワーズに標準を合わせ、自慢のハイドロキャノンから強烈な水流を発射する。シャワーズの特性は貯水。水タイプの技は効かない……筈だった。

「ジュン、耐え切れない……！」

耐えていたシャワーズだが、我慢ならずに後方の木にその身を叩きつけられる。それが直結させるのはただ1つ。

貯水で耐え切れるパワー以上のハイドロポンプを放てるという事――。

「見せてやるぜ、レジェンド・ガーディアン“伝説者守護獣”とおそ畏れられるこいつらの新の實力を――！」

ケント達とポケモンハンターの直接対決の幕が遂に開く――！

伝説者守護獣（レジェンド・ガーディアン）（後書き）

ケント「で？タイトル変えた理由は？」

はい、先日のテスト（英語）でマインドって言葉の意味がこの小説とかみ合っていない事に気付いたの。

そーいや、心って感じもするし、語尾的にもいいなと感じたんだけど。これじゃいけないと急遽タイトルを変更しました。

ちなみにFeeling Interpretayから取りました。
というわけで今後ともポケモンレンジャー・マインド改めポケモンレンジャー・フィーリンターを宜しくお願いします！

誘導作戦（前書き）

最近、この小説・・・バトルモノじゃん？と感じている自分。

ケント「まあ、レンジャーなのにそうでないからな……」

まあ、コラボ終わったらガンガン戻していくつもりです。後は、物語が短期化しそう（汗）

ケント「は？」

誘導作戦

ハンターの持っていたポケモン、フワライドが放つ黒い霧。その霧が晴れる頃にはハンターの姿が無くなっていた。当然、アタッシユケースも。

大方、あの中に捕まえたポケモンが入っているのは容易に伺える。問題は誰が持っていたか、である。

「全員、個別行動はしたらダメだ。連中は何するか分からない……。カイリユー、ムクホーク、デリバード、ボーマンダは空からゆつくり連中を探してくれ。他の皆も、出来るだけ連中を一点に集めるようにしてくれ」

『具体的にはどの辺りにする気だ？』

「ここから北へ3キロ程行ったらココと同じような場所があるだろう？上手いように連中をおびき寄せるんだ。地理には何年もいるから皆詳しいだろ？」

『なるほど、誘導しようという事……ですね』

ケントの説明に納得がいくメタグロス。短い時間での話し合いから残るポケモン達もそれぞれ誰かと組む事になる。

結果、マニニューラとリザードンはケントと、カメックスはヌケニンとチャーレム、メタグロスはハッサムとギャラドスの3匹で行動する事に。それぞれが役目を確認し、散っていった――。

「リザードン、マニユーラ……何か感じないか？」

『ああ、気配を感じるな。それもそんなに遠くない……』

マニユーラがそう答える事から間違いは無いだろう。一方でケントは分断した事に若干後悔していた。間違いなく、他にも数匹捕まえるのはきつと間違いない。それが耐え切れないのだ。だからこそ、早期決着を望む。それが彼の想い。

「……マニユーラ、リザードン。大回りしてこの近辺に氷の壁を作ってくれ。なるべく分厚いな」

『任せてくれ、ケント』

リザードンの背にマニユーラが乗り、飛翔する。空を飛びつつ、リザードンとマニユーラはその眼下にアグノムの姿を捉えた。だが、あえて奇襲はしない。運良く、まだ見つかったは無いから早めに切り上げるのが1番だと判断した。

その数分後、マニユーラとリザードンはアグノム——ジュンの発見をケントに伝える。

「やっぱいいやつた……。一気に叩くか」

『ああ。それがいい』

『よし、オレが奇襲をかけよう』

リザードンは羽ばたき、ジュンの下へ向かった。ケントとマニユーラもまた、走る。そして、ジュンが視界に入る。ばれないように身を潜めながら距離を縮めていき、一気に攻め込んだ。

「リザードン、火炎放射！」

「え！？」

まさに不意打ち。彼としては好ましくないやり方だが、相手が相手。形振り構ってられない現状でもある。ジュンも咄嗟にサイコキネシスで直撃だけは避けたようだが、今の一撃でかなりの精神力を失っている。慎重に動くべきなのではあるが、ここは逆に大胆に動くべきだと判断した。

第一、森に少し火が点いている。そこから計算すると早く消し止めないと氷の壁が丸見えになる。それだけは避けたかった。

「……へえ、君が来たんだ」

「生意気言っな、今の火炎放射を避けるために使ったサイコキネシスで堪えているのは分かってるんだ」

「ふん、僕を捕まえようと本気で思ってるわけ？」

挑発するジュンに迷わずケントはマニユーラに「冷凍ビーム」と指示を下す。刹那、ジュンの足元が凍りつく。

「これを本体おかしにぶつけて、氷像にしてやるさ」

「……出来るものならなってごらん？」

その頃、メタグロス、ハッサム、ギャラドスの3匹は2人のハンターと対峙していた。ハンター側はフーデイン、ネイティオ、ドール、フワライドと分が悪そうに見えるが、そこまで悪戦苦闘しそうには見えない。ただ、注意する点はハンターの間2人が何をするか、である。

「本当に別れて行動してくるなんてな……」
「まあ、これで捕獲しやすくなる」

どうやらこの2人、顔立ちが似ているようなところから双子のようなのは伺えた。だが、こっちのこの3匹もそんなに柔^{やわ}ではない。

「30秒で勝てる法則を作ります、時間稼ぎ頼みますよ」
「捕まるんじゃないぞ、そんなに捕まるとは思わんがな……」

ギャラドスが軽く威圧を込めて言ったが、一切メタグロスは動かない。

「捕まりはしません。お2方も捕まらないように」
「任せて」

「逆に30秒で人間ごと片付けてやるわ」

ハッサムは謙虚に、ギャラドスは余裕の口調ではあるものの、真剣な眼差しでそう答えた。

そして、カメックス、ヌケニン、チャーレムの3匹もまたハンターと遭遇していた。相手はアリアドス、エアームド、フライゴンの3匹を繰り出している。この内、アリアドスこそ大した事は無さそうだが、肝心なエアームドとフライゴン。少々手ごたえのありそうな敵だ。

だが、そこまで意識するものかと問われるとそこまでは無い。特にエース的ポジションのカメックスにとってはそこまで強敵とは感じ取っていないのだ。

『俺達の自由を邪魔する奴は容赦しねえ……覚悟しやがれ!!』

『……敵はただ倒す、それだけ』

『アタシの実力、ちから見せてあげる』

それぞれが雄叫びを上げ、気合いを注入する。別々になっても、勝てない敵ではない。絶対の勝利をそれぞれが誓い、ハンターとの対決に臨む。

そして、その頃……

「ハンターがこんなに早く動くなんて！」

「ケント……持ちこたえてくれべさ！」

ケントの仲間達もまた、レイル島へ接近していた。

！
激闘渦巻くケントとハンター。2度目の直接対決の幕が開く――

動き出す戦局（前書き）

ケント「有言実行、ご苦労さん」

はいはい（汗）

動き出す戦局

ポケモンハンターと対峙するケントとポケモン達。それを離れた場所から傍観するナトロン。

「……ハンターが誘き寄せられたように一点に動いている……。流石ですね」

愛用の眼鏡を指で突きつつ、ゆっくりと傍観する一方でディストロープも準備を始めていた。

「……ガゼラ。準備は？」

モニター越しでガゼラ、と呼ばれる者とコンタクトを取るナトロン。すぐに答えは返ってきた。

「ああ、整ってる。いざって時のためにこの島の周囲を占拠して正解だったな、ガハハハ！」

「……あまり大声を立てないで下さい。これから指定する場所へ全員で向かって下さい」

一瞬、怪訝な顔色を出すもナトロンの策がうまくいく事はよくあった。そう考えれば首を縦に頷かせない理由も無い。

「分かった。すぐに向かう」

「お願いしますよ」

そして、その一方で……

「レイル島周囲、包囲されているべさ！」

「完全に邪魔者は入れさせない気ね……」

レイル島へ急ぐサティア達の前を遮るディストロップの船。その数はざっと百はあるだろう。下手に突っ込んでも返り討ちに遭うのは目に見えていた。そんな中、アビルのスタイラーに入る無線連絡。

「……………ほ、本当ですか！？」

あのアビルが驚きを隠せなかった理由は直に分かる——そう、直に。

「デリバード、すまない……」

拳を強く握り締め、ジュンを睨むケント。ジュンの周囲を展開する6枚の鏡。そして放たれる6発もの石化ビーム。対処はかなり難しい。だが、ふと考えた。鏡はビームを反射した。では、それが攻撃であつたとしても反射してくれる可能性はある、と言える。賭けも同然。そんな状況だ。

「さあ、これで終わりだよ」

石化ビームを放つジュン。マニュアルに、「冷凍ビームの準備だ」と言つて構えさせる。鏡がビームの進行方向に動き、反射するタイミングを見計らつた。反射するタイミングなら鏡も一切動きはしないはずだ。そして、その時が来た。

「今だ、冷凍ビームを鏡へ……」

『なっ！！？』

ケントの指示は誰も予想打にしていけないものだ。冷凍ビームを反射させ、一気にジューンに迫る。流星にジューンも身の危険を察知し、避ける。動揺はしているはずだ。

一方で迫っていた石化ビームはリザードンの熱風で振り払った。この勝負、最早決着が着いたと言っても過言ではない。

「その鏡を使う攻撃はもう効かない。諦めな」

「諦めるわけが無いでしょ？頼むよ……」

ジューンが出したのは何とイーブイ。だが、何かあるのは読んでいる。それを考えるときつと攪乱が主なのは目に見えていた。攪乱しつつ、そこで生まれた隙を突いての石化ビーム発射。それは間違いない。

「マニュアル、一応、あの装置を壊す事も視野に入れてくれ」

『分かった……』

「頼むよ、ゼロ」

ゼロ、と呼ばれたイーブイは『任せてください！』と答える。勿論、戦える面では笑顔のようだが、ポケモンの捕獲ハンティングを援護する面では少々まだ荷があるように見える。

「リザードン、火炎放射」

「ボディチェンジ、ブースター！！」

その言葉と共に何とゼロが一瞬にしてブースターにその姿を変える。勿論、こんなのは初めてな上リザードンも驚きを隠せない。

『何だ、ありや……』

「何だよ、そのイーブイ。ただのポケモンじゃないな」

「どうだっていいじゃないか」

「チッ……」

軽く舌を打つケント。だが、気になっていたのは事実である。しかし、これは一方で上手く利用すればかなりジュンの目を攪乱させられるのは間違いなかった。

「リザードン、空へ」

『おう』

翼を羽ばたかせ、空を舞うリザードン。そして、その瞬間に空気の刃がゼロとジュンの目の前を襲う。そう、初めから「空へ」と言えばエアスラッシュを発動するように言っておいたのだ。そして、煙で状況が把握できない中、マニニューラは最も厄介である鏡を破壊していく。元を断てれば早いものだが、逆に接近を感じられ石にされては元も子もない。そして、マニニューラが全ての鏡を破壊し、ケントの元に戻る。

煙が晴れるとジュンの眼前には無残に砕かれた鏡の数々が。この状況でもう6発発射などしても意味は無い。

「完全に白黒ついたな」

ケントがジュンにそう言った――。

その頃、1人のハンターの出したフーディンと対峙するギャラドス達は――。

『ぐっ………』

地に倒れるハッサム。それを無情にも石化させ、捕らえるハンター。ギャラドスやメタグロスも満身創痍^{まんしんそうい}の状態だ。一方のフーディンはまだ体力が有り余っている。やはり、先の戦いが少なからず影響したのは間違いないだろう。

『計算する前に全滅ですか……。それだけは避けたいですね。馬鹿^{ボーマンダ}でもいれば………』

メタグロス
『呼んだか、糞野郎！』

その声と共に空から飛来するボーマンダ。メタグロスやギャラドスもその姿を見て、笑みを浮かべた。

『流石ですね、馬鹿^{ボーマンダ}にしてはやるではありませんか』

『うつせえ、後時間はどれくらい稼げばいいんだ？』

『すいませんね、少々まだ見えない部分もあるので1分は』

ボーマンダは軽く舌を打つとギャラドスに、

『メタグロス
糞野郎を頼んだぜ』

『ああ、任せろ』

ゆっくりと飛翔するボーマンダ。完全に闘志剥き出しの目だ。

『てめえら、オレ達を甘く見んなよ……姿を消そうが、オレの力と^{パワー}
スピードにはついてこれねえよ!!』

ボーマンダが狩人^{ハンター}にした、宣戦布告である――。

そして、エアームドとアリアドスと対峙するカメックス、ヌケニン、チャーレム。こちらはあれから一切の進展が無い。チャーレムの警告で至近距離からの攻撃をせず、同時にエアームドの攻撃の大半はヌケニンが1人で請け負っているのだ。

『つたく、進展なしか』

『早いところ誘導を始めたい……が』

『下手に動く事は出来ないですね』

そこへ3人の背後から木々の揺れる音がした。3人の援軍として、カイリヤーとムクホークが現れたのだ。

『ごめん、でもそう言う暇は……』

『ああ、無い』

こちらは総勢5人、しかも内2匹は空を舞える。そう考えると分は良いようにも見えてくる。

『カイリユー、あの糸を切れるか？』

『分からないけど……ボクと君と一緒にすればいけるね』

『そうか、なら……ハイドロポンプ!!』

『竜の波動!!』

2つの強力な攻撃がアリアドスとそれを守るかのようにある糸を断ち切ろうと迫る。

「アリアドス、避けて」

『今よ、ムクホーク!』

『了解!!』

否、ムクホークが驚異的な速度でアリアドスに突進攻撃を浴びせる。だが、ただの突進攻撃ではなくブレイブバード。その一撃に耐え切れずにアリアドスは目を回す。

「くっ、戻って」

女性ハンターがボールにアリアドスを戻す。彼らの戦いもまた、動き出し始めた。

激闘続くハンターとの戦い。その決着も近くなり始めている――。

望まぬ形の集結（前書き）

やあ、ばつさりと書けたよ（笑）

ケント「最近、調子いいじゃねえか」

うん！バッチリです！！

さて、では最新話をどうぞ！

望まぬ形の集結

逆鱗を発動させたジュンのボーマンダ。しかも、ただの逆鱗、というわけでは無さそうだ。

「まずいな、あのボーマンダ……」

ジュンのボーマンダは完全に理性を失っていた。そこへリザードンが――、

『ケント、俺も逆鱗を発動させる。少し体にキツク来るだろうが……このままじゃ全員お陀仏だ』

「無理するなよ」

リザードンは少し距離を置いて、ケントとマニユーラを降ろすとボーマンダに単身向かっていく。

「へえ、捕まりにきてくれたんだ……」

『その逆さ。長年、シュウヘイの相方として君臨させていた俺の本^{ちから}来の実力がようやく戻ってきたんだよ。……捕まるのはお前達ハンターだ！逆鱗！……！』

否、逆鱗を発動させたリザードン。そのままボーマンダへと迫る。その時だった。

「終わりだ」

その瞬間、リザードンに放たれる石化ビーム。どうやら充電らしきものが終わってしまったらしい。それはリザードンを直撃し、石

化させてしまっ。

「リザードン!!」

『くそっ、最悪だ……』

『グアアア!!!!』

我を忘れ、獲物を探すボーマンドが一気にケント達に迫ってくる。戦うなど、もう今の彼らには選択肢が残されていない。

「マニニューラ、引くぞ」

『ああ』

否、ケントは思い切り走り出す。右足から左足……と交互に大きくその足を振りかぶっては地を踏みつける。マニニューラも小刻みにそれを交互に繰り返した。

（みんな、無事でいてくれ……）

ケントの儚い希望。それが現実となろうとするのに大して時間はもうかからなかった。

一方、ハンターのフリーディンと対峙しているボーマンダとメタグロスは――。

『おい、何で敵の姿が消えたんだ！？』
フリーディン
『……………』

苛立ちを隠せないボーマンダに対し、何かメタグロスは何かに感づき始めていた。

「フリーディン、気合玉」

フリーディンの気合玉がメタグロスを襲う。しかし、メタグロスは

守るでそれを防ぎきる。そして、同時に目を見開いてこう言った。

『解けました、彼らのトリック……』

『トリックだと？そんなもんあんのかよ』

『間違いなく。彼らはこちらが目で追うのを利用して、光の屈折を変えてます。いわば簡単に言くと本当は前にあるものが右にあるように見えてしまう、と思ってもらえたら分かるかと』

『チンプンカンプンだ』

全く理解できないボーマンダは不満を零す。

『まあいいです。あの策には実は盲点が2つある。考えによれば3つでしょう』

『そんなもんあんのか？』

『はい、ありますとも。一つ目の打開策はこちら側がサイコキネシスなどを使い、その屈折を無理矢理元に戻す事。間違いなく、何もせずにあの状態を保つのは無理ですからね、大方サイコキネシスを使っていると思います』

『じゃあもう1つは？』

『間合いを取るんです。そうすれば完璧に状況が回復しなくてもある程度こちらが有利になります。ただ、普通の遠距離攻撃や接近攻撃は何の役も立ちませんがね』

『じゃあどうすんだ？』

ボーマンダの問いにきっぱりとメタグロスは答えた。

『ボーマンダ、あなたは怪しい風が使えますよね？』

『——！なるほど……そういう手があったか！』

にやりと笑うボーマンダ。それをフリーディンの主人であるハンタ

「は何か起こると察知した。」

「では、早速参りましょうか。お願いします」
「おうよ！怪しい風！！！」

否、辺り一面に紫色の突風が渦巻く――。

「ルギアって……あの伝説のポケモン！？」

ムクホークがその姿に絶叫した。カメックス、カイリユーともに背筋が伸びきって、完全に冷や汗をかいている。プレッシャーという特性もあるがその威厳ある姿に完全に圧されているのだ。

『おい、カイリユー……こいつあやばくないか？』

『間違いなく危ないね、何せ相手は伝説のポケモンだし……勝ち目は薄いかも』

舌をぎゅつと噛むカメックス。今の3人で勝つ可能性は恐らく万に無い。ならば、ここは退くのが一番かもしれない。

『まあ、軽く相手の力量^{レベル}を見せてもらおうじゃねえか！ハイドロポンプ……！』

否、カメックスの背にある大砲から放たれる多量の水。だが、ハインターも一切慌てずに――、

「ハイドロポンプや」

激突する2つのハイドロポンプ。少しカメックスが押されているように見える。このつばぜり合いを考えても、勝つ可能性が間違いないに等しいと踏んだカメックスはこう言った。

『例の場所に早く行け！ココは俺が時間を稼ぐ！』

『でも、カメックスさん！』

『行こう、ムクホーク……カメックスの決意を無駄にしちゃダメだ』

『カイリユーさん……』

ぐつと涙を堪えるムクホーク。カメックスも、カイリユーもそれ

は間違いなく悟っていた。仲間が捕まる事を――。

空へと飛ばたくムクホークとカイリユー。それをハンターが勿論逃がすわけが無い。

「ルギア、追いかけるん……」

言い切る前にハンターの足元に軽くハイドロポンプをぶつける力メックス。それが宣戦布告なのは最早一目瞭然だった……。

そして、さらに数十分後。

ケントとマニユーラは息を荒げながらも集合場所に辿り着いた。途中、何度か石化ビームを発射されたが、何とかそれを全て逃れる事が出来た。まだ、自分たち以外に誰も来ていない。あのボーマンダとジュンが来るのは間違いなく時間の問題。

（皆、早く来てくれ……）

否、ケントが来た方向から別にボーマンダがやって来る。だが、体中が傷だらけである。そのまま大地に衝突し、その背後から石化ビームを浴びせられ、石化する。

「ボーマンダ!？」

「ふう、驚かされたよ……」

「!？」

空にはネイティオとフワライドに乗るそっくりな姿の少年。ポケモンハンターの仲間である。

「まさか、僕のフリーデインのファントムエフェクトを破るなんてな……」

「本気である時は俺も驚いちゃったぜ」

そして、次にカイリユーがやって来るも、同様に傷だらけですぐに石化されてしまう。ケントが見る先には何と伝説のポケモン、ルギアとフライゴンの2匹がいた。同様にその2匹にはハンターの姿が。

（嘘だろ……）

実力差はきつとそこまで大した事は無いはずだ。長年のブランクもあるし、多少実力が衰えていても仕方ない。それ以上に分散して全チームが全滅なんて有り得ない——そう信じていた。

「ふう、やっと追いついた」

「——！？」

地に降り立つ5人のハンター。状況は完全に四面楚歌。

「皆、^{ターゲット}標的のポケモンは？」

「僕たちのほうに来たのは全員捕獲した」

「こっちもや」

「う、嘘だろ……？」

信じたくも無い現実。今の状態は直結して戦えるのはマニョーラしかないも同然。

「さあ、チェックメイトだよ……そのマニョーラを渡してもらおうか」

。 ジュンがとどめをさすかのようにケントにそう言い放つのだった

絶望だけが、彼の中を支配していく……。

望まぬ形の集結（後書き）

ケント「……orz」

あゝらら、ケントが凹んじやった（汗）

果たして次回はどうなるのか！？乞ご期待！

ケント「なんでこんなに俺は酷い目に遭うんだ？初期設定もだけだよ」

気にすんな（笑）

逆転・・・されど逆転（前書き）

タイトル通り、逆転がキーワードです。

逆転・・・されど逆転

嘘だ……そんな……有り得ない……。

親父のポケモンが……全員捕まった？

そんな事、あるはずが無い……。

追い詰められたケント。そして、追い詰めるハンター。実際、ケント達の援軍は皆、ハンターに捕まってしまった。しかし、ある肝心な事に両者共に気付いていない。

そう、ハンターにしてみれば襲い掛かったポケモンは、皆捕まえ。ケントにしてみれば分断したメンバーは皆捕まった。しかし、ハンターは勝利を確信し、ケントは絶望の中を泳いでいて気づく事は無かった。

ケントの体が木にぶつかる。トン、という音は同時にこの戦いの
ゲームセット
戦闘終了を意味しているようだった。策は無い……仮にディストロ
ーブの狙いが自分にあるなら……こうするしか無かった。

ディストロップ

「お前らの依頼主。連中の狙いは間違いなく俺を無力化する事……
なら、俺がこの世から消えれば、捕らえたポケモンは連中はいらな
いとか言って返還するよう言っくんじゃねえか？」

「残念だけど、捕まえたポケモンはコツチの好きにしていって聞
いてるからね」

夢い希望を打ち砕くジユンの言葉。4人の石化装置の銃口がマニ
ユーラに向けられる。策は尽きた。なら、自分がマニユーラにして
やれるのはたった1つ。

「マニユーラ、俺が時間を稼ぐ。早くここから逃げろ」

そう、マニユーラにしか聞こえない声で言った。

『ケント！？お前、何する気だよ！』

「……あの野郎と拳で交わるだけだ」

もう、躊躇は無かった。守るためなら、仕方ない。そう自分に無理矢理言い聞かせ、拳を強く握り締める。たとえ、自分があの時のサティア同様に石になっても構わなかった。守りたい——大切なものを守りたかった。

マニユーラの前に仁王立ちになり、庇うように立つケント。目は少々怯えている。だが、それは無理矢理自身の心を奮い立たせる事で凌いだ。

「庇う気？」

「これ以上、仲間を奪われたくないからな……」

その頃、飛行艇でハンターの上司、エリカと連絡を取るナトロン。

「24匹目のポケモンが分からないですって？」

エリカが少々驚くように言った。ハンターが捕らえようとするのはシュウヘイの手持ちでも最強といわれる24匹。その内、23匹の詳細は判明しているのだが、残る1匹が一切不明なのだ。

「試しに偵察させてみたらそれと思われるポケモンはいたらしいのだが……次の瞬間、その姿は消失していた」

「ボールに戻ったんじゃないかしら？」

「私もそう思っている。だが、姿は他の23匹と一切被らない。つまり、それが24匹目のポケモンの可能性が極めて高いんだ……」

推察。それは謎に包まれし24匹目のポケモン。その正体が分かるのは時間の問題でもあった。

額から汗を流すケント。息を呑み、彼の中に湧き出る恐怖はどんどん増していく。恐らく、石化さればどうなるか——自分にすらその末路は見えない。碎かれて、命を奪われるかもしれない。はたまた、別の場所に永久に安置される可能性とである。

拳を強く握り締め、握り締めてない右手を後ろへ向け、マニョーラを少しだけ撫でると、ケントは左足を前に踏み出した。まさにその瞬間^{とき}。

四八方から襲い掛かる蒼き弾。爆風で両者の視界が悪くなる。彼の脳裏に響く声。

『ケント！無事か！？』

(……こんなテレパシーを使えるのは……ルカリオ！？)

生きていた仲間。この瞬間、ケントはハツとした。自身が持つボールに加え、マニョーラ、そして捕まった仲間。これらを合わせても、まだ全員集まっていない！

という事は——。

「ハンター、残念だったな……」

急に自信を取り戻したように言い出すケント。相手は自分の姿^{ケント}が見えない上、周りの様子もきつと見えてはいない。

「何が残念なの？」

ジュンの問い。間違いなく、ハンター全員の疑問だろう。そこでケントはこう告げた。

「お前らの負けだ！……」

それと同時に晴れる煙。そこに集っていたのは何と今までハンターが石化したポケモン達。そして、人間のハンターにはガバイト、ヘルガー、リングマ、ハッサム、首元に爪を置き、ジュンの目の前には今まさに攻撃を仕掛けようかというギャラドス。そして、空にいたハンターのポケモンは皆、空を飛べるポケモンが制空権を奪い取り、動きを拘束する。伝説のポケモン、ルギアもメタモンが変身した事で自身と同型、つまりはこちらも簡単には最早動けなかった。しかも、ハンターの腕にあった石化装置は一刀両断されたように最早使い物にならないほど破壊されていた。

「俺達の故郷を汚して、本気で帰れると思うな!!」

完全に怒りの目つきで言い放つケント。最早ハンターには何も指示も出来ない。それはポケモンとて同じ事。下手に動けば全員を一瞬で斬り捨てるなど最早容易かった。ケントのポケモンも完全に怒っている。

「どうやったのさ、ここまで……」

ジュンが静かに聞いてくる。

「そやな、それくらいは教えてくれてもええんちゃうか？」

それに続いて、クラトピアで対峙した男も聞いてくる。

「……お前らは俺たちの仲間をみんな捕まえたかと思っていただけ、大きな間違い。まだ残ってたんだよ、よりにもよって最も厄介である2匹をな」

「最も厄介な2匹？」

「それ以上言う気は無い。さあ、警察まで来てもらっぞ……」

ケントは完全に勝った。まさにそのタイミングで――

「おいおい兄ちゃん、少しは加減しようぜ？」

「なんだ……――！？」

言い切る前にそれを見て、ケントは言葉を失った。そこにはロ―プで体を縛られた島の人々。そして、それを引き連れて現れたのは全身が日焼けしているような体色で上半身は裸、下半身は白い胴着のようなものを着用している大雑把な男。髪の毛の色も黄色とどこか不気味だった。

「よお、兄ちゃん。オレはディストロ―プの幹部、ガゼラ……こつからはオレの命令どおりに動いてもらおうか。下手に逆らおうとすれば……分かるよな？」

ナイフを島の住民に突き立て、脅すようにそう言い掛けた。

（クソッ！）

抵抗をやめるように、ケントは両手を上げた。さすがに無関係の島民までは巻き込みたくはない。勿論、ガゼラの行動に反発する島民も少なからずいた。

「卑怯だ！」

「アンタ、最低よ――！」

「ケント君、俺らは構わないから！」

「うっせえ！今言った奴らは後で処分しておけ」

冷徹にして非道。最早、先の約束を破っているようだった。

「ハンターの方も、下手に動かないでくれよ。一応交渉なんでね……」

舌で口元を舐めながら、ガゼラはそう言つと、ケントに指示を下した。

「まずは拘束でも解いてもらおうか。空の連中も地上に戻しな」
「……………皆、言う通りにするんだ」

ポケモン達もその意見には逆らえず、大人しく手を引いた。ハンターも身柄が解放され、背伸びをしたり、深呼吸でリラックスしたりする者もいた。

「さあて、後はどうすつかな？」

ガゼラが腕組みをして考える。その時だった。

「ありがとう、依頼主さん」
ディストロップ

冷徹なジュンの声。否、放たれた石化ビーム。それでエルレイドが石化する。

「お前!!」
「おつと動くな!!」

怒りに震えるケントに下される冷酷な一言。ガゼラもその行為に首を縦に振って頷く。次々と石になる仲間達。ケントは体が震えて

いた。恐怖。

しかも、今度ばかりは完全に打つ手なし。

（止めてくれ……俺から何もかも奪う気なのかよ……！）

そして、残るはケントのマニューラを残すのみ。ケントの目からは涙がいつの間にか流れていた。息も荒い。

「じゃ、とつと頼むぜ」

「了解」

ジユンがマニューラへ石化ビームを発射しようとした、その瞬間。

「アブソル、サイコカッター！」

「え？」

「何！？」

『喰らえ！！』

否、現れたのは黄色のアブソル。鎌の部分から放たれる三日月のような刃が石化装置を一閃、破壊した。

それと同時に駆けつけたのは――

「そこまでだべさ！」

「ケント、待たせて悪かったな！」

「……大丈夫？」

「ケント、行くわよ！」

ケントに投げ渡されるキャプチャスタイラー。そう、そこへようやく駆けつけたのは信頼できる仲間達だった――。

取り戻したい感情（おもい）（前書き）

今回は新キャラが出ます（笑）

ケント「更新のバランス悪すぎだろ（汗）」

いや、結構忙しいのよ!?

とにかく、その新キャラはかなり重要なキャラですので。

取り戻したい感情（おもい）

ケントは1人、暗い部屋にいた。

いや、正しくは照明を点けていないので、部屋自体が暗いままなのである。相棒^{パートナー}もまた、別室にいた。監禁されている——そう言っても構わない現状^{いま}。

——助けたい、助けに行きたい——。

だが、そんな純粋な感情^{おもい}はレンジャーユニオンの上層部が全て押し潰した。ササコ議長も退任要求が出ていて、実権は上層部の一部の人間が握るに等しい状態。ケントはその混乱の中、捕まったポケモンを助けに行く事すら許されず、ずっと暗い部屋で静かに佇んでいた。

勿論、反発する意見も少なくは無い。その第一が彼の仲間や、彼^{ケント}を知る者達。だが、そんな意見を一切耳にしない。見向きすらしなかった。

何の情報も得れぬまま、ただ、静かに時間だけが過ぎてゆく。

一方、ポケモンハンター達によって捕らえられたポケモン達は全
てとある山中の研究所にいた。そして、そこへ訪れるナトロン。
レンジャーに見つかる危険性が薄いと判断して、彼もやって来た
のだ。

「……ほお、これが噂のキメラ実験か」
「何の用かしら？」

彼同様に白衣を身に纏う女性。彼女こそ、ナトロンとの交渉など

幾多の場面で会話を交わした、エリカという女。直接会ったのは、双方初めてであった。

「いや、捕らえたポケモンをどうしてるのかと思えば、こんな実験をしていたのか……。さっき、近くを通った際にイプシロンと名乗る人物から聞いてね」

「へえ、あなたも興味あるのかしら？」

ナトロンは軽く咳こむとこう返す。

「いや、あんまり無い。まあこちらの計画で使えそうなのがあったら吸収させてもらおうと思う。……で、肝心の用件だが」

両者、その一言で目つきが変わった。職人^{プロ}とも言えよう、その切り替わり。そして、ナトロンが口を発した。

「まず、コレを見てくれ」

エリカに手渡した1枚の画像。そこには何かの影だけが映っていた。何とも奇妙な画像である。

「何？これ？」

「我々が島の周囲を調査している時に発見したポケモンと思われる影だ。ただ、この影はどんなポケモンともデータが重ならない……。もしかすると今はケントが所持している可能性が僅かながある。それが何かを調べてもらいたい。ここへおびき寄せて」

「なるほど……でも、それだと此処^{ここ}が無くなるけど？」

エリカの問いにナトロンはあっさりとこう返す。

「イプシロンから聞いた。キメラ研究はかなり進展しているそうじゃないか。こいつらをキメラにするのに必要な物だけ残して、残りを本部なりに移せば何ら問題は無いだろう。いずれは捕まれる尻尾だ。今のうちに準備しておくべきだろう」

「……何もかも見透かしているのね」

「では、もう1つの用件だが……」

ナトロンとエリカが会話を交わす中、ケントは相変わらずだった。

（俺のせいで、皆が……）

暗くなる気持ち。それをさらに今の状況が圧している。自分^{ケント}が壊れるのは時間の問題でもあった。

憧れのレンジャー！。結局は夢物語で全てが終わる。このまま何も変わらないまま生きていくのは辛過ぎる。仲間^{ボケモン}のことにも心配だった。

——そんな時。

「お前がケントか……ほら、出るよ」

突如として開く扉。そこから差し出された手に強引に引っ張られるケント。息は荒れていた。

「これから……行けるか？」

声をかける1人の男。男という割にはかなり若い。20代くらいなのは何となく伺えていた。

「は、はい……」

トーンの低い声に入る一喝。

『ケント！いつまで落ち込んでんだよ！！』

「マニョーラ……」

彼の目線にはマニョーラだけでなく、友であり、仲間である者が

集まっていた。サティアは親指を立てている。静かに頷くと、息を思い切り吸って吐いた。

たったそれだけの行動だが、気持ちにある程度一段落を着けるのには充分すぎる効果だった。

「じゃあ、行くか。ポケモン達の捕まる場所に」

響く男の声。改めてみると、ケントよりは身長が高く、髪の毛は茶。目の色は薄い水色をしていた。だが、こんな感じの声を以前、ケントは聞いた事があった。

——そう、あれは——。

「ま、まさかですけど、貴方は……」

記憶を辿る内に気付く、その正体。彼の左手にはトップレンジャーの証、バトナージスタイラーが。そして、それを付ける事が出来る人間など、世界にたった4人。

「ああ、オレはハジメ……。お前らの先輩だ」

そう、今回ケントの外出許可を求めたのは先日到着したハジメである。

ハジメは今のユニオンでの状況など全てを徹底的に把握した上でケントの力が必要だ——そう述べるのである。さしもの上層部も階級の低いレンジャーの言葉は受け付けなくても、トップレンジャーともなれば無視などは出来ない。

ハジメの協力を得て、ようやく成し遂げたのである。そして、このタイミングで遂に捕らえられたポケモン達の所在が判明した。

「ホウエンの煙突山？」

「そうだべさ。そこに、怪しい研究所が外れにあるという情報を得たべさ」

「……メインはあなたとハジメさん、そしてサティアの3人。私達はバックアップは援護に回る」

「そういう事だ……ま、しっかりやれよ！」

そう言うと、駆けて行ったアビル、アリサ、デッドの3人。そしてユニオンの通路に静かに佇む3人のレンジャー！。

「じゃあ、オレ達も行くか。期待の新人^{ルキ}!!」

『はい！！！！』

遂に決行される、奪還作戦。

だが、目的の地で待つのはあまりにも残酷な運命だけだった――。

取り戻したい感情（おもい）（後書き）

というわけで新キャラは過去編に出ました、ハジメです！

ハジメ「まつ、宜しく頼むぜ」

いいお兄さんの年頃ですので、好活躍が期待できるかと（笑）

ハジメ「ところで、最新作の内容は入れるのか？」

多分、無いに等しいと思う。

でも、プレイしたいなあ（笑）

従来のレンジャーのスタイルをブッ壊しそうだし、興味津々です！

取り戻すために（前書き）

さあ3ヶ月ほど停滞しておりましたこの小説。
少しペースを遅らせるかもしれませんが久々の更新です！

取り戻すために

ケント達はハウエン地方の煙突山を目指していた。そこにケント達のポケモンを奪っていったポケモンハンターの研究所がある。そこにケントの仲間——リザードンやカメックスはいる。

「早く……!!」

ただ焦りの気持ちが彼を動かしていた。それをただ静かに見守るサティアとハジメ。

「ケント、少し落ち着いて……」

「うるさいッ!!」

「ッ!？」

手を掛けようとしたサティアだが、ケントはその手を振り払う。それに即座にケントは気付いてこう言った。

「ゴメン……」

「ケント、お前焦りすぎだ。早く取り戻して安心させたいのは分かる。だが、それでお前がやられちゃったら元も子もないぞ」

「はい」

ハジメの言葉は的中していた。心のどこかで強まる何か。それが正義とはまた違ったものなのは確かなのかもしれない。

「予め準備出来ているだろうから……突入するぞ!!」

3羽のムクホークが一気に急降下を始める。それを見た別のレン

ジャーたちも一斉に行動を起こした。それにより降下で速度を増すムクホークを他所に次々と外へ出て行くポケモンハンター。そして最後の1人が完全に研究所を去った後、その一瞬の隙についてケントたちは中へと突入した。

「お疲れ。ありがとよ」

ムクホークをそうやって手で撫でるハジメ。長年トップレンジャーのことでムクホークに乗る事も多かったが、ムクホークが撫でられて嬉しい場所を自然と撫でていた。

そしてムクホーク達が飛び立って行く。ポケモンレンジャーは必要な時だけポケモンの力を借り、そして大丈夫だと判断したらそのポケモンを野生に帰すという事も必ずやる。

「さあ行きましょう」

「ええ」

「そうだな」

奥へとその足を動かそうとした瞬間、ケントの足元を銃弾が撃ち抜いた。勿論、動きを止めるためにわざと外したのだろうが、この一発は今の3人にとって大きいものがある。

『大丈夫かな……』

『コレは……もしかすると……！』

薄々感づきかけていたその人物。

「やはり情報通り。やって来たなポケモンレンジャー」

「「お前は……」」

ケント達の前に立ち塞がるのはかつてレイル島でも彼らと接触し、大方ケントを撃つたと推測されるであろう少年。

「お前、ポケモンハンターの仲間か？」

「そう言っておこう」

ハジメの問いに答える少年。

「さて、お前は来てもらおうとしよう。こちらも用があるからな」

「マニニューラが目的か」

「俺は受けた指令に従っただけだ」

銃を構えて、奥を示す少年。それと同時にハジメの指がかすかに動く。だがそれに気付く様子は無い。

（今だ……！）

ハジメはケントが少年に護送されるように連れて行かれるその瞬間、人差し指を静かに手の平の方へ引き上げる。

「ハガネール！！」

「何ッ！？」

否、地中からハガネールが姿を現し、少年とケントを引き離す。しかもハガネールは鋼タイプ。銃弾が通用する相手ではない。

「ハジメさん、すいません」

「構いやしない。お前らは先に行け。ここはオレが引き受ける」
「でも……」

ケントの不安。それは少年の装備が本当に銃だけなのかという不安。

「大丈夫。それに本命はお前の仲間かぞくを取り戻すことだろ？」
「すいません！！」

その言葉と共に走り出すケントとサティア。少年は邪魔をする事はしなかった。それを見て奇妙だと感じたハジメ。

「何で邪魔しないんだ？」

「答える義理は無い」

「まあいいさ。後でじっくりと聞いただけよ」

ハジメと例の少年が対峙する。そして、その頃。

「ここは……」
「広いわね……」

2人は大広間とも言える広い場所にいた。辺りは暗く、周囲を見渡しても何も無いようにしかない。

「ようこそ、ポケモンレンジャーケント」

「「!？」」

彼らの眼前に止まる1人の白衣を着た女性。ただ感じたのはあまりに冷徹にも感じるその覇気。

「フッフ、あなたがここへ来た理由は分かってるわ。仲間を取り戻しに来たんでしょう?……アキラ」
「……」

嫌々するような苦い表情でアキラという1人の青年が現れる。それは見覚えがあった。

「お前、レイル島の時の……!」

「アキラ、見せてあげなさい」

アキラが黙ってボールを投げると現れるリザードン。それはケントにとって嬉しかったが、同時に激しい怒りにも包まれた。そう、現れたリザードンはケントの父、シウヘイのポケモンで間違いない。だが、その変貌ぶりは尋常ではない。それが一目で判断できたのだ。

「お前ら………!」

「さあ、ケントを倒しなさいC・リザードン」
キメフティック

ポケモンハンターの研究所での激突、開幕——!

取り戻すために（後書き）

ケント「てことで久々だな」

サティア「どうもー！」

はい。

今回はいよいよハンター研究所で戦闘開始！早くレンジャーらしい文が書けるようになりたいです。ハア・・・

放たれる24匹目（前書き）

さあ、ポケモンハンターとの戦い、第3R^{ラウンド}がスタート！

放たれる24匹目

乗り込んだ先の研究所で対峙するはポケモンハンターのアキラとハンターたちの上司とも言える人物、エリカ。そして2人の前に立ち塞がるのは大きく変貌を遂げてしまったかつての仲間のリザードン。

「お前ら、何をした!？」

怒りに満ちた声でケントがエリカに問う。エリカは冷たく微笑すると種明かしとも言わんばかりにあっさりと告白する。

「キメラ化したのよ。優れたポケモンをより戦闘向けにしたに過ぎないわ」

「なんでそんな事が出来るの!？」

今度はサティアの怒号が飛ぶ。目の前に見える打って変わったリザードンの姿を見て、何を感じ、何を思ったのかは彼女にしか分からない。

だが、言える事は正直、このあまりに辛い現実から眼を背けたいという意志。だが、敵はそんな一瞬の隙を狙う。その隙を魅入られれば、この駆け引きは負けも同然。きっとケントは自分以上に辛く、怒っている。憤怒している、という言葉だけで片付けてはならなかった。

「サティア、アブソルと一緒に先へ行け。リザードンの目は俺が覚ます」

「先へって……」

「俺の仲間はきつとまだ別の場所に囚われているかもしれない。最

悪、みんなリザードンこんなかんじみたいになってる可能性は高いかも知れない。
リザードンと連中は俺が引き付ける。だから、頼んだ」

反論できなかった。確かに異論を述べようとすれば、述べられる
だろう。だが、今回の最大の目的はあくまでケントのポケモン達を
取り戻すことなのだ。ハンターを捕まえられたらそれはそれで好都
合なのであるが。

サティアはケントの言葉を呑み、こくん、と頷くと走っていく。
それと同時にケントが行動を起こした。

「マニニューラ、こっちに眼を集中させろ！辻斬り！！」
『了解！！！！』

否、最速ともいえよう速度でマニニューラが一気にリザードンとの
距離を詰める。鋭いその爪を本気で味方に向ける日が来てしまふな
ど考えたくも無い。

だが、今はこうするべきなのだ。敵に利用されて、酷い事をする
よりは今ココで倒して欲しい、とりザードンは思うはずだろう。

「リザードン、火炎放射や」
「マニニューラ、掻き回せ！」
『ああ！！！！』

リザードンの炎を避けるマニニューラ。否、その炎が追尾するよう
にマニニューラを襲う。そんな手芸を見た事も無いケントとマニニュー
ラは共に啞然の表情だ。

「何が……！？」
「サイコフィールドや」
「サイコフィールド？」

アキラの言葉に疑問符を出すケント。敵なのにそういう事を教えるというのは絶対的な自信があるからなのだろう。だが、説明したのはアキラではなく、エリカ。アキラがエリカに視線を向けたのだ。大方、自分では話したくないらしい。

「サイコフィールド。それは特殊能力の権限をこちらが取捨選択^{えらべる}というもの。簡単に言くと、火炎放射は全て当たるでしょうけど、あなたのマニューラの冷凍ビームといった遠距離からの攻撃は全て自動的に返^{リフレクト}つて来るようになってるわ」

そう、静かに微笑しながら口にするエリカ。マニューラの受^{タメ}けた外傷^{いじ}は大きく、もうまともにバトルが出来るような状態ではない。ならば——一番したくなかった事を遂にしなければならぬ——心の奥底が痛んだ。

辛い——悔しい——悲しい、そして彼らへの憎悪が高まってい^{ポケモンハンター}く。そんな想いはしかし、込めて放つのは絶対にしてはならない。歪んだ心はポケモン達を歪ませる。いかに辛くとも、その瞬間は全てを『無』と考え、その他一切の感情を捨て去る。ポケモン達を助けたい、純粋な感情にキャプチャスタイラーは著しく反応する。純粋な心が清らかだと、素直にそして大きく反応する。

しかし、歪んだ心があればスタイラーの力が一気に低下する。ケントは静かにキャプチャスタイラーを構え、そして——

「リザードン。お前を絶対に助け出す！キャプチャ・オン！！！」

刹那、キャプチャスタイラーから撃ち出されるコマのような物体——キャプチャディスク。それがリザードンの周囲を旋回しようとした瞬間に、キャプチャディスクが一周すると、ケントの元へ跳ね返るように襲い掛かる。

「——!!」

咄嗟に迫り来るキャプチャディスクを避けるケント。キャプチャディスクはそのまま壁にめり込むように直撃する。

「キャプチャもさせないわよ、ポケモンレンジャーケント」

（くっ……こんなものキャプチャスタイラーに今は頼れない……こうなりや自力でやるしかない!）

スタイラーを戻すと、ケントは静かにリザードンに近づく。

「リザードン、俺だ。ケントだ。分か——」

少し近づき、声を発しながら近づくケントに襲い掛かるリザードンの尾。ケントは言葉にならない痛みを瞬間的に感じ、壁に叩きつけられる。腹を右手で抱え、痛みを堪えるように立ち上がると、静かに歩み寄るケント。

「リザードン、親父を……シュウヘイを覚えているか？お前の大事な相棒だ……。その存在を忘れたなんて言わさ——」

再度。尾がケントを弾くように——拒絶するように——お前は敵だ、とでも言わんばかりに攻撃してくる。それでも技を使わないのは憎むところがあるにしろ、アキラの誠意なのだろうか。

しかし、結果は同じで何度試しても、何度挑んでもリザードンは見向きもしない。

「もうやめえや……」

「？」

不意だった。敵であるアキラが完全に今、ケントを心配するような口調でその言葉を出したのだから。

傍から見れば「諦める」と言っているものだが、そんな感じでは無かった。

「リザードンそれはお前の知つとるリザードン（なかま）やないのがまだ分からんのか！！何でそこまでするんや！もう分かつとるやる！」
「……………」

一瞬の静寂。アキラの言う通りだった。1度や2度ではない。既に体力の限界はとつくに越え、足元はふらつき、アキラとエリカの両者と対面した時より眼は既に何度も攻撃を受けたためか、弱々しいものになっている。いつ意識を失ってもおかしくない——そんな状態だった。

「俺は……仲間を、家族を……大切なものを守り、取り戻すためなら……自分が壊れてもいい。それでも取り戻したい……それだけだ」

弱々しい感じの口調ではあったが、返ってそれがより強調させていた。大切なものを奪われたくない——絶望を常に浴び、体感した人間しか恐らく口に出れない生半可ではない、絶対にして、恐ろしいほどに強い感情。

アキラはもう限界だったのだろうか。物思いに思い切りこう言った。

「もう辛い目に遭わせんですませたる、この一撃で！火炎放射やりザードン！！！」

アキラの非情な指示。だが、今の彼を完全に否定する事は出来ない。痛めつけられるだけだと分かっているのに、あえてその道を選ぶというのを黙ってみるのは辛い事だ。ただ、辛いのではなく一生を生きる意味でしこりとして残るだろう。

『させるか！！』

否、マニユーラの爪がリザードンに不意打ちを浴びせる。もう、戦えないと想っていただけあり、突然の不意打ちにリザードンも一瞬怯んだ。いや、正確には「吐くな！」という声をアキラが発していたからだ。仮に不意打ちを喰らいながらも、火炎放射を放てば、口を潰され、主力攻撃の炎技を使えなくなる可能性はかなり高かった。

しかし、マニユーラもケントも同一線上にして、方向は真逆ではなく、同一。

（まずい…本格的に頭がボーっとしてきやがった……）

荒くなる息。意識を保つ中、不意に聞こえた声。

『使え。私の力を』

その声の主は今ここにいて誰でもない——といえば正解であり、同時に正しくは無い。ケントは限りなく残された力を使って、全ての力を声に変換するように、エリカに問う。

「聞かせる。リザードンのサイコフィールドはどうやったんだ？」
「いいわ……特別に教えてあげる。キメラ実験は他のポケモンの細胞を組み込む、という事。今のリザードンにはエスパークタイプの細

胞が注入されているわ」

——なるほど。結果としては、細胞が互いに同じというわけか。ケントは静かに腰に着けていたマスターボールにその手を掛け、エリカとアキラの前に掲げた。

「お前らの目的は何となく分かっていた。だから……見せてやるよ。親父がトレーナーの晩年に。最後に仲間にした、史上最強のポケモンを！」

「史上……」

「最強……どういう事かしら？」

アキラ、エリカ共に突然の事に動揺を隠しきれない様子だ。

「ポケモンの細胞について研究してるなら、聞いた事はあるんじゃないのか……？ かつて人の手により生み出された遺伝子ポケモンの存在を」

「遺伝子ポケモン……噂には……ということとはまさか！？」

エリカも今、その正体に気づいたようだった。最後の24匹目のポケモンはその遺伝子ポケモンそのもの。

「こいつはあまりの強さゆえに親父でさえ、封印してきたほどのポケモンだ……。だが、その枷を、封印を俺が今解く！ 力を貸してくれ、史上最強の遺伝子ポケモン……ミュウツー……！」

否、マスターボールから放たれた24匹目のポケモン。それは長い紫の尻尾を持ち、太腿が少しばかり太く、そして何より人型のポケモンだという最大の特徴がある。

そして、ミュウツーのテレパシーが全員に語りかけた。

『私の名はミュウツー。我が主の願いにして、その誓いを今こそ叶える時なり！……！』

果たして、ケントの父とミュウツーの間にある誓いとは一体――？
決戦はますます激しさを増していく……。

放たれる24匹目（後書き）

24匹目のポケモンはミュウツーでしたw

ていうかこの小説にしろ・・・俺の小説ってミュウツールの登場頻度半端じゃないwww

さて、次回はミュウツー混じっての大激戦！・・・の予定です。

父とミュウツー（前書き）

さあ、ミュウツー混じっての大乱戦です！

ただやっぱり強く設定し過ぎた気がしますけど・・・まあ、シュウヘイの手持ち最強なのでそこまで気にはしません（笑）

父とミュウツー

「まさかこんなところでかの遺伝子^{ミュウツー}ポケモンをお目にかかれるなんてね……」

動揺。「冷たい」と言う事が出来るあのエリカが静かに言った。その表情は始めこそ驚きに満ちたものではあったが、次第に狂喜に満ちた邪悪な笑みを浮かべる。

それはまるで獲物^{モルモット}を見つけたような、そんな笑い。

それはまるで研究者としてその仕組みを探りたい、などという探究心から出でる笑い。

それはまるで——悪しき心が巢食っているからこそ出でる邪悪に満ちた笑い。

「我らが仲間を捕らえただけでなく、キメラ化^{じしまで}するとは貴様らのやっていることは最早人のやる行動ではない。私が判決を下そう。ただの殺戮だ。殺戮などで収まるような柔なレベルではないだろうかな……」

「ミュウツー……すまないけど後……頼めるか？」
「勿論だ」

ミュウツーは静かに首を頷かせる。そしてケントの目の前が静かに黒く塗りつぶされていった。それを見ると、ミュウツーはアキラやエリカの佇む方向を向き、そして臨戦態勢に入る。

「我が主、シュウヘイ。貴様らを許すわけにはいかん、貴様らは償えぬ大罪を犯した。ここで朽ちてもらおうぞ」

「それはどうかしらね……。アキラ、C・リザードン^{キメラティック}だけでは分が

悪いわ。他にも数匹渡したはずよ、そのポケモンも出さないと相手は噂に名高いミュウツー……。最悪本当に一瞬でやられるわ」

「ほんまかいな……なら純粹に戦いたいもんやな。オレの切り札を使つて」

アキラはかつて自分のいた地位（みせ）の事もあり、ミュウツーのようなかつてない強敵を前に、心を躍らせていた。

「今回の目的はポケモンレンジャーケントに精神的苦痛を与える事。そんなに本気で戦いたいなら、その試験体（モルモット）が全滅してからにして頂戴」

エリカの冷徹な言葉。しかし、ミュウツーは一切それに動じない。刹那、リザードンとの距離を瞬間的に詰めた。その距離は1mにも満たない。あまりに突然の事でエリカもアキラも驚きを隠せない。

「我が念の力が効かぬならば、打撃で潰すのみ。雷の拳（かみなりパンチ）！ ！！」

否、ミュウツーの拳がリザードンを貫く。無情にして、非情。そして冷酷非道とも取れた一瞬。シュウヘイの相棒、リザードンが力なくその場に倒れる。ミュウツーの右拳にはリザードンの体を貫いた際に付着したリザードンの血が混じっている。

既に――リザードンの呼吸は止まっていた。完全に絶命している。

そして、ミュウツーは強く威圧をかけ、そしてエリカとアキラを睨みこう口にした。

「リザードンならば、こうする事を望んだはずだ。貴様らに利用されるならば死を我らは選ぶ。貴様らのやってる事は神の裁きをも受けて構わない、そんなものから出来ている事。ここで命朽ち果てよ

うとも……文句はあるまいな?』

「くっ、しゃーない!出るんや!!!」

否、アキラの投げたボールから姿を現したのはキメラ化したカメラックス、ルカリオ、エルレイド、カイリユー、フローゼル。

『……物量戦略とはあまりにも愚かだ。貴様らは私の怒りを込み上げられないのだな。最早』

ミュウツールの眼に映るのは怒りの感情のみ。その威圧感は凄まじいものだった。そして、ミュウツールは静かにキメラ化した仲間と距離を詰めながらあの時の事を思い出していた。

そう……シュウヘイとミュウツールが始めて対峙したあの時の事を。

時は今から十年以上も前の話。当時、各地を次々と襲う謎の怪事件が発生していた。シュウヘイは独自の調査でその犯人がカントー地方のハナダシティ郊外にある謎の洞窟、ハナダの洞窟を根城すみかとしていた事を突き止め、単身で乗り込んだ。洞窟の中は真つ暗だ。リザードンの尾の炎を頼りに奥へと進んでいく。そんな時だった。

『貴様は何者だ？』

突如として響く声。それにシュウヘイは答える。

「俺はシュウヘイ！ポケモントレーナーだ！お前こそ何者だ、噂の怪物か！？」

そう、襲われた町はその凄まじい被害ゆえに『怪物』という異名までも持っていたのである。

『人間？そうか……貴様はここまで一人で来たというのか？』

「そつだ」

『……その愚かともいえる勇気を称え、我が姿を見せてやる。貴様
はここで朽ち果てるがな』

そう言つと、ミュウツーが姿を現した。今までに見たことも無い
ポケモンと思われるその姿に驚きを隠せないシュウヘイ。

「お前、何て名前だ？」

『私はミュウツー。かかつてくるが良い、人間よ』

「じゃあ、行かせてもらおう……！」

否、シュウヘイのボールから姿を現すポケモンたち。しかし、ミ
ユウツーは全てにおいて、彼らの上を行っていた。攻撃、パワー防御、素
スポンス早さ、レベル技量——全てが『最強』とまで謳われたシュウヘイをも凌駕
していた。そして、気づいた頃には全てのポケモンが倒れていた。

「嘘だろ……！？こんな化け物見た事も聞いた事も無いぞ、オイ……」

……

シュウヘイでさえ、凄まじい動揺は隠せなかった。史上最強、完
全無欠、そして向かう所敵無し——とまで言われた人類最強のトレ
ーナーが手も足も出ない。ミュウツーの実力は桁違いだった。桁が
違う、というものではなく世界そのものを塗り替えてしまいかねな
いほどの実力を秘めていた。

それが全力か否かはまったくの別物。シュウヘイの勘が正しけれ
ば、ミュウツーはまだ本気を出していないだろう。仮にそれが真実
ならば、真の意味で彼を止める事は不可能だ。そう、必然にして不
可能。

絶対にそんな事が出来るわけが無かった。

『……人と手を合わせたポケモンは結局、自己満足程度でそれを済ませる。私は貴様らの都合に付きあわせられ、生まれた存在。貴様ら人間は自分の都合でその命をも奪う』

「……つまり、色々な場所を襲ったその真意は人間への復讐か」
『その通りだ』

そう言うミュウツーの瞳は

どこか寂しかった。寂しいのではない。孤独だった。孤独にして最強。

だが、そのどこが辛い？強い？
自己満足でいるのは他でもない、彼自身――。

「バカバカしいな。お前の都合に合わせて無関係な人間も殺された。結局はお前も同じだよ。五十歩百歩だ。そんなお前が何かを語る資格なんてない」

『何！？』

「そんなに人が憎いなら、それを何かのために使え！ポケモン達を守りたいなら、常にアンテナを張って酷い扱いをするヤツのところに行って、ぶん取ってでもそのポケモン1匹1匹を守り通せ！お前がやりたいのはそういうことだろ！！」

その言葉は重かった。シュウヘイともあろう人物が本気で、そして彼のために口にしたその想い。

『貴様らには分かるまい、そんなポケモン達など。私の苦しみは！』
「…………お前。俺と来い」

それは突然。だが、シュウヘイは一切構えずにして、無防備。自身のポケモンたちのやられぶりを考えて、それは自殺行為も同然だった。

『貴様のような人間と共にいて、何になる』

「お前が見ているのはただの表面上の世界だ。評価するのは簡単にぶつ壊れるもんでな、あるヤツを信頼していても、ほんの少しのミスでヤツは色んな者から見離される。作るのは凄く難しいくせに、壊れる時はあっさりと、無情なもんだ」

『どついう事だ？』

「だから…………俺と共にあちこち回らないか？人間の汚い部分、人間の綺麗な部分、ポケモンの汚い部分、ポケモンの綺麗な部分、全部見ようじゃないか」

『なぜ、私にそこまで手を差し伸ばす？』

ミュウツウの問いにシュウヘイは当然、とも言つような口調で答えた。

「お前は1人じゃない。俺も1人じゃない。お前がいるから俺がいる。俺がいるからお前がいる。俺たちは一心同体だ。お前の強さは破壊するためでなく、守護^{まもる}のために使うべきなんだ。それを俺たちが教えてやる。時間はかかるだろうがな」

シュウヘイのそんな笑みはミュウツウの心を一瞬溶かすような、そんな感覚がした。あまりに分厚く、そして壊せないような閉ざされた氷をシュウヘイが少しだけ、こじ開けたように感じる。

『よかるう。貴様と共に行ってやる』

「究極のポケモンには究極のモンスターボールにいてほしい。究極に一般ルームは似合わんだろう？」

『……好きにしろ』

こうして、シュウヘイのマスターボールの中へその姿を消したミュウツウ。当然、その日を境に待ちの連続襲撃は永遠に無くなるのである。

それから数年。トレーナー業を引退したシュウヘイは、各地を転々としながらミュウツウとその心は通わせる事となる。そして、ミオシティに安住の地を置いたシュウヘイ。この時、ケントはわずか3歳であった。

その頃、ミュウツウとシュウヘイはミオの郊外で夕日を眺めながら静かに会話を交わしていた。始めて対峙した時のような刺々しい口調はこの数年にほとんど改善された。

「どうだミュウツウ？良い港町だろ？」

『少々機械音がうるさい』

「お前は相変わらずだねえ。俺のポケモンとも付き合い悪いし。唯

「良いのがリザードンとカメックスくらいだもんな」

『あれは勝手にアイツらがくつついているだけだ』

「中々厳しいようで」

『ところで、今日は何か話すんだろっ？』

ミュウツウの言葉でハツとしたようにシュウヘイは顎に手を当てた。そして思案すること数秒後。その内容を口にする。

「ミュウツウ、頼みがあるんだがいいか？」

『何だ？』

「もし……もしも俺にもしものことがあって、ケントが危なくなったらケントを頼む。あいつを守ってやってくれ」

『まるで自分が死ぬような感じだな』

「もしもの時の不可抗力さ」

シュウヘイはそう、自然な感覚でそう言い切った。まるで未来に起こる出来事ことを予知していたかのように。

ミュウツウは不自然に感じつつ、ボールの中で何年もの月日が流れていった。あの言葉はシュウヘイの戯言——すなわち嘘なのだ、と考えて軽く流していた。自分の死期を悟る者など病魔に冒されてもしない限りは分らないものである。

そして、シュウヘイは冗談うそをつく事が好きだった。その嘘が上手い、下手かは別の問題として嘘をつく事自体は抵抗がそこまで無かった。

だからこそ、ミュウツウ自身、6年前の大災厄の中、シュウヘイが死した時の衝撃は凄まじいものだった。まるで本当にあの時——自分の死を知っていたのではないかとミュウツウは考えた。そして成長していくケントを見ていくうち、シュウヘイに託されたその想いを果たそうと、今、こうしてその姿を現したのである。

結果は圧倒的だった。あれほどのカメラ化したポケモンを意図も簡単になぎ払うように――目の前の障害物を退けるように、いや……もしかすると小石を軽く蹴るような、小石を踏む程度の意識であるかもしれない。それほど一瞬にして圧倒的だった。

「信じられへん……」

さしものエリカ、そしてアキラも動揺は隠し切れないようだった。一時的には押しているように感じたが、それは各個に秘められた力を見つけ出すため。それを把握した後、一瞬にしてポケモンたちは薙ぎ払われた。

だが、同時にエリカはエリカで何もしなかったわけではない。こつそりとモンスターボールからあるポケモンをケントへ向け、放っていた。既に意識の底まで墜ち切っているケントにアレは必要ない。

「貴方の力は流石よ。正直、本当にその体を調べたいわね」

『その前に貴様らが朽ちる』

「本当にそうかしら？」

そのエリカの言葉は邪悪に満ちていた。既に墮ちるところまで墮ちきった人間の笑み。

『まさか貴様……！』

「アキラ、少しで良いわ。食い止めて。思い切りやって構わない」

「ならオレの全力でいかせてもらっわ……行くんや、ルギア！」

『ルギア……海のそこで暮らすと言われる神の存在……！』

姿を現す、その巨大な白き翼。ミュウツーはその相手を見た瞬間に悟った。ルギア相手に、中途半端な戦いは出来るか分らない、という事に。ケントを意識しながらではさしものミュウツーとて自分の力も出せない。そうなければかに史上最強であっても、史上最強ではない。

（ケント……しばし耐えてくれ……！）

そして、一方でケントの意識の奥底——夢の世界へ入り込む侵入者が現れる。それは魔術師のような黒いローブのような体をし、魔法使いのような、少々長い白き体毛のようなものを頭部から出しており、そして紅き突起物のようなものが首元を支配する。その瞳は蒼白く、黒き姿を纏いし者には最適とも言えよう、そんな姿をしていた。

そう、悪夢を魅せる者、ポケモンダークライが侵入したのである——。

父とミュウツー（後書き）

次回は・・・ケント達が戦ってる最中のサティア&ハジメにしようかな、と悩んでおります（笑）

まあ、それは次回のお楽しみです！

合流へ！！（前書き）

今回はハジメ&サティア編です。

合流へ！！

ケントとエリカ、アキラが相對する頃、ハジメとイプシロンの激しい戦いも続いていた。

しかしながら、イプシロンには銃がある。その分、ハジメよりは一枚上手、とも言えよう。イプシロンの銃撃を避けるようなそんな技術までは会得していないハジメはその都度ハガネールの屈強な頑丈さを利用して、ガードしていた。普段ならこんな事はしたくないが、相手は銃を持っている以上、下手な行動は即座に死を意味していた。それにこの男、なにかとハンター事情にも詳しそうだ。連行できれば、ポケモンハンターの情報もまた入手できるかもしれない。

「そうやっていつまで無駄な抵抗を続ける気だ？」

イプシロンはそう言った。確かにその言葉の意味は無いだろう。ハジメにしても、持久戦はハガネールの体がどこまで耐えられるかという危険なレベルの話になる。相手は確実に銃撃戦の達人、ともいえた。全ての銃弾が無くなれば、1秒もしない内に再び銃弾を銃に入れる。そしてまた発射していく。隙が何1つ見つからないのだ。これではいかにハジメがトップレンジャーと言われても手の打ちようがない。

「さあね。お前の銃弾が^{ストック}尽きるまでかな？」

「残念だがそれは無理な話だ。その前にそのハガネールが死ぬ」

「なら、決着は急がないといけないな」

「そういう事だ。世界に4人しかいないトップレンジャーの1人、ここで始末させてもらおう」

「それも無理な話」

「何……！？」

イプシロンの一瞬の動揺。その隙を突き、今まで伏兵として身を潜めていたハジメの相棒、ムツクルがイプシロンに襲い掛かる。イプシロンは咄嗟に銃の引き金を押した。しかし、ムツクルも高速移動でそれを避ける。しかし、その僅か数秒のやり取りをハジメは見逃さなかった。

「ハガネール、締め付ける！」
「何ッ！？」

刹那、ハガネールの尾がイプシロンに巻きつき、イプシロンの行動力が制限される。銃の引き金も押せない状況下におく事が出来た。

「さあ、チェックメイトだ」
「くつ、仕方ない。今回はこちらの負けだ」
「何？」
「つまり、こういう事だ」

刹那、辺りが一気に輝きだす。その原因がスタングレネードというものによる強烈なフラッシュである事は間違い無い。そして、光がやむと、ハガネールに締め付けられていたイプシロンの姿は無い。自分も銃撃されていないところを見ると、大方ココからは逃走した、という事はすぐに分かる。

「お疲れさん、ハガネール。ありがとな。その前にその傷、治すよ」
『ネール』

ハガネールはハジメの言葉に首を振った。それが暗示する事は簡単だ。

「……分かった。気をつけろよ」

ハガネールはハジメの言葉に頷くと、コンクリートに穴を開けて、野生に返っていった。そして残されたハジメとムツクル。

「さあ、行動再開だ。まずはルーキー^{アイツ}達と合流しないとな」

そう言うと、ハジメが駆けていく。その後を追うようにムツクルも飛行を再開した。

その頃、サティアはケントと別れてから1人、研究室と思われる場所に来ていた。あまりに不気味なポットがいくつもある上にその部屋の机の卓上には薬品の匂いかなりしていた。いや、薬品の匂いは部屋中からしている。まだ奥へと道はあった。その先へと歩を進めるサティア。

「あつた！これね……」

先の部屋にはアタッシューケースがあつた。その中はやはり無数のモンスターボールが。早速確かめるためにモンスターボールの中を一斉に開く。そこから姿を現したのはギャラドス、ハッサム、ムクホーク、ライチュウ、ナツシー、メタモン、デリバード、ヘルガー、リングマ、ボスゴドラ、チャーレム、メタグロス、ボーマンダ、ヌケニン、ゴウカザル、ガバイト、のメンバーだ。

「良かった！皆無事ね！！」

サティアはメンバーを確認する。全てのポケモンがいない、と言う事はそのポケモンは恐らく——嫌な想像しかできないが、とにかく今はケントの元へポケモン達を連れて行くのが先決であつた。

「さあ、急ぐわよ！」

ボールにポケモン達を戻し、アブソルの背に乗るサティア。急がねばならない——焦り以上の何者でもなかった。何故かは分からないが、全身に張り巡らされた神経——細胞1つ1つが今までに無い

ものを察知していた。逆立つような、そんな状態である。

（何、このあまりに嫌な感覚……！）

何事も起こらないで欲しい、というサティアの願い。しかし、それはとても簡単に砕け散る事となる。

数分後、サティアはケントと別れた元の部屋にたどり着いた。そこには見たことも無いポケモン——ミュウツーとルギアがいた。しかし、両者共に相当なダメージが蓄積されている。軍配はギリギリでミュウツーの方に及んだようだったが、問題はそこではなかった。

「……………ッ!」

サティアも思わず口に手を挙げて、声に鳴らない叫びを上げた。
その直後、ハジメも合流する。

「なっ……………!」

ハジメも絶句する光景。それは――

ケントが、その肉体が操られていたのである。ダークライの手に
より――。

『くっ……………』

ミュウツーですら、手も足も出せない状況にいた。そして、静かに
勝利を確信したかのように微笑するエリカもそこにいた。

合流へ！！（後書き）

果たしてケントがこうなった原因は？
次回をお楽しみに！！

呼び起こされる記憶（前書き）

今回はケント編。ケントが何故敵の手に堕ちたのか、その全貌に迫ります。

呼び起こされる記憶

ミュウツーとルギアが激しい戦いを繰り広げる頃。ケントは深い闇へと堕ちていた。この場合の深い闇、というのは意識の奥底である。つまり気絶している事と眠っている事は根本的に近いものがあるとこの作者は考えている。

眠っている、という事は浅い眠りの場合だとそこまで該当しないが、深い眠りだと他人に無理矢理起こされるなどしない限りはそう直ぐに目を覚ます事は無い。最低でも数時間は眠ったままだろう。一方で気絶しているというのもこれに近いものがある。こちらの場合、最悪数日は気絶している、というから結果論では似ているように全然似ていない、が結論に近いかもしれない。他にも語りたい事はあるのだが、ここは生憎そんな場所ではない。簡単な話はこの辺でお開きにしていこう。

「ココは……？」

ケントは深い闇の中にいた。辺りに見え映るのは黒く塗りつぶされた空間。所構わず歩いてみる。こういうパターンのオチは何かに追いかけて、結果、目を覚ませば周囲に皆がいる、というパターンだ。今回もそれに例外は無いように思えた。しかし。今回は一向にその追いかける原因物が何一つ来ないのだ。

「ん？」

ケントの眼前に広がるのは1つの屋敷だ。屋敷、というよりは古い洋館である。しかも、木造建築物。今回はこの中が舞台なのだろう、と考えてケントは迷わず扉を開いた。大方、この洋館はお化け

屋敷なんだろうな、とか変な期待をしている。

しかし、意外や意外。その中には1人の少女がいた。黒いフードを纏ってランタンを手に持っている。その姿はまるで賢者のようである。

「誰だよ、アンタ。もしかして今回のお化けのいる場所へ案内してくれるのか？」

「お化け？そうですね。そんなものよりいいものを魅せてあげますよ。私の名はウィル、と言います」

「ウィルね……」

ウィル、と名乗る人物に先導されケントは歩いていく。そしてウィルはある寂れた扉の前で止まる。

「ココがその舞台ですよ。良い夢を……」

「あ、ああ」

ウィルが扉を引き、その中へと入るケント。少し歩くが、何も無い。辺りはまた黒く染まりきっていた。

「おい、ウィル。どういう事だ……ッ!？」

ケントは入ってきた扉を見た。そこにはなんとドアノブすらないいや、扉自体も。そして、ケントの目の前の光景が。辺りの風景が変わっていく。それは港町だ。

しかし、ケントはそれを見た事がある。

「これは……ミオシティ!？」

眼前に広がるミオシティ。そして空から一気にある一軒の家へそ

の舞台は変わる。それはフレンドリイショップ。ケントの母親は元々商売上手でココのフレンドリイショップの店長をしていた。因みに父親のシュウヘイもその手伝いで一緒に仕事する事が度々ある。そしてそのミオシティのフレンドリイショップの中へと舞台は移る。

「急いで避難を！」

「そうだな」

飛び交う2つの男の声。片方は聞いた事があり、もう片方は知らない男の声。次にしたのは女の声。

「あなた」

「そうだな。よし………すいませんが、外でお待ちいただけますか？」

「分かりました」

男と女の2人がその男から背を向けた瞬間だった。突然、ナイフが男と女を貫く。一度に両手でやったわけではない。男は元々2人いた。そして、1人が片方ずつを仕留めたのである。そのナイフの貫いた先。それは心臓を確実に貫いていた。こうなれば生存率は零に等しい。男と女が倒れる。そして男たちは血塗れたナイフの血を払い落とすと、そのショップに火を放つ。生憎、町の住民は緊急事態のこともあり、避難していて近くには誰もいない。そしてショップと言う事は火を通しやすいものも多くある。火を放つとその男たちは逃げ去るように立ち去った。

ケントは足が震えていた。吐き気もする。気持ちが悪い。息が自然と荒くなる。心拍数が増えたり、減ったりと平常ではないのはすぐに理解できた。そしてついには腰を抜かすように尻餅を打つ。

「う、嘘だろ……！？」

そう、ケントの目に映ったのは過去の映像^{ヴィジョン}。しかも、そのナイフで殺されていたのはケントの父シユウヘイとその母親。しかし、ケントが最も驚いたのはそこではない。

確かに親が殺される映像を見て平常心を保てないわけではない。だが、最も衝撃が走ったのは別にあった。そう、その殺人を実行した男たちである。その男たちは同じ服装をしていた。そして、その服はケントが今現在着ているものと同じ服装。

そう、ケントの両親を殺害したのはポケモンレンジャー、というあまりにとんでもない事実。

「う、嘘だろ……何かの間違いだ……俺の親はディストロップ^{ディストロップ}に殺されたんだろ？う、嘘だ……」

「嘘ではない。今まであなたはずっと騙されていたのですよ」
「ウィル！？」

そう、いつの間にかウィルがケントの隣にいた。そしてウィルが話を続ける。ケントの質問は後回しにする、とでも言わんばかりの勢いで。

「レンジャー側^{サイド}が何を考え、そう行動したかは知った事ではないです。しかし、今あなたが見たのは偽りの夢ではない、真実の夢。記憶、というのは夢の形を取る事で忘れていても再現が可能。今、その全てをあなたにはお見せした。結局ポケモンレンジャーもただの人殺し……」

「う……嘘だ……」

そう静かに呟くケントの瞳から光は完全に消えていた。ただ、静

かに「嘘だ……」と呟くだけ。

完全に絶望、という闇に吞まれていた。
完全に孤独、という闇に吞まれていた。

そして完全に……裏切られていた、という事実にも気づいてしまっていた。

ウィルの正体は勿論、他でもない悪夢を魅せるポケモンダークライ。ウィルの姿のまま、静かにケントの死角で邪悪な笑みを浮かべていた。

（これで完全にケントは我らの手に堕ちた……）

そして、現実の世界ではケントの肉体は完全にダークライが支配している。そして、ダークライはエリカの隣に立っていた。そのすぐ近くにはケントもいる。

『人間はポケモンと違い、技などは放てないが……。それでも効果は十分だ。ポケモン以上に人間は脆い。攻撃一つでケントは死ぬだろうしな』

「さあ、それでも戦う？ ポケモンレンジャーの皆さん？」

エリカの言葉が深々と集結したポケモンレンジャー、サティアとハジメ、そして最強の遺伝子ポケモン、ミュウツーへと突き刺さる――。

呼び起こされる記憶（後書き）

ダークライは悪夢を魅せるポケモン。ケントに見せた夢が全て偽りかもしれない。しかし、真実を見せるダークライ（これは映画のですが）も存在します。

果たしてケントの過去の出来事の真相はどうなっているのでしょうか？

別れ（前書き）

今回でポケモンハンター編はおしまいです。

別れ

相対する人間たち。ポケモンたち。

「フッフ、コレではあなた達とて手は出せないでしょう?」

「アンタ、どこまで卑怯なの!? 卑劣なの!?」

「どこまでも卑怯で卑劣よ」

サティアの言葉をあつさりと切り捨てるエリカ。だが、この状況では一切の手出しが出来ない。しかし、ダークライがこう言った。

『エリカ、もう充分だ。出来たぞ』

「あらそう。意外に早かったのね……こんな簡単に終われるなんて脆い精神……」

エリカ、ダークライのやり取りに疑問を示すサティアたち。当のケントは今、過去を見させられたせいで完全に悪夢に堕ちきっている。

「レンジャーさん。こうしないかしら?」

「何よ?」

エリカの次の言葉は意外や意外である。

「もう彼は必要ないわ。返すわ、でもその代わりに私達がココを安全に出るまで、そうねここを経て10キロは手を出さない事。追尾は勿論よ」

「それでケントを返してくれるのか?」

「勿論よ。元々最終的な実験は成功したわけだし、特にもうそれは

返しても問題ないわ」

エリカの言葉には苛立ちを隠しきれなかったが、ディストロープと戦う際に巨大な戦力となるであろうケントが無事に帰ってくるならばそれはそれで充分だった。逮捕したいがそのせいでケントが命を落としてしまつては元も子もない。

「分かつたわ……先にケントの身柄を返して」

「そうね。でもあなた達が裏切る可能性もあるわ」

「逆にお前らが裏切る可能性もあるけどな」

そう口を挟むハジメ。エリカは渋々、という表情で指をサティア達の方を指してダークライはケントの体を投げる。勿論、それが直接地につく事は無い。ミュウツィはケントを、その体を抱えていた。

『レンジャーは返した。我らは引き上げさせてもらうぞ』

『……個人的には私は貴様らを潰したいが取り引きだ。さつさと去れ。私の気が変わらない内に』

『そうさせてもらおう』

その言葉の直後、基地内に煙幕が巻かれ、それを払うとエリカ達の姿は丸々消失していた。

「……一応、これで終わりなんだな」

ケントはその数時間後に目を覚まし、そう口にした。表では普段のように振舞っているが、内心では疑惑の目しかないのだ。そして彼の周りには開放されたポケモンたち。勿論、その中には2度とそ

の姿を見ることが出来ないポケモンもいた。彼らはケントの父、シユウヘイの埋葬されているシンオウのミオの墓地に埋葬される事になった。

そしてケントはある重大な事を口にした。

「皆、オレの元から出て行ってくれ」

『え！？』

それは唐突であった。だが、頷けない話ではない。あれほどの事が起こったのだ、またあんな事が起こるかわからない。

「これは今の主人であるオレの言葉だ。みんなの面倒をこれまで放置してここまでオレのために力を貸してくれてありがとう。だけど、もうこれ以上迷惑は掛けられない。お前達の幸せを考える以上、ここでお前たちは野生に帰るべきなんだ」

夕日が輝く中、ケントはそう静かに語った。ポケモンたちは静かである。別れも悲しいがそれ以上にケントは自らの事を考える以上に自分たちのことを心配してくれているのだと思うと、その思いをむげには出来なかった。

「今日は決別の日だ。これから皆、色んな場所で色んなポケモンや仲間と会って楽しく暮らすんだ。それじゃあ……」

『待てよケント』

振り向いたケントに声を掛けたポケモン。それは――

「マニョーラ……」

『俺はついて行くぜ。お前がどんなに言おうと』

「ダメだ。お前も皆と一緒に……」

行け、といおうとした時、一斉に皆が騒ぎ立てた。それはマニユーラへの批判などではない。応援だった。そう、自分たちの代表としてマニユーラは選ばれたのだ。今までがそうなら、これからだって一生一緒なのである。

「……………」

『この状況で俺をのけ者に出来る？』

「出来るわけ無いだろ、バカ野郎！……………死ぬ気はあるんだな？」
『元からさ』

マニユーラは怪しげな笑みを浮かべ、ケントにそう言い切った。迷いなど一片の欠片とて存在していなかった。

ケントの決意は固まった。

「分かった。これからも……………よろしく頼むぜ、相棒！」
『ああ、こっちこそ』

ケント、マニユーラの決意の握手。それは決して離れる事の無い絆を決意させるものだった。

しかし、それが壊れる時はもうそこまで遠くなかったのである。

場所は遠く離れて、ディストロープの本拠地。

ナトロンは1人の男と面談していた。いや、面談というよりは報告である。

「……というわけです」

「フン、所詮はポケモンハンター。奪いは得意でも命をとるまでは奪えないか。過大評価しすぎたわい。とんだお遊び集団じゃな」

「それは言い過ぎでは？」

「構わぬ。所詮、お遊び集団じゃ。命まで取れない以上はその程度。まあハンター使うほどの大金はもう準備しておらん。一応貯蓄は山ほど蓄えておるがな」

「そうですか。しかし、ケントが……例の子供が遂に知りました。アレを」

「ほう、アレをか。中々良い仕事をしてくれるな。ポケモンハンターも」

「では、計画を次の段階へと進めようと思います。構いませんね？」

総帥」

ナトロンはその男を『総帥』と口にした。そう、ナトロンの目の前にいる男こそがディストローブの総帥なのである。

「構わぬ。我らが野望のため、早く計画を進めるのじゃ、ナトロンよ」

総帥は低く、冷徹にそう言い放つのであった。

別れ（後書き）

というわけで遂にディストロップの総帥が姿を現しました！
次回からは……新章突入前の話になるかな？

お楽しみに。

ちょっととした出会い（前書き）

今回から新章突入です。

ちよつとした出会い

ポケモンハンターとの長いようで短かった戦いからはや1週間足らず。ケントがノッゼの地に帰ってやっていたのは調べ事だった。レンジャーとしての仕事を終えると真っ先にノッゼシティの巨大図書館で調べごとを空き時間に毎日する日々。その間はマニユーラでさえ、邪魔させなかった。完全に1人で調べている。

全ては1週間前に見た悪夢だった。あの悪夢が全て偽りだと信じたいが、実を言うとあの後も毎晩のようにケントはあの悪夢に魘されていたのである。

(……ダークライは悪夢を魅せるポケモン。なら悪夢を打ち消すポケモンもいるんじゃないか……！)

焦るように本のページを多少乱暴に捲っていく。ざっと目を通し、ハズレだと判断したら次のページへ。というサイクルの繰り返し。

今ケントが読んでいたのはその図書館で最も厚い本。ポケモン研究家でさえ、その方面について研究していなければ確実に見る事も無い本である。

その本は、伝説のポケモンについて記されていた。そう、ダークライは悪夢を魅せるポケモンと同時に伝説のポケモンなのだ。そう考えれば頷けない話ではない。それと相反するポケモンがいればそれは確実に伝説のポケモンなのだから。

結局、この日も収穫は零に等しいものだった。何せ連日悪夢を見て魘されているからじわじわとではあるが、体力や精神力は奪われている。この日の引き上げは前日より1時間近く早いものであった。街道ではなにやらバンドのセッティングが進められている。今日はそういえばバンドがやってくるとちらほらと街がその噂で持ちきりだった。確か、世界各地でバンド演奏をしている4人組だと言うがそれはケントにとって関係の無いものである。とにかく歩を進めて、レンジャーベースに帰還した。腰ポケットに両手を入れ、何も考えず、ただ無心で歩く。そんなケントを出迎えたのはサティアであった。

「お帰り」

「……ああ」

「最近元気ないけどどうしたの？」

「関係ないだろ。まだ引きづってるんだよ」

「そうか。確かに………辛いモンね」

サティアはケントに同情する様に言った。だが、この時のケントの発言は別の場所を射止めていた。そう、ケントは悪夢の事を言ったのだが、その事は誰にも打ち明けていない。というより打ち明け

られないのだ。それに打ち明けたところでそれはただの嘘っぱちだろう、というレベルの話で一蹴されてしまう。

「ケント、ちょっと付き合ってくれない？」

「ん？別に良いけど」

「アブソルはここにいて。2人でちよつと出かけてくるから」

『分かったよ。ケント、サティアを頼むよ』

「ああ」

アブソルの言葉に首を縦に頷かせるケント。ケントとサティアは街の中へ繰り出した。観光地、と言われるだけあり夕陽が差すというのにも関わらず、人々は平然と楽しそうに毎日を送っている。

「ケント、何か買つてよ」

サティアは体を反転させ、後ろ歩きの状態でケントに甘えてきた。その笑みは正直可愛い。

「勘弁してくれよ。今金欠なんだぜ」

「どうせ、給料入るの明日なんだし」

「殆どぼつたくらべて俺の手に入るのはごく僅かだぞ」

「いいじゃん。別に」

「よかねーよ」

「よかなくない！」

続く口論。次第にそれが面白くなったのか、互いに吹き出して笑ってしまう。そういえば、こんな風に純粹に笑ったことは最近無かったな——そんな事をケントは考えていた。ここ最近は色々とありすぎた。正直疲れている。

そんな時、サティアの体が誰かと接触する。バランスを崩したサ

ティアが前のめり——つまりはケントの方へと倒れてきた。

「ちょ、おまつ!?!」

「キャッ!?!」

そのまま、ケントが尻餅を着いたことは言うまでも無い。接触した相手もそれに気づいて、こちら側を向き、手を差し伸べてくれる。髪の毛は綺麗に整えられていて、とてもお上品な感じに見える。ドレスを身に着けていたり、指につけている指輪が良い証拠である。

「大丈夫かしら?」

「ええ、大丈夫。あなたは?」

「ワタシは大丈夫です」

「すまないな、コイツのせいで」

ケントはそう言うと言強引にサティアの頭を下げる。女性はそれを見て笑ってしまう。

「別に構いませんわよ。ワタシはアリナと言います。ココへはバカンスで。あなた方はポケモンレンジャーですよね?」

「はい」

「そうです」

上からケント、サティアがアリナの問いにそれぞれ答える。するとアリナはなんとこう言った。

「と言う事はその着慣れていないような感じから判断してケントさんとサティアさんですね?」

「!?!?」

「別に驚く必要はありません。ココにレンジャーベースを作ってく

れと頼んで管理しているのがワタシの叔父なのです。だから少し話くらいは。ケントさんは天才、といわれるほどではありませんか。お噂はかねがね聞いています」

「アリナさんの叔父さんってどなたなんですか？」

サティアの問いにアリナが返そうとした時だった。

「ワシじゃよ」

「ぐ、グランゼ！？」

アリナの代わりに答えたのは車椅子に乗ったご老人。グランゼ、と呼ばれた人物である。

「そう、ワシはグランゼ。このアリナはワシの姪っ子でな。今はここへ遊びに来ておるんじやよ」

「それにしてもまさかグランゼさんがここにレンジャーベースを作れと……」

「驚いたかね？」

「はい、当然ですとも！」

グランゼを目の前にして緊張を隠せない2人。グランゼと言う人物が何者なのか、説明すると知る者はいないほどの有名人である。現在52歳。数年前の事故で片方の足を痛め、現在は杖か車椅子を使って生活している。そして最も驚くべきところは世界的大企業、シルフカンパニーのストリーゼを始めとした10近くの地方支社のトップとして君臨、シルフの知名度アップに大貢献しているほどの人物である。事実、現在でも全支社でトップの売り上げを誇るのは全てこのグランゼがトップを務める支社で、知名度は世界中に知れ渡っている。別名、『世界一の経営者』と言われるほどであるのだ。

「なあに、ココは観光客や古代遺跡もある。その事を考えるとレンジャーの力は必須と判断したのじゃよ」

グランゼの言葉は確実に的を得ている。さて、今の言葉の中にあつた『古代遺跡』というフレーズに関してはまた別の話で追求していくとして数々の観光名所のあるこのストリーゼは確かにレンジャーの力があるだろう。異論は一切無かつた。

グランゼは笑みを浮かべて、こうも言う。

「最近は大変な連中もいるらしい。頑張つてこのストリーゼを守つて欲しい。頼んだよケント君、サティアちゃん」

「はい！！！！」

グランゼの言葉に敬礼して答えるケントとサティア。グランゼは納得したような顔になり、

「ではそろそろおいとましようか。行くよアリナ」

「はい、叔父さん」

そんなやり取りをするとグランゼとアリナはケントとサティアが来た方へ歩を進めていく。

そして、それから数分後。船着場でサティアとケントは海風に当たっていた。サティアの髪の毛が風に靡く。

「ケント、ワタシ、ずっと隠してたんだけどさ」

「何だよ？」

サティアはこう告げた。それはあまりに衝撃的であつた。

「ワタシね、自分がどこで生まれたのか……分からないの」

ちょっとした出会い（後書き）

ケント「作者、どういうこと？」

ん？次回で色々分かるから。

ケント「何だよ、それ」

今回はちょっと大物ゲストでもお呼びしようかなと思います。
まあ今回の話でも伏線は立ってるんだけどね（笑）

いとどりのセレブリティ！？（前書き）

前話でフラグは立っていました。

気づいてた方は多分気づいていたかもしれませんが、そんな今回の話。

いいとどりのセブリティ！？

「は？ 何の冗談だよ……」

ケントはサティアの突然の告白に一瞬うろたえる。というより、元よりそんな反応しか出来ていなかった。

「嘘じゃないわよ。ワタシ、実は記憶を無くしててね……今の名前だって実際偽名。全部ワタシを助けて拾ってくれた人が付けてくれた。このサティアって名前も元は『想い』からきてるし」

「だからって……」

「ケントが悩んでるならお互いに隠してることを露見しようかなって思ったの。ワタシ、何も出来なかった。ずっとケントが一人で戦うのを眺めてた。ワタシ、どうしたらいいんだろうって考えてたの」

「それで打ち明ける事を決めたのか」

「うん」

「そっか……ごめんな。俺のせいで」

「構わないよ。だって仲間じゃない。困った時は一緒に悩んで、笑って、泣いて……辛い時も一緒に歩きたい。ケントだけが先に行くじゃなくて、ワタシたちも一緒に歩きたいから……」

サティアの言葉はとても優しく、そして理解も簡単だった。重苦しい気持ちが少しだけではあるものの、軽くなるようなそんな感じになる。勿論、錯覚なのだろうという考えも捨ててはいなかった。

「さあ、戻ろっぜ。そろそろ晩飯の時間じゃないか？」

「そうね」

サティアも実質2つ返事で「うん」と頷き、意見が一致したので

納得したように2人は帰路に立つ事になった。そんな時、ノッゼシテイの広場に集まっていく人々。そういえばバンドが来るとは言っていたが、ここまで人が集まるものなのだろうか？

いや、ただ単にそのバンドが有名なだけなのかもしれないし、刺激ほしさに来る野次馬もいるだろう。この両者に属さない人もきつとはいるはずだ。

「確か今日はゴーゴー4ってバンドが来るらしいわよ」

「『ゴーゴー4』？」

「そう。世界各地でバンド演奏してるんだけど、あまりに凄すぎるから追っかけファンが続出してらしいのよ」

「へえ……」

という事は前者の考えの方がこの人の集まりの可能性が高い、と言う事だろう。そんな中姿を現す3人の男と1人の女。この4人が噂のゴーゴー4なのだろうか。どちらにしてもその服装は派手である。正直、嫌でも目立つしインパクトで脳裏に刻まれそうだ。

だが、4人の楽器はさらにインパクトである。いや、正しくは1つだけであるが。それぞれがリースギター、ベースギター、ヴァイオリンと来る中で1人だけが何故か太鼓なのだ。正直、合うわけないと思うのが当然だが売れている以上は合っているのだろう。信じられない。

「お前らー！ 盛り上がってるかー！！！」

やがて、リースギターを持ったリーダー格と思われる男がマイクを片手に群集に語りかけた。それに群集のテンションは最高潮に達する。始まったもいないのにこのテンションの高さはついていくのに疲れる、というものだ。

「それじゃ行くぜええええ！！！」

その言葉を皮切りに大演奏が始まった。テンションの高くなるような曲からその見た目からは想像もつかせない静かな曲までその場にいる群衆が皆、その音色の虜となっていた。

音楽には人を魅了する力がある——などと聞いた事があるが、今の状態がその説明に相応しいのかもしれない。そして、ケントやサティアもその盛り上がりの中に溶け込んでいく。そして楽しい時間が過ぎ去ろうとした時。

「さあ、次がいよいよ最後の曲だ！ 張り切っていく——」

リースギターの男の言葉が最後まで発される事は無かった。理由は簡単である、コンサート会場の一角が爆発したからだ。生憎、運が良いのかその近辺には誰もいなかったのでその際の怪我人はいないものの、一気に大パニックになった事は間違いない。ケントとサティアも夢から覚めたようにゴーゴー4のいるステージへと上がる。

「レンジャー！？」

リースギターの男がケントとサティアを見た瞬間、驚きに満ちた発言をする。その口ぶりはしかしポケモンレンジャーをよく知っているような感じである。

「下がっていてください！ この感じ、もしかすると……」

サティアの曖昧な言葉に頷くケント。ゴーゴー4の一同もそれに頷いたようで、群衆へ避難するように自慢の音楽で語りかける。それを聞き、そして先の爆発で混乱していた群衆は一気にその姿を散らせた。

「出て来い！　そこにいるのは分かってるぞ」
「あらそう。まあいいわ」

そんな声と共に姿を現す1人の女性。紫色の髪にボロボロのシャツとズボンを履いていた。その隣には体が固い鎧に覆われたような姿をしており、鼻先にはドリルのような角を持つポケモン——サイドン。

「アタシはデイストロープ幹部のローブス。ちよつと噂のケントさんに会いたくてね。お手並み拝見とだけいきますか。サイドン」
「……」

サイドンは無言だった。鳴いただろうが、それに特別な感情は一切籠っていない。これがポケモンを操るという事なのだろうか。

「クツ、やるぞサティア」

スタイラーを構えてケントはサティアに言う。サティアもそれに頷いた。パートナーも無しで大型のサイドンのキャプチャ初めてなのだからこの協力体制は普通だともいえる。だが、ローブスはその一手上をいつている。

「ケント以外に興味は無いわ。コイツらで遊んでなさい。ヘラクロス、カイロス」

その言葉と共に現れるカブトムシのようなポケモン、ヘラクロスとクワガタムシのようなポケモン、カイロス。その2匹がサティアの前に立ち塞がる。

「レンジャー、大丈夫か？」

リースギターの男がケントに聞く。真剣に心配してくれている口調である事に間違いは無い。

「ええ。やるしかない。ただそれだけです」

しかし、ケントには一片の余裕は見られない。本気でスタイラーを壊されてしまう事も有り得るのだ。

「ちよつといいかな？」

突然だった。ゴーゴー4の背後から声をかける1人の青年。歳は大体推定ではあるものの20代のようにも見える。

「え？」

その青年は少々強引にケントのスタイラーを取る。そしてケントに「ごめんね」とだけ言う。すぐさまケントは「返せ」と言おうとしたが、それはリースギターの男に止められた。

青年は群青色の髪の毛をしている。大人びた雰囲気はあるがそんなに凄そうな人には見えない。

「ヤライ、すまないね」

「とつとと終わらせろよ。讓ちゃんも下がってな。すぐに終わるか
らよ」

ヤライ——そう言われたリースギターの男はなんとサティアにも下がれというのだ。この2人の信頼関係にも近い発言は一体どこから湧いてくるのだろうか。聊か疑問である。

「一般人がキャプチャできるわけないだろ!? アンタは何を考えてんだ!？」

ケントはヤライの方を向いて激昂した。しかし、次の瞬間。サティアは驚きに満ちた口調で発した。

「う、嘘……もうキャプチャできてる……」

「え——!？」

ケントがその体を再びロープスの方へ向けると、なんと既にサイドン、ヘラクロス、カイロスのキャプチャが済んでいたのである。僅か数秒とも言うべきだろうか。しかし、信じられない腕前だ。

「はい、これ。勝手にゴメンね」

「え、ええ……」

スタイラーを手に、周囲を見渡すとロープスの姿が見えない。どうやらどさくさに紛れて行方をくらませたのだらう。しかし、もっと気になったのはこの群青色の青年だった。しかし、その招待はすぐに露見されるのである。

「カヅキー! 何してんのよ!?!」

そんな声と共にやってくる水色の髪の女性。こちらも少し大人びた雰囲気があった。しかしそれよりも目を引いたのは今その女性が発した『カヅキ』という名。

確か、世界に4人しかいないトップレンジャーの名前はハジメ、ヒトミ、ヒナタ、そして——カヅキ。それを思い出した瞬間、ケントとサティアは硬直した。一瞬にしてサイドン、ヘラクロス、カイ

口スをキャプチャしたその腕前。並の実力者ではない。という事は、このカツキという人物は――

「あ、あの……？」

サティアの言葉に察しがついたようににつこりと笑って答えるカツキ。

「気づいてくれた？ 普段は一切気づかれないんだよね」

「じゃあもしかして本物……？」

「まあね。ヒナター！ ちょっと来てー！！」

「「ヒナター！！？」」

カツキが水色の髪的女性――ヒナタを呼んだ。それを見たゴーゴ―4の連中は色々な表情をしているが、そこまで驚きはしなかった。

「ところでヤライさん」

「何だ、レンジャー？」

ケントは密かにヤライに質問してみる。

「ヤライさんとカツキさんってどんな関係なんですか？」

「強いて言うなら昔の喧嘩仲間だな」

「け、喧嘩仲間……」

その素っ気無さ過ぎる回答にケントは啞然とする。この1日、もしかしたらこれから本番なのかもしれない、そう考えるケントである。

そして一方。ディストロープのアジトでナトロンは電話をしていた。今のこの時代、テレビ電話が主流なのだが、今日のナトロンは我々が日常的に使う声だけの電話だった。

「……ではちょっと今回はそっちで話をしたいんだ。ふむ、ではそういう事で」

電話を置いてナトロンは椅子から立ち上がる。周囲には彼の研究資料が散乱している。隣の部屋は彼の研究室だ。だが、今日に行く気になれなかった。そして、白衣を手にとってそれを纏う。今まで着ていた白衣は洗濯機の中へと放りこんだ。

「さて、向かいますか」

そんな独り言をばやきながら、ナトロンは自室を後にするのであった。

いとごどりのセレブリティ！？（後書き）

サティアはまさかの記憶喪失者！

トップレンジャー、カツキ&ヒナタの登場！

そしてポケモンレンジャーをした方ならご存知、ゴーゴー4の登場！

ゲームキャラの登場が多い今回の話。

ゴーゴー4は今回、ヤライの出番が多かったですが次回は他の3人にも出番を多く与えようと思ってます。

ではまた次回！

歯車が動き出す時

ヤライが発した『喧嘩仲間』というのは意外にも分かりやすい意味だとケントとサティアはこの場にいる6人から聞いた。かつてフイオレ地方で活動していた組織、ゴーゴー団の幹部、ともいえるポジションについていたのがこの4人だというのだ。逮捕、ということしたがそれはカヅキに止められた。

「もう、彼らは改心しているしこういった事でみんなに楽しみを与えてくれている。無理に捕まえる必要は無いよ」

「はい……」

「よく言うわね、昔のアンタも同じ事言ってたのに」

そう相槌を打つのはトップレンジャーの1人、ヒナタだ。呆れ口調でその言葉を口にし、カヅキは咄嗟に「む、昔の事だって！」と弁解した。全員がそれに大笑いしてしまう。

「そつえば、カヅキさんとヒナタさんはどうしてここに？」

気になるであろう、その質問をサティアは2人に問いかけた。2人の格好は完全に私服。仕事で来ていないのは察することは簡単だが、2人で来る理由が分からなかった。

「デートよ、デート」

「「デート!!?」」

ヒナタの回答にカヅキを除く全員が驚きの声を上げる。ゴーゴー4の女性がそれについて聞いたです。

「え、ヒナタ今……デートって言ったの!？」

「そう。デートデート」

「うっひゃゝ、まさかアンタに先を越されるなんてね……」

「ごめんね、ミライゝ」

その口調はまるで女の子同士の嫉妬やそれに対する自慢のようなやり取り。ゴーゴー4の紅一点にして末っ子（これは長男だというヤライ曰く）、ミライとトップレンジャー、ヒナタの間に起こるちよつとした喧嘩の火蓋を切って落とすほんの数秒前の話。

そして、2人が喧嘩に勤しむ一方。ヤライとカヅキ、そして残る2人は雑談に耽っていた。（ヤライ曰く、ユウキとヨウジという名前らしい）

「それにしても、あの頃は本当に懐かしいですね」

「全くだね、ユウキ。あの頃、確かよく『バネだバネだリベンジだー!』とか言ってたよね?」

「黒歴史引つ張られたな、ユウキ兄イ」

ハハハハ、という笑い声が絶えない。勿論、その頃の詳細を一切として知らないケントとサティアは蚊帳の外だった。

「ケント、ついていける? この話」

「全くだ……いけた方がむしろおかしい」

「だよね……」

ため息を吐きつつ、サティアはそう口にした。そんな2人に話しかけるヤライ。

「よう、お2人さん」

「ヤライさん、どうしたんですか？」

「いや、お前らが蚊帳の外になってたからな、一応」

「一応っすか……」

少し間を空け、ヤライが言葉を発する。

「俺たちも昔はかなり暴れまくったもんだぜ。正直、懐かしい。今はこうやってバンド活動してるけどな、元はこの楽器——特製スタイラーだったのさ。まあ、もう今じゃただの楽器だけだな。この楽器を壊してまで悪行を止める気にはならなかった。スタイラーとしての機能さえ完璧に封じればこれはそのまま使えるのさ」

「大事にしてるんですね、その楽器」

「ああ、因みにこの楽器はバンドとしてのゴーゴー4を結成してから5代目の楽器だ。初代はもうぶっ壊れた」

さりげなく、ヤライは今の良いエピソードをぶち壊すような事を言い切った。今の言葉と共にケントとサティアは漫画のキャラのように扱ってしまう。

「まっ、楽器は命だからな。壊れちまった楽器は今でも大事に持ってるよ。俺たちの相棒のような存在だしな」

「兄さん、そろそろ行きませんか？」

響くユウキの声。

「おっ、そうだな。そろそろ行かないと次の公演も控えてるんだっ
たな」

「もう、行くんですか」

「ああ。また機会がありや会おうぜ。レンジャー。じゃあな」

ヤライはそう、言って去っていった。正直、何だかカッコイイよ
うな感じが一瞬したのは多分気のせいだろうとケントは考える。

「カヅキさん、ヒナタさんちよつといいですか？」

ケントの言葉に頷きつつも、何だろうか——という面持ちをうかが
わせるカヅキとヒナタ。ケントが2人を連れて行ったのはレンジ
ヤーベースだった。

「おつ、お帰り……………」

ドアが開き、アビルがその言葉を口にしようとした瞬間、アビル
の目に止まるカヅキとヒナタ。テーブルの上にはカレーライスがあ
った。カレーラーを入れるアビルの手が震えだす。その震えている
手にはカレーラーのたくさん入った鍋がある。咄嗟にデッドがカレ
ーラーの入った鍋を取り上げてテーブルの上に置いた。

「とととととととととと、トップレンジヤーアアアアアアアア！
！！！！؟؟？」

1度だけでなく、2度も、しかも今度は2人同時になのだからア
ビルも絶叫を上げた。しかし、一瞬で見抜けるといふ事はアビルの
レンジヤー歴はかなり長いのもかもしれない、一瞬そんな事を考えた
ケント。

「初めまして、カヅキです」

「ヒナタって言います」

「い、いえ！ こ、こここちらこそは、初めまして！ あ、アビル
言います！」

（完全にいつものリーダーじゃねえ……………）

この時、トップレンジャーの前にはいかなるレンジャーも変わってしまっていないかと思うケント。まさしく恐るべし、というベキだ。

「で、ケント君。僕らをココに連れてきた理由は？」

「あ、はい。実はですね……………」

ケントは全てを話した。ディストロープの事や先日起こったポケモンハンターの事件。しかし、あの悪夢だけは話さなかった。

「なるほどね。あの時の連中はディストロープってわけか」

「かなり厄介な連中ね。つまり、私達も手伝えば良いの？」

「はい、そうしてくださいれば有り難いですけど……………」

ケントの言葉に2人は「OK」と即答で答えてくれた。やはり、こういう時、トップレンジャーがいてくれた方が頼りになる。いやいざという時は頼らざるを得ないのだ。
デッドがアビルに言った。

「リーダー」

「な、何？」

「性格ぶっ壊れてる」

「え、マジ？」

「マジ」

「そりゃ無いべさよ、ガハハハハハ！！」

「戻った」

その場にいたノツゼレンジャーベースで働く全員がそう口にした。

「まあ、これで少しは良くなると万々歳ね」

「そうですね、アリサさん」

もしかすると、今思えば——なんて感じる人はこの中にはいなかっただろう。アリサの言葉はまるでこの先の未来を見据えていたような言葉だったから。

そして、カツキがこう提案した。

「どうせなら、ハジメ君やヒトミさんもここに集結させようか？」

「あつ、それいいわね！ 何年も会ってないし……良い機会じゃない」

「じゃあ決まりだね。僕からササコさんに連絡入れておくよ」

ケントがそういえば、というような口調で話す。

「ところでシンバラ教授は？ 今日そういえば姿見ないけど」

「シンバラ教授は今朝、ユニオン本部へ向かった。今後の対策を練るんだってよ」

「あ、そっか。ありがと、デッド」

「ああ」

そして、その頃。ケントは1つの決心をしていた。

それを象徴するようにその晩、ケントは今頃寝ているであろうマニユーラに、サティアに、皆に——こう静かに口にするのだった。

「さよなら。行って来ます」

その翌朝、ケントの部屋にあった一切のものが消えていた。その代わりにあった書置きにはこう書いてあったのだという。

『旅に出ます、探さないで下さい ケント』

そしてこの日を境に、全ての歯車が一気に回り始める。それは破滅の一時へ、崩壊の一時へ。

——カウントダウンは始まった——。

再会

場所は変わってジヨウト地方、シロガネ山。かつて6年前、戦いの舞台となった場所だった。

そして、そのシロガネ山の麓の高原を歩く2人の男。1人は白衣に眼鏡、と最早説明も必要ないだろう――ナトロンだ。そしてもう1人は黒く逆立った短髪に薄桃色のポロシャツにジーンズを身につけていて、さらに180センチ以上あるであろう、体格もしっかりとした男だ。ナトロンが何の用でこの地を訪れたのかは定かではないが、何かをするための下準備なのは間違いなかった。

話は数十分前に遡る。

シロガネ山に足を踏み入れたナトロンはまず、ログハウスへと向かった。目的はある人物と会う、それだけだ。

まずは丁寧ノックを2回。すると現れたのはペンギンのような姿をしたポケモン、ポッチャマ。

「久しぶりだね、ぽち。中にあの人はいるか？」

「ポチャチャ」

ぽち、と呼ばれたポッチャマ。大方、ニッケームなのだろう。あらかさまにこのポッチャマには歓迎されていないようなのはすぐに察せた。その証拠にナトロンの革靴に自身の足を置いている。しかも堂々と。目的の人物もいたし、イチイチ細かい事で起こる気にはならない。そういった部分ではナトロンは大人だ。

「では、失礼させてもらおうよ」

「ポチャー……」

ポッチャマも負けじとだろうか、ナトロンについていく。そして、その人物はソファに座っていた。

「お久しぶりですね」

「あら、ナトロンさんどうも。お久しぶりです」

その人物は十代半ばの少女だった。流れるような黒髪を肩の辺りで揃え、白のリボンでハーファップに纏めている。そして白のブラウスに薄桃色のカーディガン、ベージュのロングスカートをその少女は身につけていた。

「お元気そうで何より。まあ声で元気なのは分かっていたけどね」
「全くです」

軽く互いが値踏みするように微笑する。

「ここ、座っていいかね？」

ナトロンは1つのソファを指差した。少女は「構いませんよ」と返す。

「ナトロンさん、紅茶いかがですか？」

「ではお言葉に甘えていただきますか。個人的に君の出す紅茶は好きでね、私の厳しい評価の中でも最上位を誇っている」

「あら、それは嬉しいです」

そんな事を言い、少女はナトロンに紅茶の入ったコップを差し出した。

「どうだね、そっちは」

「みんな色々好き勝手やるので大変です」

「ハハハ、その気持ちは分かるよ。私の組織も実質実権は私が全部もらっているから」

「そうなんですか？ 意外です」

「いや、これは総帥が命令してるからさ。総帥の方がよっぽど凄い」

「その総帥さん、一度お会いしたいですね……」

少女は何か興味を感じるような口調でそう口にした。
その時、ノックする音が聞こえる。

「あら？　ぽち、見てきて頂戴」

「ポツチャ！」

そうして中に入ってきたのが今、ナトロンと共に歩いているこの男なのだ。

「……やはり、こういった事は気が進まないだろう？」

ナトロンはそう言った。

「持ち出したアンタがそれを言うか？　矛盾してるだろ、それじゃあ」

「いや、ただ単に考えていてね、イラ君。ちよつとした問題に答えてもらえないか？」

「問題？」

男——イラはそう返す。ナトロンは首を縦に振るところ喋り始めた。

「単純な話だ。何かが壊れたとする。例えば……そう、積み木で作ったお城が壊されたでしょう。さあ、元に戻したい。君ならどうする？」

「……………舐めてんのか？」

その声は最早いつでも爆発出来るような感じだった。イラが怒っ

ているのは間違いない。

「まあまあ答えてくれ」

「んなもん、作り直すに決まってるだろ！　どういっつもりだ、テメエ！？」

「まあまあ、本題はここからなんだ。今のはちょっとしたお遊びだよ」

「ケツ、お遊びかよ、下らねえ」

そんなイラの言葉をナトロンはスルーして彼は話しだした。

「では、さっきはモノだったが……次は信頼や絆、こういったものは直せると思うかい？　あ、聞いてないからな。答えなくて結構だ」

「哲学でも語る気か？」

「そうなるだろうな。まあ、聞いてくれ」

イラが無視しようが、今のナトロンには実際関係なかった。だからナトロンは迷わず語る。

「さっきの言葉……答えはNOに近いんだ、これが。確実に合ってるわけでなく、違っているワケでもない。裏切られれば精神は傷つく。寄りを戻そうにも簡単には戻れない。その時の相手を知っているから、人は関係を修復しづらい。気まずいよりも恐らくこっちの方が本音なんだな、これがまた」

「さあ、講義の時間はおしまいだ。さっさとやるぜ、急いでるんだろ？」

イラはナトロンの哲学をさっさと終結させ、そう言い切ると、腰のモニターボールからリザードンを出した。その表情は先程よりも苛ついているようにも見える。

だが、何度も共に仕事をしていたせいで、この青年が仕事に私情を持ち込むはあっても挟む事はしない事をナトロンは知っていた。今回もきつと、良い仕事をしてくれる。その成果は、今までで一番良いものをナトロンにもたらずはすだ。

先の未来に心の中でほくそ笑いながら、ナトロンはイラに向かって頷いた。

「……そうだな。そうするでしょう。では、頼むよイラ」
「ああ」

否、彼ら2人はイラの出したりザードンの背に乗って遙か上空へと繰り出すのだった――。

「計画は静かに進む……誰にも悟られずに。それが我らの野望。そして、計画の達成こそが全てが終わる時」

誰が発したかは分からない。

だが、それは静かに彼らの野望が加速しだしている事を――暗示しているような言葉だった。

再会（後書き）

というわけで今回のコラボ相手、旅がらすさんとの1話でした。

旅がらすさんの執筆されている『十色のキセキ』と重ねて是非ご覧下さい。

ていうかそうしないと今回の一連の話にはきつとついていけません（笑）

ナトロンとイラが何をおっぱじめるのかは追々判明致します、因みに。

では、次回もお楽しみに。

サティアの兄！？（前書き）

文字通りの内容です。

サティアの兄！？

「アイツ……今どこにいるんだろ……」

ノッゼシテイの港でサティアは1人、静かにそう呟いた。眼前に映る夕陽。彼女の隣にはアブソルとマニユーラがいる。

——ケントが突如として行方を消してから早1週間。ケントのパートナーだったマニユーラは一時的にはあるが、サティアのサポートに回る事になった。もっとも、これはマニユーラがそう望むような態度を取り続けた由縁でもある。

「ケント、あなたは今何処にいるの………？」

*

——ケントの書き置きは勿論、すぐに発見された。ケントの搜索は勿論、本人の意思に反してすぐさま行われていたが、ケントの行方はレンジャーユニオン総本部ですら掴めなかった。いや、掴めなかったというよりは常に妨害され続けていたのである。宿敵とも言える存在、ディストロップに。

「ケントのマニユーラは一時的にどうすんだ？」

「そうだべさ。問題はそこなんだべさよ」

デッドの急な質問にアビルも眉を顰めて、そう返す。リーダーとはいえこんな経験はまず無いだろうからこんな展開になっても仕方はないのだろう。

「なら、そこはマニユーラの意志に沿わせたら？ マニユーラが共にいたいって人がいればその人が責任を持って世話をする。勿論、そういう人がいたらけど」

そんな意見を出したのはアリサだった。普段なら有り得ない展開ではあるが状況が状況だったからあれこれ言えなかった。

「なら、マニユーラ。マニユーラは誰といたいべさ？ 誰でもいいべさよ」

アビルがマニユーラに優しく言う。当の本人は意気消沈していた。いや、彼の場合は『人』ではなく、『ポケモン』だから本人という表現は合っているか分からないがそれはこの場ではあまり関係ないだろう。

とにかく、マニユーラは沈んでいた。自身の相棒に――ケントに見捨てられたような気がしていたから。しかし、マニユーラの足は自然と進んでいた。そしてマニユーラの視線の先に、彼女はいた。相棒の隣に常にいた、サティアが。

「……え、ワタシがいいの？」

マニユーラは静かに首を縦に振る。まだ精神的には元気が無さそうだったが、マニユーラの意志は尊重するべきだった。

「なら、暫くサティアはマニユーラの面倒を頼むべさ。仕事は少し少なめにしておくべさ。その代わりにマニユーラのケアを頼むべさ

よ」

「はい、リーダー」

アビルもこの非常時にいつものおふざけキャラは発動しないからやはり頼れる時は頼れる——と思った矢先だった。

「ケアする時はオラがサティアちゃんにパフェを奢るから是非、一緒に——」

「この事態に何、ナンパしてんのよ。リーダー？」

アリスのいつも以上に強烈な制裁がアビルに下ったのは勿論言うまでも無い。

*

サティアにはケントのようにポケモンと会話できる能力など無い。寧ろ、それが出来るケントの方が異常というのが世の基本だろう。1週間の内ケントに関する情報は皆無に等しいものであったがそれでもケントと思われる謎の人物の手により町の平和が保たれたという話も聞いた。

ケントも頑張っているんだ——遠くからのほんの小さな情報がサティアやアブソル、そしてケントの相棒であるマニユーラには強い励ましにもなった。

「……最近は何も無いね。ね、アブソル。マニユーラ」
『ソルウ』

『マニユ』

サティアの言葉にアブソルとマニユは首を縦に振る。そう、ケントのマニユーラを預かってから数日、普段より大変ではあだが騒動と言う騒動が何1つとして起こっていなかった。傍から見れば万々歳なのだろうが、サティアからすれば嵐の前の静けさを感じる。今、静かな分ディストロープは必ず何かを仕掛けてくるはず。安直ではあるもののその考えは外れていない。

「さっ、帰ろっか。皆待つてるし」

『マニユ』

『ソルウ』

夕焼けの中、2匹は静かに歩み寄る。嵐の前の静けさ。その言葉は間違っていないかっただろう。

そしてレンジャーベースに戻ると、普段のメンバー以外に1人の男がいた。レンジャーの制服を着ていることから彼もポケモンレンジャーなのは間違いない。髪の毛はボサボサで金髪。顔はどこか強面を彷彿とさせそうな感じだ。俗に言ってしまうえば不良のような感じの男。

だが、サティアはこの人物を知っていた。間違いない。

「ろ、ロッジ兄!？」

「ヒヤハハハハハ!!! ひっさびさだねえサティ」

ロッジ——それがその男の名だった。ロッジは堂々と机の上に座り、さらには片足をもう片方の足にかけている。アビルが口を挟んだ。

「ロツジ、サティアと知り合いべさか？」

「ん？ ああ兄妹のようなもんさ。なあ？」

「とんつでもない悪戯兄貴だったけどね」

ロツジとサティア。他にもサティアには兄や姉、妹や弟といえるような者がたくさんいる。2人は孤児院で育てられたのだ。勿論、サティアは記憶を失つて後、この孤児院でお世話になったのだが。

元々サティアがレンジャーになろうと思ったのはロツジや他の兄、姉達が人のためになる仕事に就いていったからというのが理由だし、孤児院の近くに住む人間嫌いのアブソル——つまりは今の彼女の相棒を手懐けたのが他の者から見てもサティアにはレンジャーの資質があるんじゃないかと言われた事も間違いない。

だが、サティアは少し気になった。この義兄、ロツジは他地方の担当者なはずだ。何故このストリーゼにやって来たのだろうか。

「アビル、すまねえが構わないよな？」

「仕方ないべさ。サティア、今から北へ向かってくれべさ！！」

「き、北へ！？」

ロツジ、アビルの会釈の後に突然の通告。最早サティアには理解不能である。ロツジは懷から1つの箱を取り出し、それをサティアに投げ渡す。

「何コレ？」

「今回のミッションの中身。俺も行くからな」

「……開けるって事？」

「そーゆーこと」

サティアはその言葉にハアとため息を吐き、箱を開け――

直後、サティアの大絶叫が響いたのは間違いなかった。何故なら、彼女が最も苦手としている納豆が彼女の眼前に襲い掛かってきたのだから。

しかも、見ただけで気絶というほどに苦手なのである。その原因を作ったのもこの義兄、ロッジなのだ。

「ひっひっひ。大成功♪」

凄まじい眼光でロッジを睨みながら、サティアの意識は消えていった――。

サティアの兄！？（後書き）

ロッジとアビルの関係については次回。
仲良いですよねあの2人（笑）

ロッジに連れられて（前書き）

すいません！

大変長らくお待たせしました！！

ロッジに連れられて

——ここはどこだろう——？

確か……そうだ、あの悪戯兄貴に……ワタシは……

*

サティアが目を覚ました。それを横顔で見ながらニヤリ、と不敵に笑うものが1人。サティアが孤児院にいた頃に共に過ごし、そして現在はサティアの先輩の1人でもある、ロッジ。

「ヒヤハハハ、やっと起きたかサティ」

「……とりあえず一発殴つとくわ」

「へ？」

寝起きと共にサティアの鉄建制裁が彼の頬を直撃する。それと同時に2人の体が大きく傾いた。いや、傾いたというよりは振動した、とも言つべきか。

サティアは現状をあまり理解していないが、すぐに把握できた。車にいたのだ。そして肝心の運転者を殴れば、ハンドルも持てなくなる。派手に殴ったので。

ロッジはハンドルを持ち直し、左手でサティアに殴られた頬を撫でながら、呟いた。

「おーいてーいてー」

「自業自得でしょ。ところでここは？」

「ん？ ああ、今ストリーゼの北へ向かってる最中さ。お前の相棒2人も一緒だぜ」

『ソルウ！』

『マニユ』

ロツジのが後ろに目線を向けると、マニユーラとアブソルが元気に頷いた。さりげなくだが、マニユーラはシートベルトまでしている。

そして、ロツジはため息をつき、口にする。

「で？ 相棒を置き去りにした馬鹿野郎はいまどこなんだ？

……て、目下行方不明だったな。めんどくせえ」

「うん。ホント、どこに行っただか」

「まあいい。サティア。お前にはこれから俺の指揮下に入ってミッシヨンに参加してもらう。てか、ちよつとの間お前は俺が預かる」

「はあ！？ 話が飛びすぎてて分かんないわよ！ もうちよつと詳しく説明して！！」

「あー、分かった分かった。簡単に言うとな、デイストローブって組織がこのストリーゼ全域で活動を活発化させだしやがったわけだから、しばらくは南部でアビルが、北部で俺がそれぞれ指揮を取る事になったわけよ」

「…………それとワタシが連れて来られる事に何の関係性が？」

「経験を積ませるんだよ。本当ならケントを連れて行くこうと思っただが、入れ違いであの野郎がどっか行っちまったんだよ。でも、もう我慢がならんから俺が連れてきた。アビルは最後まで抵抗してたがな。2人でやるのは流石にきつい」

「…………そういえば、ロツジ兄はアビルさんリーダーとどういう関係？」

サティアは一連の会話の中で思った最大の疑問、それをロツジに投げかける。元々、レンジャーベースでの会話そのものが友人同士

が交わすような会話だったのであるからこの疑問は至って普通だろう。

「ん？ 俺とアビルか。スクール仲間だよスクール仲間。んでもって、同僚。」

——最も今じゃ、俺もアビルもリーダーレンジャーで他地方同士だから中々連絡がつかない、と」

「なるほどね……リーダーもさぞ苦労したんだろうな……」

どつと深いため息をサティアは静かに吐いた。それはロツジの悪戯をずっと受けていたからこそ分かるそんな苦労の表れでもあった。だが、ロツジは先輩らしく、そして何より一時的でこそあるがサティアの上司としての立場で話し出した。

「サティア。これから俺達ができるのはポケモンやいろんな人を守るための戦いだ。敵に容赦するな。まず、これを肝に銘じる。少なくとも、連中の方がケントに関する情報アドバンテージを保持している可能性の方が極めて高い。連中は俺らの邪魔じゃまをしている。細かい根拠こそ無いが一応、それが俺や他のお偉い様の予想だ。」

——いいな？」

「分かってるよ、ロツジ」

互いに口調が変わった。それは気を引き締めなおしたと共に、上司と部下という関係が今2人の中で大成された、という単純明快なことである。

そして、ロツジの車が止まった。車の扉を開いて、外へ出ると辺りに雪原が広がっていた。その中でそびえ立つ家々。

「ここは……？」

「ストリーゼ最北の町、リーゼタウン。ここを今後拠点に動く」

「……それより、寒くない？ 南国の地方なのにおかしくない？」
「それは昔からだ。ストリーゼのこの地域は様々な天候や地理的な事情で南国つちゅーのにこの雪原だからな。これはレンジャーでもどうしようがない」

ロツジは皮肉そうにそう口にした。見れば、彼の体が少しだけ小刻みに震えている。かというサティアは気温が一気に低くなった事を受け、体中がかなり震えていた。

「とりあえずレンジャーベースへ行くぞ」

ロツジの後に続いてサティアが歩く。やがて、家々の中から1つだけ色合いが大きく異なり、明らかに目立つ建物が見えてくる。

入口では既に1人の人間——否、レンジャーが相棒のポケモンと
パートナー
もう1匹のポケモンがお出迎えしてくれた。

「お帰りなさいロツジさん。そちらの方は？」

待っていたレンジャーがロツジに尋ねる。その女性は髪をショートカットに切り取っており、髪の色は水色という鮮やかな色をしていた。背丈もサティアより大きく、どちらかと言えばロツジと年の差もそこまで無いように感じる。

「ああ、俺の施設にいた頃の連中なかまの1人さ。ほれ、自己紹介」

「あ、うん。初めましてサティアと言います」

「初めましてサティアちゃん。アタシはコルダって言うの、ヨロシクね！」

「コルダさんよろしくお願いします」

『マニユマニユ』

『ソルウ』

マニニューラやアブソルも相手方のパートナーポケモンとうまく打ち解けているようである。

「えーと、片方はロツジ兄ので合ってるよね？」

「ん？ まあ一応はな。ウソツキー！」

『ウソツキー！』

ロツジに呼ばれてロツジに近づく木のような姿をしたポケモン、ウソツキー。見た目が本当に木そっくりである。そして――

『ハナ〜』

場所構わずのんびり舞い続けているポケモンが1匹。全身が緑色を基調としていて、頭部には綺麗な花を2つもつけているポケモン、キレイハナ。このポケモンがコルダの相棒のようである。

「さあて、じゃあ急造ではあるがストリーゼ地方レンジャーベースリーゼ支部、只今より活動開始だ！」

「「ラジャー！！」」

ロツジ、サティア、コルダの3人がストリーゼの北部で動き出す――。

闇の中で受話器を取る白衣の男、ナトロン。

「……………やはりそうでしたか。分かりました……………では、近々調査を
始めます。」

……………ええ、しくじりませんよ。ではリーゼ遺跡を洗い出せばいい
のですね?」

静かに受話器越しではあるが歪んだ笑みを彼は静かに浮かべるの
だった。

ロッジに連れられて（後書き）

というわけで暫くはストリーゼの北部に物語の舞台を移します。

その影響で暫くアビル、アリサ、デッドの3人の出番がありません。

その代わりにロッジ、サティア、コルダには一生懸命頑張ってもらいます！

リーゼ遺跡（前書き）

気付けば4ヶ月放置。本当にすいませんッ！

今回はリーゼタウンに拠点を移したその記念すべき第1回ですw

リーゼ遺跡

「リーゼ遺跡？」

それはとある日のこと。

新天地、リーゼタウンでの生活に順応し始めていたサティアに口ツジがその話題を持ちかけた事から始まった。

「そう。このリーゼタウン北部の町外れに遺跡があんだよ。サティアも話だけなら聞いた事があるだろ？」

「うん。でもあんまり調査が進んでないって聞いている」

「噂だとあの大山脈のことだかららしいけどな、その辺り」

「大山脈ねえ。確かにあそこは難攻不落。ポケモンのために用意されたポケモンだけの楽園ってイメージがあるわね」

「だろ？」

彼女らが言う大山脈というのは、ストリーゼ地方の中心部に位置する超巨大な霊峰のことである。

その周囲を崖が囲み、そして外部からの侵入者は山のポケモン達が山中に侵入する前に追い払うため、その内層を見た者は少なくとも、この現代では誰もいない。

崖の下へ落ちていった者も計り知れず、いつしかその崖は“死の崖”と言われてしまうほど畏怖の対象となってしまうている。

「サティ。今日は仕事が速く終わったんだ、まあ見てきな。遺跡見学くらいいい勉強になるぜ？」

怪しげな笑みを浮かべるロツジをサティアは軽くぶん殴ってからリーゼタウンのレンジャーベースを後にする。

殴った理由は簡単だった。ここ数日、久々の再会もあつてか彼の悪戯が度を越えているのである。ストレス発散というべきだった。

「でも町の北部って……湖よね？」

そんな事を1人呟くサティア。

リーゼタウンの北部に遺跡はある、とロッジは言った。しかし一方で町の北部には大きな湖があるのだ。

人々はその湖を“リーゼ湖”と呼んでいる。いや、正しく言えばここだけでなく大きな湖は奇妙なことに3箇所存在するのだ。

1つは先ほど述べたリーゼ湖、2つ目はストリーゼ西の町、アルトピアタウン郊外に位置するアレア湖。そして最後の3つ目はアルトピアタウンから東へずつと行った先にあるストリー湖。

“ストリーゼの3大湖”と言われ、人々に親しまれているこの湖。しかし、奇妙でもある。ストリーゼ地方には湖と言うべき、そういった自然的な場所がその3つくらいしかないのだ。

「まあ、この湖を渡れば分かるかな」

今日はアブソルとマニユーラは連れて来ていない。町の子供や腕自慢の大人たちの虜に彼ら2匹はなっているのだ。コルダが一応見てくれているので安心はしている。

理由は2つ。まずアブソルはかなり珍しい色違い。そしてマニユーラはバトルの腕が単体で戦うだけでも相当なものなので大人たちが相手をしてほしい、と離れないのだ。大方今日もマニユーラはクタクタになって帰ってくるだろう、そんな算段がサティアはして思わず含み笑いをしてしまう。

そんな時だった。

「珍しいですね、まさかお1人ですか？」

「——ッ!？」

背後からする聞き覚えのある嫌な声。

サティアがすぐさま後ろを振り向くとそこには——白衣を身に纏ったあの男、そう——ディストローブの幹部の1人、ナトロンがいたのである。

サティアは息を呑む。場所が場所、そして状況だけにかなり危険である事は何となくでも分かる。

そんなサティアを見て、ナトロンは両手を挙げた。降参、という時のあのポーズだ。

「ご安心を。今回私はただ見たいものがあるので来ただけですよ。何もしません、信じてもらえないでしょうが——まあそこは保証します」

「信じられないわよ」

「ええ、分かります。ところで——」

ナトロンはサティアから視線を外し、湖を——リーゼ湖を見て言う。

「このリーゼ湖。いや、“ストリーゼの3大湖”にはある一説があるのです。まあご存知ないと思いますので簡潔に纏めますと、3大湖は神の住まう湖の1つだと言われています」

「神の住まう湖？」

「ええ。確かユクシー、アグノム、エムリット……と言いましたか。詳しくは分かりませんが、私はその筋の専門家ではありませんから。しかし——私は一応仮にも研究者。物事に興味はあります、知りたい事は山ほどあるのです。まあ、今回はリーゼ遺跡を見てみようと思ひまして」

「……………」

「半分は我が主、あなた方から見れば……そうですね、デイストロ
ーブのボスからの命令でもあります。まあ残り半分は私の興味本位
でもあります。安心を。我が主も貴重な遺産を破壊しろなどという
命令は下しません。ただ、『見て来い』と言われただけですよ」
「……………」

サティアは答えない。ナトロンは続けた。

「まあ、今回はあくまで視察というのが指令なので私も何かをする
つもりはありません。ただ、あなた方がそれをあくまで妨害するな
ら——必要最低限のことだけは。自己防衛だけはさせてもらいま
すよ」

「……………いいわ。許したくないけど、今回は何かをするつもりは無
さそうだし、黙っておく事にする。でも私も行くわ。疑ってはいる
もの」

「了解です。では行きましょうか、リーゼ遺跡へ」

サティアはナトロンの言葉に黙って頷いた。

*

リーゼ遺跡には何も無かった。

まずはこれが結論と言える。

あったのは——たった1つの石碑。そこに記されていたのは古代
文字だという。ナトロンの見解だが。

ナトロンはリーゼ遺跡へ着くと、無駄にたくさん話を始めた。まずは、石碑が古代文字で記されているという事から始まる。

「これは中々面白いですね。ストーリーゼがかなり前から存在していたという画期的な証拠になる。大方、今から5000年近く前の石碑でしょうか？　こうも綺麗に残っているとは世界が認めるリゾート地。一味も二味も違う。大方この古代文字は……未だ解読の進んでいない姿型文字しがたですね。ふむふむ、つまりここには姿型文字を使う人々が渡来していたと考えるべきなのでしょう。しかし、ここまです綺麗な石碑に残してわざわざ伝聞するという事は何かしら大きな事が起こったと考えざるを得ないですね。しかし本当に色んなポケモンの姿が現れている。カブト、オムスター、プテラ、アノプス、ズガイドス、そしてタテトプスにジーランス……本当に何と書いてあるのか分かりませんね。とりあえずざっと見の判断で言うなら、ここにはそれなりの文明が5000年ほど前にはあった、と仮定するべきでしょう。以前どこかの研究者が述べていた湖の3大ポケモンとの関連性やストーリーゼ大山脈との関係も気がりです。もしかすると、ストーリーゼ大山脈の山頂はかの有名な槍の柱と同じ素材でできた古代遺跡があるというのでしょうか？　いや、それは考えすぎでしょう。いくら何でもそこまでシンクロしていたら不気味ですし……いや、しかし大地と山脈が裂ける原因となった地震は今から3000年ほど前という推察。もしかすると、当時の人々が大山脈を踏破した？　まだまだ研究の余地が残されていますね、それに……」

完全にサティアは言葉を失っていた。ナトロンはまるで自分へ情報を開示するように、いや——サティアがその場にいることすら忘れて完全に観察に没頭している。

サティアも口を出す事が出来なかった。すると突然、ナトロンが

ハッとしたように後ろを——サティアのいる方へ首を動かし、そしてサティアを見た。

「すみませんね、昔からこういうものを見るとつい口にする癖が。まあ今のは半分戯言。半分は真実です。今日はしがない研究者として来た身。専門家ではありませんゆえに細かい質問は答えられませんが、質問に少し応じましょうか？ 何でもいいですよ？」

信じられなかった。

いくら——どんなにオフや視察といっても、ここまでの情報の公開だけで有り得ない。

しかも、その上更に質問に応じるというのだからサティアはもう疑うしかなかった。

「じゃあ……聞くわよ」

サティアはそれでも意を決し、聞いた。最も重大である質問を。

「アナタ達のボスは誰なの？」

「……………いきなりその質問からですか。まあ、答えると言いましたし、全ては開示できません。しかし、約束は出来るだけ極力守る身ですので少しヒントを与えましょう」

「ヒント？」

「ええ。私は我が主を慕っています。我が主は——世界を平和にしようとしておられます。勿論、平和のために犠牲は必要だ。主は犠牲を生む事をよしとはしない方でしてね、というよりは我が主は犠牲を既に払っているそうです。私も主に救って戴きました。だから忠誠を誓っている。恩人に返すべきは恩。仇では返せません。我が主は——そうですね、世界のために、世界に^{もたら}変革を齎そうとしている。それだけでもいいのでご記憶を」

「世界のために？ 冗談じゃない、そんなの……」

サティアは震えていた。ナトロンの言葉はどこか恐ろしかった。ナトロンがその主という人物を慕っているのは分かる。しかし感じたのは狂気と言わんばかりの執着だ。

「まあ、仕方ありません。いきなりドクロを引いた以上、もう質問は無理ですね。では失礼します」

「ま、待って！」

「どうしました？」

足を止めるナトロン。流れる静寂。

そして。意を決したようにサティアはナトロンの問い詰めた。

彼女にとって最大の質問を。

「ケントの行方を知ってるの？」

「……こちらも探していますよ。あの存在が1人なら消す事も容易いですからね」

ナトロンはそれだけ言うと石碑のあった部屋から――遺跡から立ち去っていった。

サティアは何故か分からないが、膝が震えていた。

場所はリーゼタウンのレンジャーベース。中にはロッジが椅子に腰掛けていた。

サティアもロッジの近くの椅子に腰を掛ける。

「で、収穫はどうだったよ、サティ？」

「……別に。意味不明な文字ばかり」

「そうか。まああそこの文字の解読に成功したら凄いもんだぜ。何せ解読不可能って言われてるからな」

「私、疲れたから……もう寝るね？」

それだけ言うとサティアは椅子から立ち上がり、レンジャー達の寝室へと足を踏み入れる。

そしてベッドの中へと蹲すくまるように入っていく。

（私……何だろう……凄く怖い……ケント……どこにいるの？）

そして、彼女の中には恐怖だけが不思議と残る。原因は——よく分からない。

変動は近づく。

異変は起こる。

もう、物語の歯車が止まる事は無い。

絡み合う言葉と恐怖とそして世界は——全てを飲み込み始めた。

彼女の物語も遂に動き始める——。

リーゼ遺跡（後書き）

色々とありますが簡単に補足説明。

姿型^{しがた}文字のモデルはインダス文明のインダス文字です。

あれも解読が実際難航しているそうなのでそれを少しグレードアップしました。

まあ結論から述べると突然閃いたんですけどねww

伏線もじわじわ回収していかないとまずいかなあと最近はおもいます。

それではまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8207h/>

ポケモンレンジャー・フィーリンター

2011年4月27日17時45分発行